多賀城市文化財調査報告書第８集

市川橋遺跡

― 昭和59年度発掘調査報告書 ―

昭和60年3月

多賀城市教育委員会

市川橋遺跡

— 昭和59年度発掘調査報告書 —

序

陸奥国府として栄えた多賀城跡は、部分的にではありますが環境整備が進み、市民の社会教育の場、あるいは憩いの場として活用されて来ております。多賀城跡の周辺地域には、数多くの埋蔵文化財が包蔵されており、これまで、数ケ所において発掘調査を実施しております。

今年度発掘調査を実施した市川橋遺跡の高平地区においては、平安時代以降の水田跡と居住域を示す整地層、そして、それに伴う建物跡、溝跡が多数発見されました。とくに、水田跡の発見は同遺跡地内の伏石地区につづく発見であり、多賀城跡南面地域の集落構成を復元するうえで大きな手掛りを与える資料であります。

本調査は、将来の宅地造成に伴う事前の記録保存を前提とした調査であります。今後、本地域一帯が徐々に開発されていくことが予想され、史跡を取り巻く環境や景観を保護していくことも大切であると思います。これからも、このような開発事業と文化財保護を、両立さすべく鋭意努力していく所存であります。

本報告書が多くの研究者、および関係者のみならず広く一般の方々に活用され、文化財保護の一助となることを願うものであります。

最後に、本遺跡の調査、整理、報告書作成までの間、多くの方々からの協力や助言、指導を得ましたことに対し心から感謝申し上げる次第であります。

昭和60年３月

多賀城市教育委員会

教育長　玉　蟲　　誼

例　　言

1．本書は、多賀城市教育委員会が、昭和59年度の国庫補助事業として実施した「山王遺跡他発掘調査」の結果をとりまとめたものである。

2．調査区は、「市川橋遺跡」に包含されている高崎字高平に位置し、ＩＢ－ＴＨの略号を用いて記録している。

3．本文の執筆は、文化財保護係職員の協力を得、高倉敏明、滝口卓、相沢清利が担当した。また、編集は、石本敬、相沢が中心となって行った。

本文執筆	高倉敏明	Ⅱ、Ⅴ、Ⅵ
	滝口　卓	Ⅳ2(9)、(11)～(15)、3(1)～(6)、Ⅴ、Ⅵ
	相沢清利	Ⅰ、Ⅲ、Ⅵ1、2(1)～(8)、(10)、3(7)～(10)、Ⅴ、Ⅵ

4．本報告書は、次の通り分担して作成した。

遺構・遺物トレース	滝口裕子・我妻悦子
遺物実測	滝口(裕)・我妻
遺物写真	相沢
遺構写真	滝口(卓)・相沢・芳賀英実
図面整理	滝口(卓)
遺物整理(復元・拓影)	滝口(裕)・我妻・柏倉霜代・須藤美智子・熊谷純子・黒田啓子

5．プラントオパール分析は、藤原宏志氏(宮崎大学農学部)に御願いし、寄稿していただいた。

6．鉄製品の処理に関しては、村山斌夫氏(東北歴史資料館)、芳賀英実氏の御協力をいただいた。

7．調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。

8．調査及び遺物の整理において、下記の方々に御助言、御協力を賜わった。

岡村道雄、佐藤和彦(東北歴史資料館)、進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、後藤秀一(宮城県多賀城跡調査研究所)、鎌田俊昭(多賀城市文化財保護委員)、斎藤孝正(名古屋大学文学部助手)、早坂春一、佐藤甲二、斎野裕彦、及川　格(仙台市教育委員会)、丹羽　茂、佐々木和博、村田晃一(宮城県文化財保護課)

9．本調査の概要については、現地説明会資料において一部公表されているが、本書がこれに優先するものである。

10．本報告書中の土層の土色については、「新版標準土色帳」(小山・佐原：1970)を使用した。

11．調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市教育委員会が一括保存している。

調 査 要 項

1．遺跡所在地：多賀城市高崎字高平12－13

2．調査期間　：昭和59年10月22日～昭和60年１月21日

3．調査面積　：800㎡（対象面積1100㎡）

4．調査主体者：多賀城市教育委員会　教育長　玉蟲　誼

5．調査担当　：多賀城市教育委員会社会教育課文化財保護係

社会教育課長　　柳原　邦男

文化財保護係長　菊池　光信

主　　査　　高倉　敏明

技　　師　　滝口　　卓　　石川　俊英　　石本　　敬

嘱　　託　　千葉　孝弥　　相沢　清利

6．調査協力者：宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、多賀城市第二給食センター、加藤　基（地権者）

7．調査参加者：

芳賀英実、赤間かつ子、阿部敏子、阿部美智子、阿部美津子、阿部米子、猪俣敏子、浦山一馬、小野玉乃、熊谷あつ子、後藤はつみ、桜井三千夫、桜井栄子、佐々木四郎、佐藤東三、佐藤たま子、下道博信、鈴木　劭、菅原絹代、高野敏子、鶴巻まき子、千葉享一、角田静子、早坂ゑみ子、渡辺園恵、佐藤三夫、熊谷きみ江

目　　次

序

例言

Ⅰ．市川橋遺跡の立地と環境 …… 1

Ⅱ．調査に至る経緯 …… 3

Ⅲ．調査方法と経過 …… 3

Ⅳ．調査成果 …… 6

1．基本層位 …… 6

2．発見遺構 …… 9

（1）Ⅱ層検出の水田跡　（2）Ⅲ層検出の水田跡

（3）Ⅳ層検出の水田跡？　（4）Ⅴ層検出の水田跡

（5）Ⅵａ層検出の水田跡　（6）酸化鉄帯状集積帯

（7）足跡　（8）耕作痕

（9）Ⅳ層上面検出遺構　(10) 整地層

(11) 整地層ａ上面検出遺構　(12) 整地層ｂ上面検出遺構

(13) Ⅶ層上面検出遺構　(14) Ⅷ層上面検出遺構

(15) ピット

3．出土遺物 …… 36

（1）土師器　（2）須恵器

（3）赤焼き土器　（4）陶磁器

（5）硯　（6）瓦

（7）木製品　（8）石製品

（9）土製品　(10) 金属製品

Ⅴ．考　察 …… 49

Ⅵ．まとめ …… 51

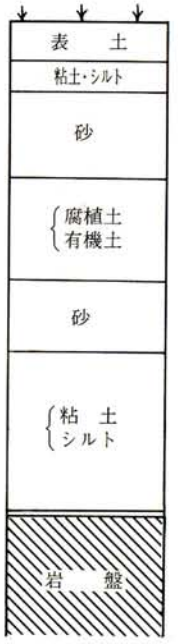
Ⅶ．プラントオパール分析結果 …… 53

Ⅰ　市川橋遺跡の立地と環境

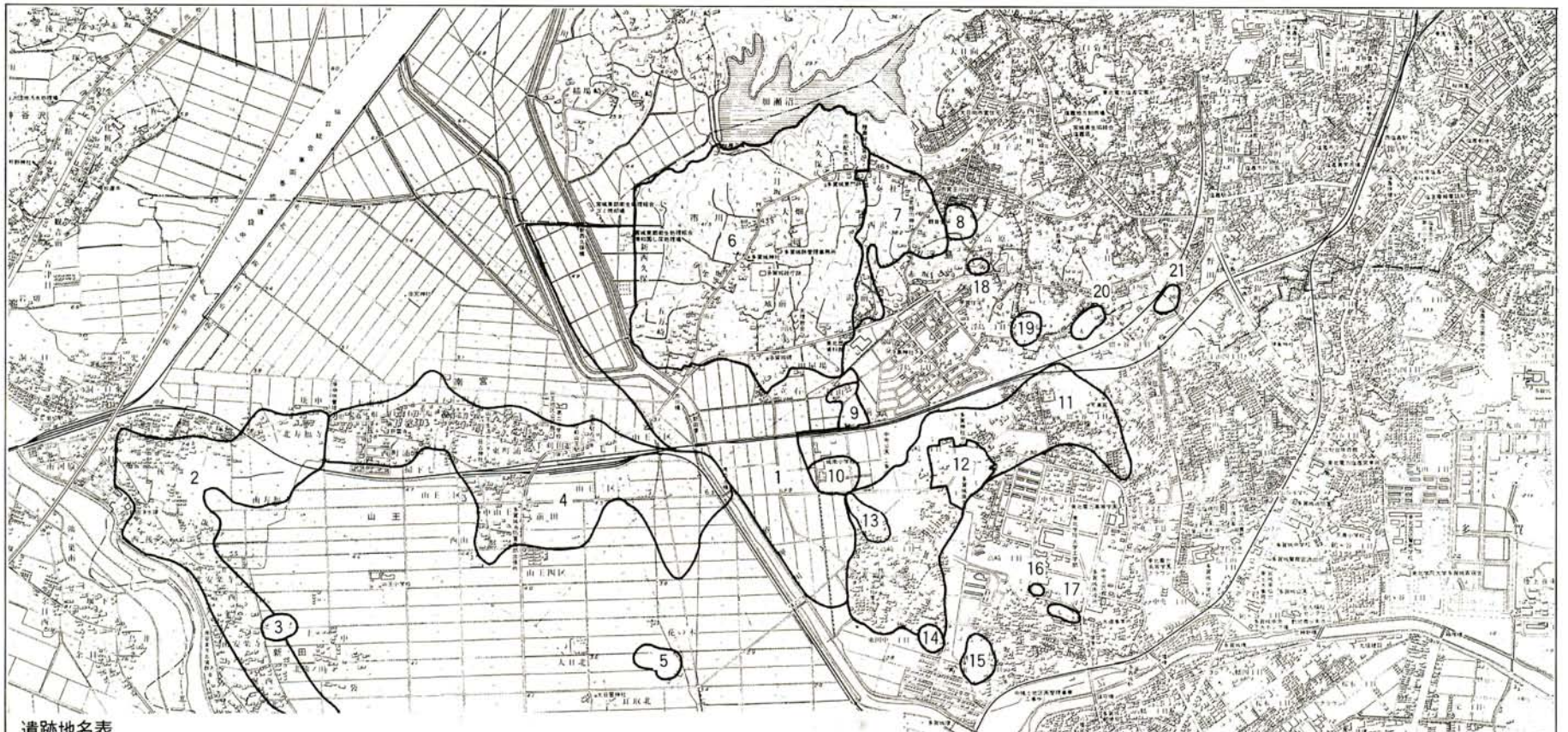
市川橋遺跡は、特別史跡多賀城跡の西側から南面一帯にかけて位置し、南北約２km、東西約１kmの広範囲に渡る遺跡で、七北田川、砂押川によって形成された自然堤防上に立地する。多賀城跡に隣接することから、いわゆる国府域として考えられており、多賀城を側面から解明する上で重要な位置を占めている。

本遺跡の北東側は、松島丘陵から派生した低丘陵が延びてきており、これらの低丘陵の一部は、多賀城市周辺の沖積低地下にも埋没しているという(註１)。その埋没段丘の頂部が露出している例として、大臣宮地区(註２)があげられ、槍先形尖頭器(旧石器時代終末～縄文時代初頭)が出土している。この埋没段丘がどのくらいの深度に位置するのか不明な部分が多いが、今回の調査区東側でのボーリング調査の成果によると、表土下約6.3m（標高－3.1m)で岩盤に到達している(第1図)。この岩盤の比定時期については、おおよそ下末吉海進期が考えられている(註１)。

多賀城跡周辺の沖積地は潟湖性低地と呼ばれ(註３)、前面を浜堤に保護された潟湖性低地の上に、直接河川の堆積物がのってくるという。いわゆるスクモ層と呼ばれる泥炭層がこの地域の土壌を形成していることは、本調査、あるいは現在までの付近の調査で確認されている(註４)。第１図の腐植土、有機土はスクモ層に該当するものと考えられる。また、岩盤から上層は、途中にスクモ層が介在するが、基本的に粘土・シルト層と砂層の互層からなっており、この周辺の堆積状況を大まかに示していると思われる。さらに土地分類図によれば、粗粒グライ土壌の範囲に含まれ、作土直下から50cm～80cm程度までにグライ土層をもつ土壌で、主として沖積地に分布し、殆んど水田に利用されている。比較的上層が酸化的で灰褐色を呈しているものが多いとされている。本調査区の南に隣接する水入地区の調査(註５)では、自然堤防の微高地上に建物跡が発見され、その北側は湿地帯であったことが確認されている。以上のことから、本調査区の立地する土壌環境は、自然堤防の微高地と湿地帯が複雑に入り組んだ環境の中にあるといえよう。



第１図　土層柱状図



遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	市川橋遺跡	集落跡・水田跡	奈良・平安	13	高崎古墳群	高塚古墳(円)	古墳
2	新田遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	14	東田中窪前遺跡	散布地・館跡	中世
3	安楽寺遺跡	寺院跡	古代・中世	15	志引遺跡	包含地・館跡	旧石器・古代・中世
4	山王遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	16	稲荷殿古墳	高塚古墳(円)	古墳(後)
5	大日北遺跡	散布地	奈良・平安	17	桜井館跡	館跡	中世
6	特別史跡多賀城跡	国府跡	〃	18	高原遺跡	散布地	奈良・平安
7	西沢遺跡	散布地	〃	19	小沢原遺跡	〃	〃
8	法性院遺跡	散布地・寺院跡	〃	20	野田遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
9	館前遺跡	官衛・館跡	平安・中世	21	矢作ヶ館跡	〃	〃
10	高平遺跡	集落跡	奈良・平安	22	八幡中遺跡	〃	〃
11	高崎遺跡	寺院跡・館跡・集落跡	奈良・平安・中世	23	八幡館跡	散布地	奈良・平安
12	特別史跡多賀城廃寺跡	寺院跡	奈良・平安	24	東原遺跡	〃	〃

第2図　遺跡分布図

なお、砂押川は、昭和29年に河川改修が行なわれ現在の流路になったが、それ以前は、堤防が不完備で小雨量でも耕地に氾濫し被害を受けることが多く、またこれに通じる排水路も不完全なものであったとされている(註6)。

Ⅱ 調査に至る経緯

多賀城跡の南面に広がる水田地帯は、海抜2～4mにわたる低湿地から自然堤防による微高地状の地形を呈しており、ここ数年にわたる調査によって、多賀城跡に関連する遺構・遺物の存在が次第に明らかになって来ている。

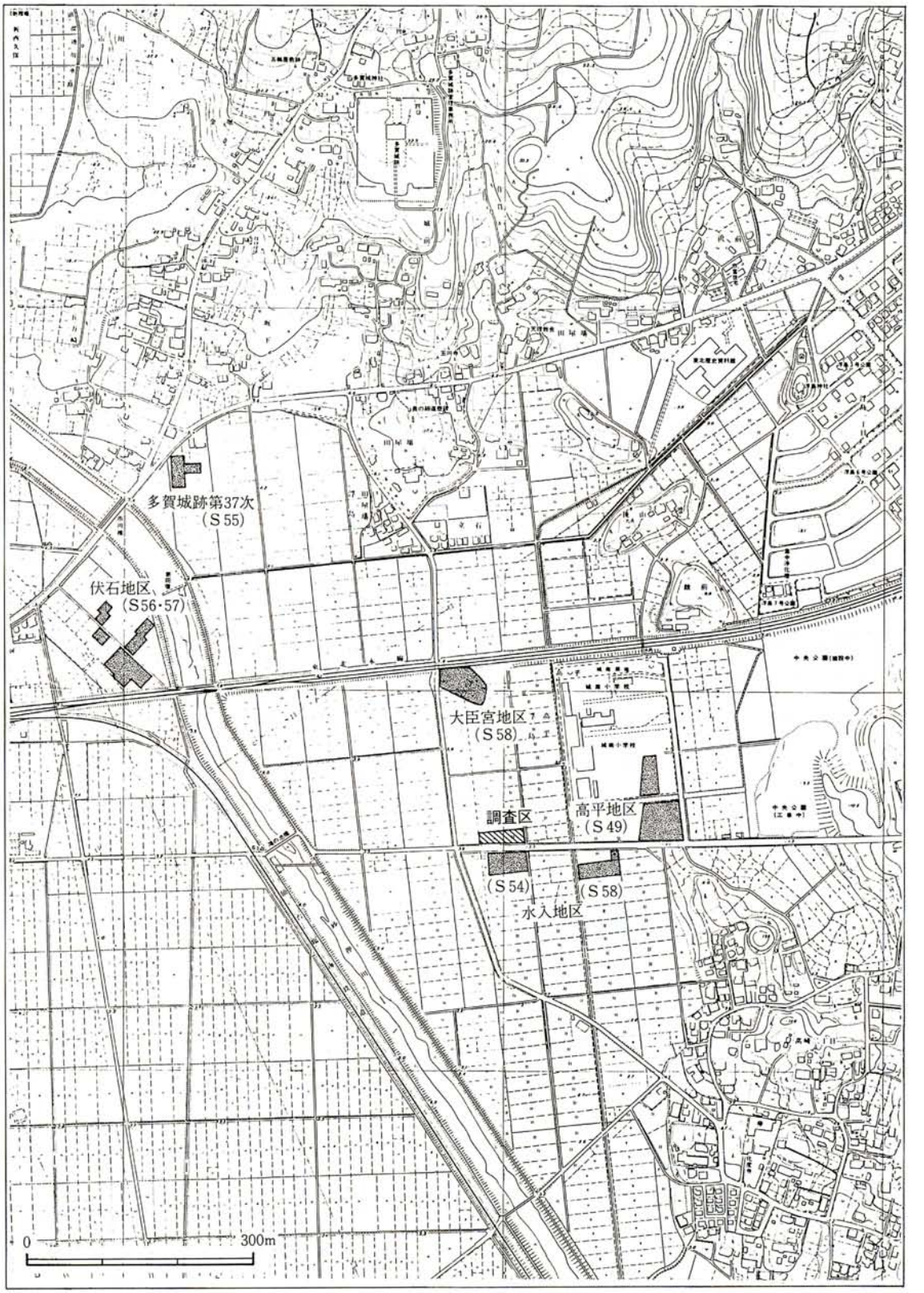
水田部の調査例としては、昭和54年に宮城県文化財保護課によって、高崎字水入地区の調査が実施されたほか、多賀城市教育委員会が行なった市川字伏石地区の遺構確認調査や、昨年実施した高崎字水入地区の調査が上げられる。これらは、いずれも開発計画や住宅建設計画等の原因によって実施されたものである。

本調査区は、昭和54年に調査を実施した高崎字水入地区の市道新田上野線をはさんで、反対側の北側水田部に位置している。水入地区の調査によって、多量の遺物を含む包含層や井戸跡・建物跡・大溝跡が存在していることが知られていたため、当該地においても古代の遺構が包蔵されている可能性が考えられていた。

当地域一帯は、近年小規模開発が発生しており、次第に宅地化の傾向が強まって来ている。当調査区についても、近い将来開発の計画があることから、地権者との協議を行なった。その結果、調査に対して全面的に協力する意志を確認し、昭和59年9月、地権者から発掘調査の承諾書の提出を受けて、10月22日から調査に踏み切ったものである。

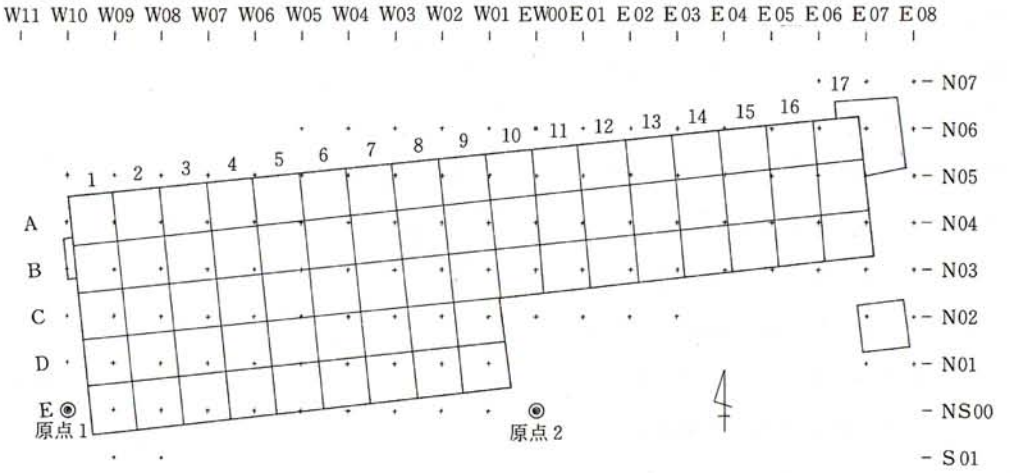
Ⅲ 調査方法と経過

今回の高平地区の発掘調査では、調査区南側に隣接する水入地区の調査(註5)において、建物跡・井戸跡・溝跡・包含層が発見されており、同様な遺構の存在が予想された。そのため、機械力の導入は表土(現在の水田耕作土)のみとし、それより下層は手掘り作業で進めることにした。調査は、昭和59年10月22日より開始した。まず、現水田の畦畔区画にそった調査区を設定し、同時に排水溝を兼ねた土層観察用トレンチ(幅50cm、深さ1m)を設けた。調査区を一辺3mのグリットで区画し、南北をアルファベット、東西を西側からアラビア数字で示した(第4図)。遺物取り上げの際のグリット名はこれを用いている。調査対象面積は約1100㎡で、その内約800㎡について調査を実施した。10月27日までに排水溝を掘り終え、その断面観察により、


多賀城跡第37次
(S55)
伏石地区
(S56・57)
大臣宮地区
(S58)
調査区
高平地区
(S49)
(S54)
(S58)
水入地区
0
300m

第3図　調査区位置図

大まかに５層に分けられた。この所見をもとにして、Ⅱ層面の遺構検出作業を開始する。Ⅱ層面の遺構を検出できず、全景写真を撮影する(10月31日)。Ⅱ層を掘り込み、Ⅲ層面での遺構検出作業を始める。南北の３号畦畔、東西の４号畦畔の頂部を検出し、西側では、整地層を検出した。整地層面での精査を行ない、ＳＢ01を検出する。並行して、北西壁のセクションを観察し図面を作成する(11月17日)。全景写真を撮影し、Ⅲ層の掘り込みを始める。東側ではⅣ層が確認され、整地層より南では、Ⅴa 層とⅦ層が部分的に見られた。12月25日に プラントオパールの分析のための土壌採取を行なう。 Ⅴa 層上面からは灰白色火山灰におおわれた平安時代の水田跡が発見された(11月27日)。整地層ｂ面及びⅣ層検出遺構の掘り込み調査を行なう。さらに並行しながら実測図作成のため、原点１(Ｘ：－189,200,00，Ｙ：＋13,970,00)と原点２(Ｘ：－189,200,00，Ｙ：＋14,000,00)を結ぶ線を基準線とし、遣り方を設定する。遣り方水糸高は、標高3.30mである。また、水田面及び整地層の地形の傾斜を知るため等高図を作成する(12月10日)。12月15日には現地説明会を催し、調査の概要を一般に公表する。西側ではⅦ層上面での遺構検出を目的に整地層を掘り込み、溝跡、ピット等を検出する。東側では南北トレンチを２ケ所に入れ、Ⅵa 層面での畦畔を検出する。この畦畔は上層と同位置、同方位にあることを確認する。12月21日からは作業員を打ち切り、調査員による遺構の切り合い、セクションの見直しを行ない、昭和60年１月21日に調査を終了した。なお、調査日程の制約上からⅥa 層下の遺構は一部検出したのみにとどめた。



第４図　調査区設定図

Ⅳ 調 査 成 果

1．基本層位

第Ⅰ層　現在の水田耕作土(表土)で灰色の粘土質シルトからなる。層厚は10～20cmをはかり、上層⅔が作土、下層⅓が床土に分かれ、床土には酸化鉄斑紋の集積が認められる。

第Ⅱ層　灰色のシルト質粘土層で、調査区内ほぼ全域に堆積する。層厚は5～10cmをはかり、調査区東端、西端では部分的に途切れるところもある。酸化鉄斑紋は層全体に認められるが、特に上層～中層に集積が強くその直下に斑点状のマンガン粒が帯状に集積する。中層～下層は青味を帯び同じく酸化鉄斑紋が集積する。

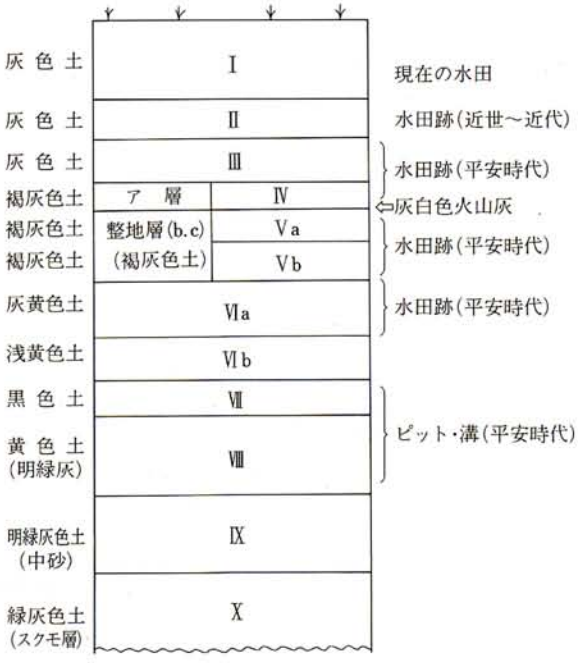
第Ⅲ層　灰色のシルト質粘土層で、層厚は10～15cmをはかる。ほぼ全域に堆積するが07ラインより西では部分的にしか認められなくなる。上層は粘性の強い黒褐色土で、下層のシルト質土層との層界は不明瞭である。下層には縦縞状の酸化鉄斑紋が集積するが、マンガン粒はさほど発達していない。カーボンを若干含む。

第Ⅳ層　褐灰色の粘土質シルト層で、層厚は5～10cmをはかる。10ライン(整地層b東端)より東に堆積し、Va層との層界は起伏がある。酸化鉄斑紋は縦縞状に細長く発達する。マンガン粒は少量認められる。

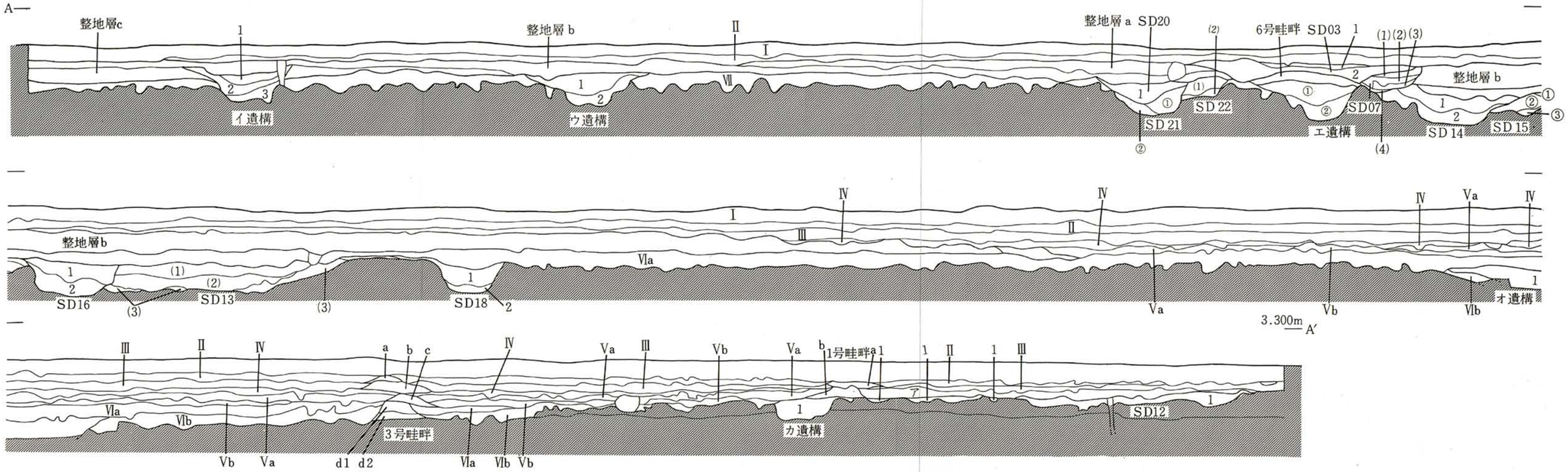
ア層　褐灰色土の粘土質シルト層で、層厚は5～10cmをはかる。3号畦畔の東側から微高地縁辺(17ライン)にかけて限られた範囲に分布する。南壁セクションの観察でVa層を覆っていることから灰白色火山灰降下後の堆積と考えられる。

第Va層　褐灰色の砂質シルト層で、層厚は5～10cmをはかる。11～15ライン、Eラインより南に堆積し、上下面とも起伏がある。上面では足跡を検出し、層中には灰白色火山灰がブロック状に多量に混入している。酸化鉄斑紋は縦縞状に発達し、マンガン粒はさほど多くない。カーボンを含む。

第Vb層　褐灰色の粘土質シルト層で3～10cmの厚さをはかる。12～15ライン



第5図　基本層位模式図

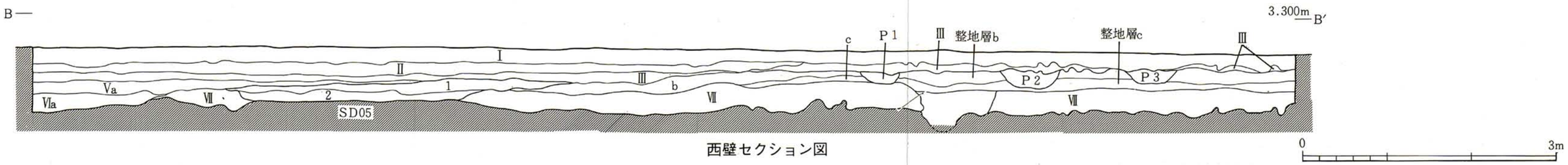


北壁セクション図

遺構名	層	土色	土性	その他
イ遺構	1	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	マンガン・カーボン、土器粒片を含む
	2	2.5Y8/6 黄色	シルト	黒色土(粘質土)が横縞状に入る。黄灰色(L-7)の土
	3	2.5Y2/1 黒色	シルト質粘土	
ウ遺構	1	7.5YR5/1 褐灰色	シルト	黄灰色土がブロック状に混じる
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	〃
SD20	1	5Y2/1 黒色	シルト	カーボン、粘土粒を含む
SD21	①	2.5Y3/1 黒褐色	〃	黄灰色土が互層になる
	②	〃	〃	黄灰色土が斑状もしくはブロック状に入る
SD22	(1)	5Y2/1 黒色	砂質シルト	カーボン、焼土粒を含む
	(2)	5Y3/1 オリーブ黒色	〃	黄灰色土をブロック状に含む
SD03	1	10YR2/1 黒色	シルト質粘土	褐色のシルト土が混じる
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	カーボン、マンガン粒、酸化鉄斑を含む
SD07	(1)	7.5YR6/1 褐灰色	シルト質粘土	マンガン、酸化鉄斑を含む
	(2)	7.5Y8/1 灰白色	火山灰	灰白色火山灰の厚く堆積する層。若干褐色土粒が混じる

遺構名	層	土色	土性	その他
SD07	(3)	7.5Y4/1 褐灰色	砂質シルト	整地b層に近似する
	(4)	7.5Y4/1 褐灰色	砂質シルト	
エ遺構	①	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	黄灰色土をブロック状に含む
	②	2.5Y4/2 暗灰黄色	〃	〃 を若干斑状に含む
SD14	1	2.5Y4/1 黄灰色	〃	
	2	2.5Y3/1 黒褐色	〃	黄灰色土をブロック状に含む
SD15	①	5Y3/1 オリーブ黒色	〃	砂質土混入
	②	2.5Y3/1 黒褐色	〃	黄灰色土を斑状に含む
	③	2.5Y6/3 にぶい黄色	〃	黒褐色土が混入
SD16	1	2.5Y4/1 黄灰色	〃	
	2	10YR3/2 黒褐色	〃	黄灰色土を斑状もしくはブロック状に含む
SD13	(1)	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	
	(2)	10YR3/2 黒褐色	〃	植物遺体を含む
	(3)	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	黄灰色土を多量に含む

遺構名	層	土色	土性	その他
SD18	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄灰色土を斑状に含む
	2	2.5Y3/2 〃	〃	〃
オ遺構	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	黄灰色を若干粒状に含む
3号畦畔	a	7.5Y6/1 灰色	〃	L-2よりわずかにしまりが強い
	b	10YR6/1 褐灰色	〃	畦畔の輪郭にそって酸化鉄が集積する
	c	10YR5/1 褐灰色	シルト	上面に4a層土がブロック状に、全体的には4b層に近似した土
	d_1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	カーボンを含む
	d_2	10YR7/1 黒色	砂質シルト	黄灰色土を斑点状に含む
カ遺構	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄灰色土を小ブロック状に含む、カーボン
2号畦畔	a	7.5Y6/1 灰色	シルト質粘土	L-2よりしまり、粘性が強い、酸化鉄斑、マンガン
	b	5Y5/1 灰色	粘土質シルト	黒色粘質土と灰白砂質土が互層になる
ア層		10YR6/1 褐灰色	シルト	酸化鉄斑、マンガン、若干カーボン
SD12	1	7.5YR2/1 黒色	シルト質粘土	黄灰色土をブロック状に含む、カーボン



西壁セクション図

遺構名	層	土色	土性	その他
SD05	1	7.5YR5/1 褐灰色	砂質シルト	マンガン、カーボン、SD05を埋めた整地土
	2	7.5YR4/1 褐灰色	シルト	SD05の堆積土、カーボン
SB01 pit№1		10YR4/2 灰褐色	〃	堀り方埋土、黄灰色土・カーボンを含む
pit№2		〃	〃	堀り方埋土
SB02 pit№3		〃	〃	〃

層位	土色	土性	その他
Ⅰ	N6/ 灰色土	粘土質シルト	現在の水田
Ⅱ	7.5Y6/1 〃	シルト質粘土	近世～近代にかけての水田跡
Ⅲ	5Y5/1 〃	〃	平安時代の水田跡
Ⅳ	10YR4/1 褐灰色土	粘土質シルト	〃 ?
Va	10YR6/1 〃	砂質シルト	〃
Vb	10YR5/1 〃	粘土質シルト	〃

層位	土色	土性	その他
Ⅵa	2.5Y6/2 灰黄色土	粘土質シルト	平安時代の水田跡
Ⅵb	2.5Y7/3 浅黄色土	〃	
Ⅶ	7.5YR2/1 黒色土	〃	
Ⅷ	2.5Y8/6 黄色土	〃	
Ⅸ	10G7/1 明緑灰色土	砂	
Ⅹ	10GY6/1 緑灰色土	粘土質シルト	スクモ

第6図　調査区セクション図

に堆積し、灰白色火山灰がVa 層よりも細粒化して混入する。酸化鉄斑紋は縦縞状で Va層よりも密集していない。マンガン粒は層全体に多量に認められる。カーボンを含む。

第Ⅵa層　灰黄色の粘土質シルト層で、10～25cmの厚さをはかる。06～16ライン、Eラインより南に堆積する。水分の多いソフトな土層で、上面に酸化鉄の集積帯が認められた。この集積帯は輪郭が不鮮明で、その直下から管状の斑紋がⅧ層まで到達している。層中には灰白色火山灰がVb 層よりもさらに細粒化し部分的に混入する。カーボン粒を含む。

第Ⅵb層　灰黄色の粘土質シルト(Ⅷ層)と黒褐色粘土質シルトが攪乱状に混じり合う土層である。層厚は10～25cmをはかり、06～09ラインに堆積する。層中には管状の酸化鉄斑紋、カーボン粒が認められた。

第Ⅶ層　黒色の粘土質シルト層で、05ラインより以西、Dラインより北に堆積する。下面は乱れておりⅧ層中に攪乱状に入る。ピット、溝の検出面にあたる。層厚は北壁付近で15～20cmをはかり、南にゆくに従って厚さを増すがSD 05を境にして傾斜し、ゆるい段差ができている。高低差は約10cmである。

第Ⅷ層　灰黄色の粘土質シルト層で調査区全域に堆積する。層厚は5～10cmをはかる。本層は上層と下層に分けられるが、基本的には同一の土層で、下層がグライ化により緑灰色に変色している。16ラインより東、06ラインより西からしだいに高まり始め、自然堤防の微高地を形成する。この東西両微高地間の低地に水田跡が位置している。

第Ⅸ層　明緑灰色の中砂層で全域で検出されている。

第Ⅹ層　緑灰色の粘土質シルト層で、Eラインより南に堆積する。今回の調査における最下層のもので、植物遺体を多量に含む所謂スクモ層である。

2．発見遺構

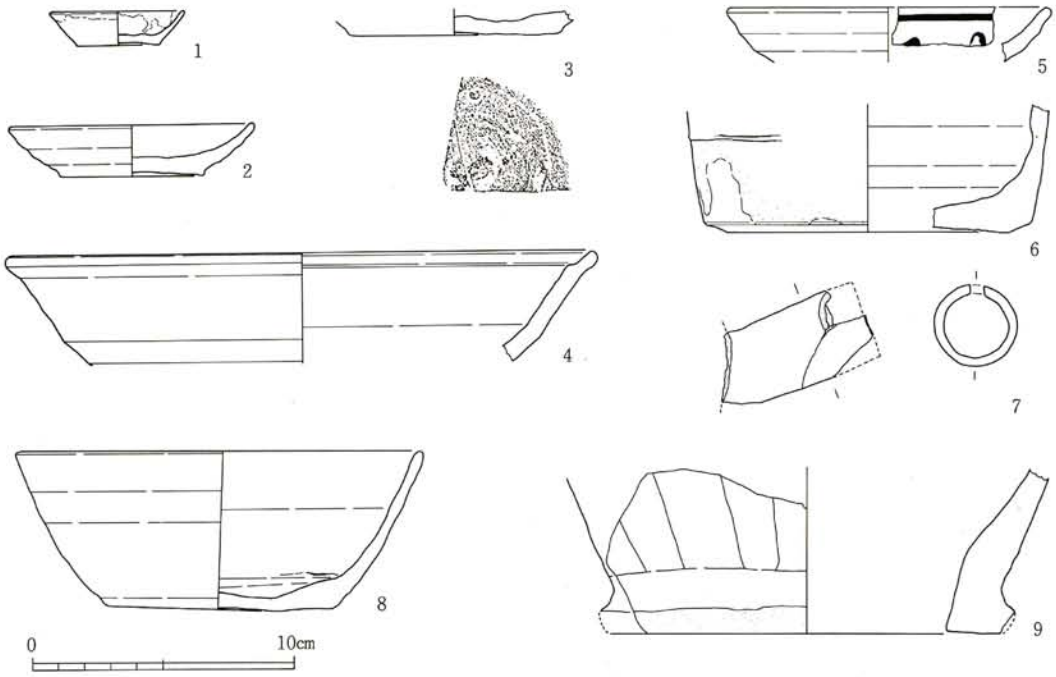
(1)　Ⅱ層検出の水田跡

プラントオパール分析結果によれば、Ⅰ層～Ⅵb層までにイネ科植物が含まれていたとのことで、各層が水田跡であることが予想された。

Ⅱ層検出の水田跡はセクション観察の結果、3号畦畔北、南断面、5号畦畔東断面、6号畦畔南断面に畦畔が認められた。Ⅱ層上面の遺構検出の段階では、水田跡のプランを検出できなかったので、その全容は不明である。明治19年の地籍図によると、3号畦畔と6号畦畔が同位置、同方向をとっており、Ⅱ層検出の畦畔がこれに載ってくる可能性がある。

〈出土遺物〉　土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、土製カマド片、円盤状土製品、陶磁器、煙管、古銭、飾り金具、二次加工のある剥片がある。

(2)　Ⅲ層検出の水田跡

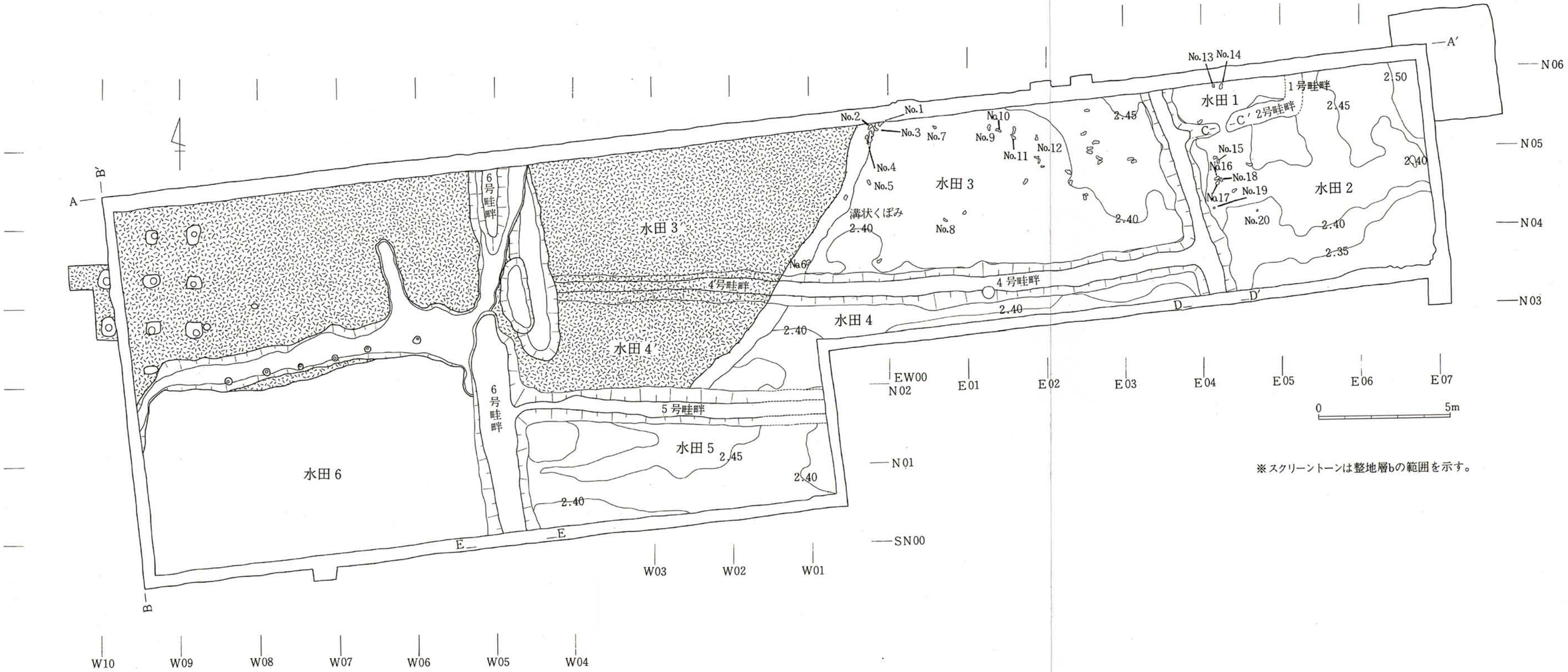


No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1		灯明皿	表採	ロクロナデ	ロクロナデ	完形	5.2	3.1	1.3	油煙が付着
2	赤焼き土器	小皿	〃	〃	〃	1/4	(9.4)	(5.6)	2.0	
3	須恵器	〃	第Ⅰ層	ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	〃	一部		(8.2)		ヘラキズあり
4	陶器	鉢	第Ⅰ層	〃	〃	〃	(22.2)			古瀬戸
5	〃	皿	第Ⅱ層	〃	〃	〃	(12.4)			
6	〃	不明	〃	〃　底部回転糸切り 周縁回転ヘラ削り	〃	〃		(10.6)		
7		ホウロク	〃			〃				把手部
8	須恵器	杯	〃	〃　底部回転ヘラ切り 後ナデ	ロクロナデ	1/3	(15.5)	8.6	6.1	Ⅳ類
9	土師器	不明	〃	手持ちヘラケズリ、ナデ	ナデ	一部				

第7図　Ⅰ層及びⅡ層水田跡出土遺物

Ⅲ層上面では、畦畔頂部が検出された。畦畔の土壌はⅢ層(耕作土)に近似するが、かたくしまっており、上面及び立ち上がり部には酸化鉄の集積が強い。この酸化鉄の集積は水田面に比べかなり強く、この期の畦畔を検出するのに一つの目安となった(註7)。

〈畦畔の構成〉　南北方向の3号畦畔、それに直交する4号畦畔、その南に平行して走る5号畦畔、さらに直交する6号畦畔で構成されている(第8図)。基本的に下層のⅤa層の畦畔上に構築されているが、5号畦畔だけは本期に作られたものである。3号畦畔は、N－20°－Wの傾きを持ち西へ偏している。それに対して6号畦畔は、N－3°－Wでほぼ北を向いている。両畦畔の振れを比較した場合、かなり3号畦畔が西に偏しているが、この振れの要因は、東側の微高地の影響を受けているものと考えられる。また、整地層bの範囲内にくると畦畔は検出できなくなった。Ⅲ層はA－07ラインまで堆積している(層厚4cm～5cm)が、整地層b東端からはかなり薄くなる。



※スクリーントーンは整地層bの範囲を示す。

第8図　水田跡平面図

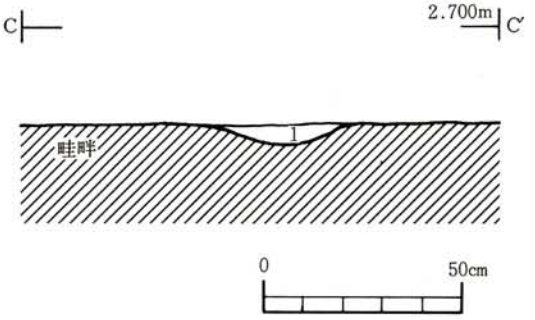
6号畦畔は90cm～110cm、170cm～200cmと規模が大きい。一筆がわかるものはないが、4号～5号間で南北4.7mをはかる。整地層、微高地に規制され、水田の区画はおのずと不定台形をとるようになったと推定される。断面形は略台形状で、なだらかにのぼりながら平坦面を形成する。

〈作土〉　作土(Ⅲ層)は、北から南へ地形の傾斜にそって厚くなっていき、Dラインより南では20cm前後をはかる。3・4号畦畔の耕作土底面から畦畔までの高さは5cm～10cm程であるが、5号畦畔はやや低く、扁平である。

〈出土遺物〉　土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、灰釉陶器、土製カマド片、円盤状土製品、砥石、土錘、鉄製品がある。

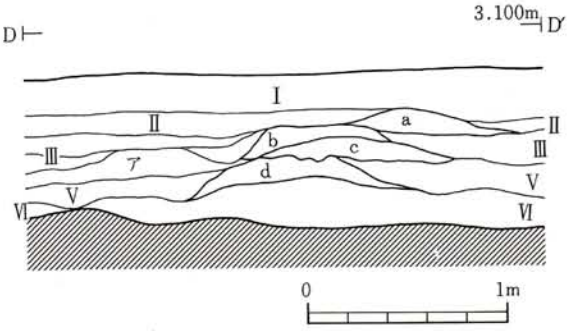
(3) Ⅳ層検出の水田跡？

Ⅳ層は、灰白色火山灰降下後に堆積したもので、整地層bの上面にも部分的に載ることが確認された。分布範囲は、水田1・3・4に限られ、畦畔3・4上にも見られる（プラントオパールも検出されている）。この層は下層のⅤa層の灰白色火山灰をほとんど拡散させていないし、本層にもまったく混入していない。さらに粘性が強く、河川の氾濫で搬入されてきたシルト質土とも異なっている。



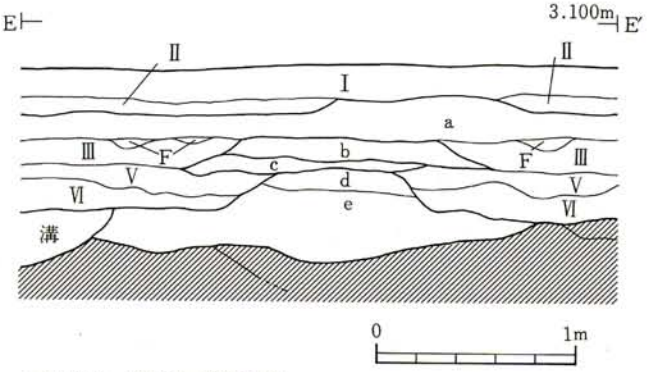
水口　土層観察表

層位	土　色	備	考
1	10YR6/1褐 灰 色	灰白色火山灰のブロックを含む	Ⅴ層水田跡



3号畦畔　南壁土層観察表

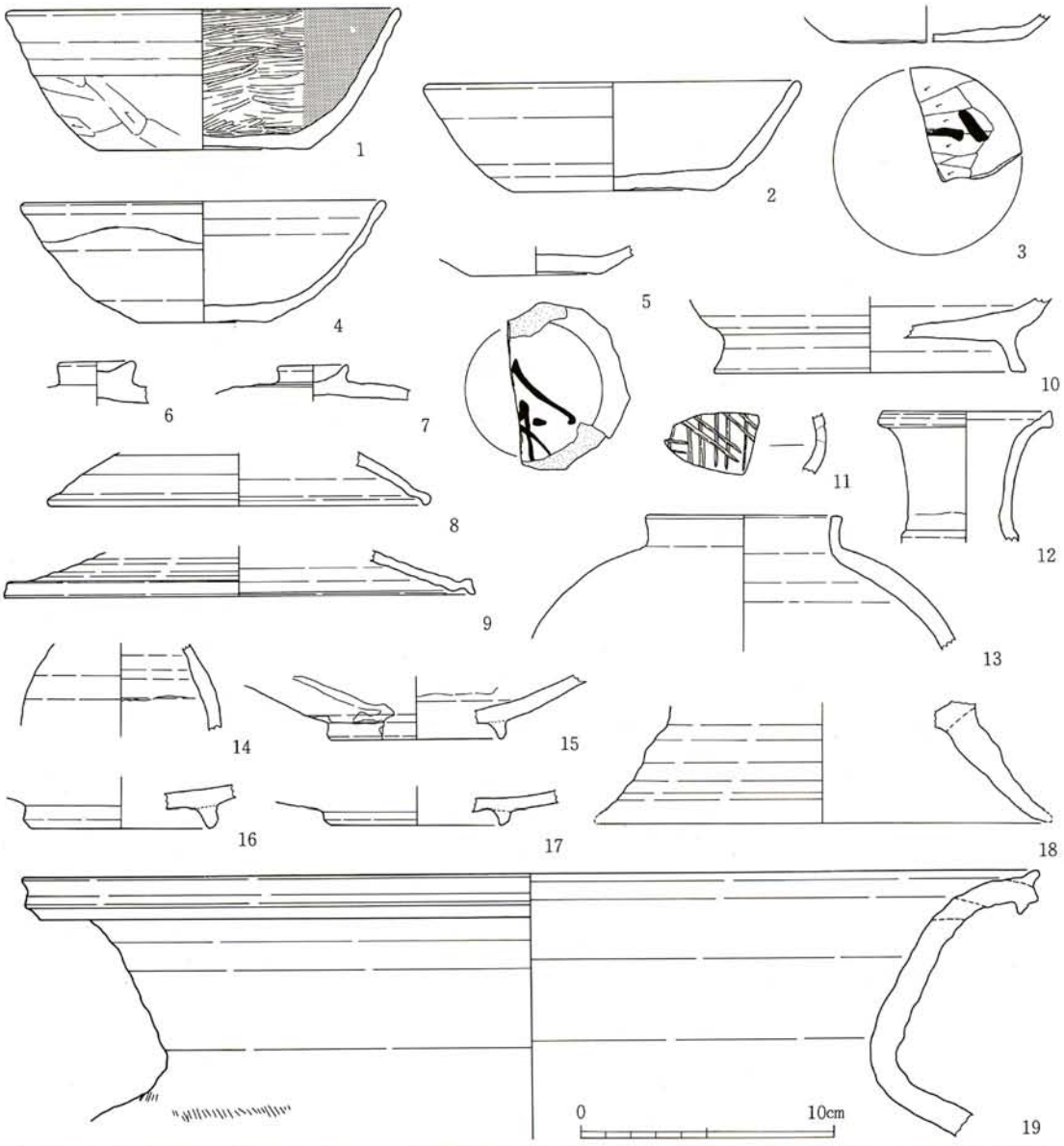
層位	土　色	備	考
a	7.5Y 6/1 灰　色	粘性強く、しまりがある	Ⅱ層水田跡
b	5 Y 5/1 灰　色	〃	Ⅲ層水田跡
c	10YR4/1褐 灰 色	酸化鉄の集積が強い	〃
d	7.5YR5/1褐 灰 色	灰白色火山灰の小ブロックを含む	Ⅴ層水田跡



6号畦畔　南壁土層観察表

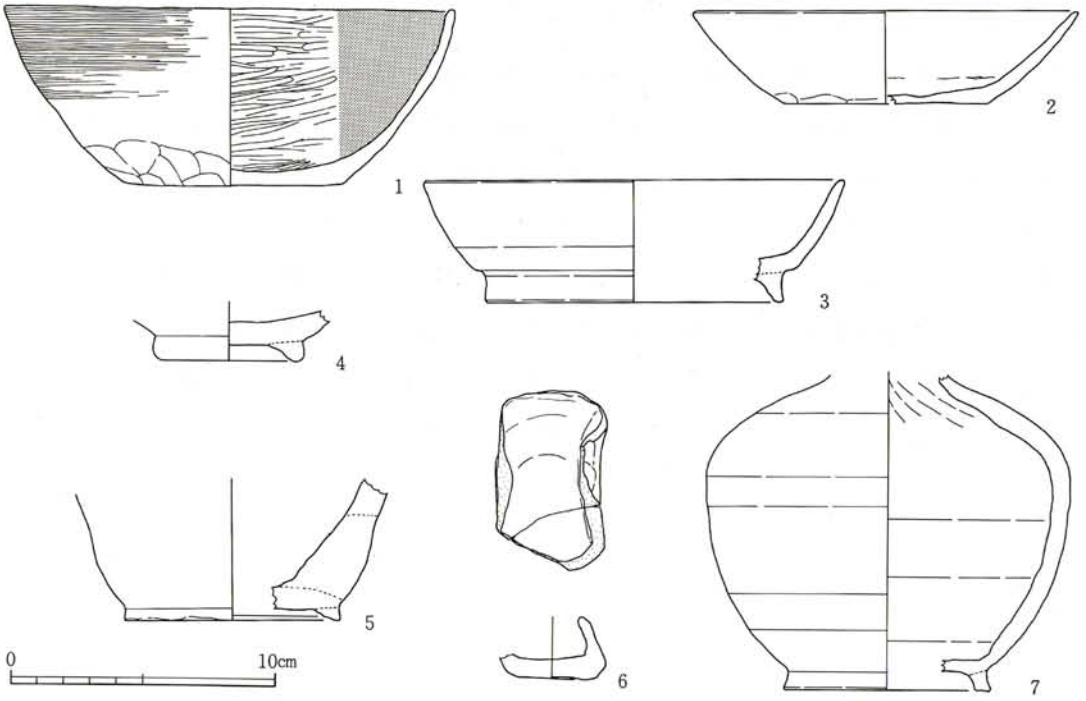
層位	土　色	備	考
a	10YR3/2黒 褐 色	中砂・マンガン粒を含む	Ⅱ 層水田跡
b	10YR4/2灰黄褐色	中砂を含む	Ⅲ 層水田跡
c	10YR3/2黒 褐 色	しまりが少ない	Ⅴ 層水田跡
d	5 GY4/1暗緑灰色	砂　質	Ⅵa層水田跡
e	2.5Y 3/2 黒 褐 色	やや粘性あり、植物遺体を含む	〃
F	7.5YR3/2黒 褐 色		

第9図　水口・3・6号畦畔セクション図



No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	第Ⅲ層	ロクロナデ 体~底部 手持ヘラ削り	ヘラミガキ、黒色処理	1/2	(15.6)	8.4	5.6	
2	須恵器	〃	〃	ロクロナデ 底部 回転ヘラ削り	ロクロナデ	1/4	(14.9)	(7.9)	4.3	Ⅰ類
3	〃	〃	〃	〃 〃 手持ちヘラ削り	〃	一部		(7.5)		底部に墨書あり Ⅱ類
4	〃	〃	〃	〃 〃 回転糸切り	〃	1/2	(14.6)	7.4	4.8	Ⅶ類
5	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	一部		(5.4)		底部に墨書「ロ」
6	〃	蓋	〃	ロクロナデ	〃	〃				リング状のつまみ
7	〃	〃	〃	〃 回転ヘラ削り	〃	〃				〃
8	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃		(15.2)		
9	〃	〃	〃	〃	〃	〃		(18.6)		
10	〃	高台付杯	〃	〃 底部 回転糸切り	〃	〃		(12.2)		
11	〃	瓶	〃	〃	〃	〃				
12	〃	長頸壺	〃	〃	〃	〃	(6.6)			
13	〃	短頸壺	〃	〃	〃	〃	(7.6)			
14	灰釉陶器	瓶	〃	〃	〃	〃				
15	〃	椀	〃	〃 回転ヘラ削り	〃	〃		(7.0)		三日月高台、重ね焼きの痕跡あり
16	〃	皿	〃	〃	〃	〃		(7.0)		
17	〃	〃	〃	〃 回転ヘラ削り	〃	〃		(6.8)		
18	赤焼き土器	高台付鉢	〃	〃	〃	〃		(18.0)		
19	須恵器	甕	〃	〃	〃	〃	(40.2)			

第10図　Ⅲ層水田跡出土遺物



1～6．Ⅳ層水田跡出土　　7．4号畦畔出土

No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	第Ⅳ層	ヨコナデ、体部下端～底部手持ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	3/4	(17.0)	8.3	6.7	Ⅰ類
2	須恵器	〃	〃	ロクロナデ、体部下端手持ヘラケズリ 底部 回転ヘラ切りのちヘラケズリ	ロクロナデ	1/4	(14.4)	(7.8)	3.5	Ⅲ類
3	〃	高台付杯	〃	〃	〃	一部	(15.8)	(11.4)	4.6	
4	〃	〃	〃	〃　底部回転糸切り	〃	〃		(5.7)		
5	〃	壺	〃	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	〃	〃		(8.2)		
6	土師器	耳皿	〃	ロクロナデ、ナデ、指オサエ、底部回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	2/3			3.5	内面の摩滅が著しい
7	須恵器	壺	第1層	ロクロナデ、体部下端、回転ヘラケズリ	ロクロナデ			(7.8)		

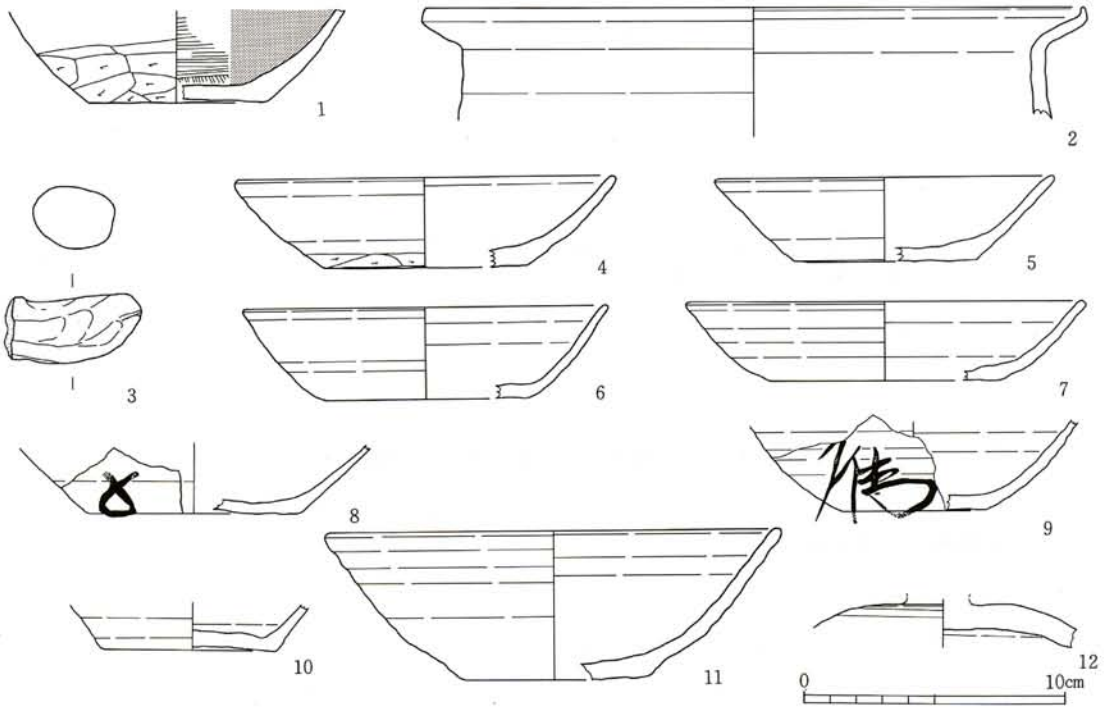
第11図　Ⅳ層水田跡・4号畦畔出土遺物

(4)　Ⅴ層検出の水田跡

Ⅴa層上面で、東西方向の畦畔2条(2号・4号)、南北方向の畦畔3条(1号・3号・6号)で構成される6枚の水田を検出した。Ⅴa層は灰白色火山灰が降灰した時期で、その分布は整地層a下層、同b上面にも見られる。灰白色火山灰のブロックは、水田1・2・3に多量に混入し足跡の埋土にも入る。水田4・5・6には斑点状に分布し希薄である。畦畔は、作土に近似した土壌で、両者の土の相違を区別することはできなかったが、高まりは比較的明瞭であった。Ⅴa層は、ＳＤ08の南側、整地層bの東側から15ラインまでを東限とし、この範囲が水田域となる。

〈畦畔の構成〉　3・4・6号畦畔はⅢ層とほぼ同位置、同方向をとっている。本期に構築された1・2号畦畔は、東側の微高地縁辺に位置し、その地形にそって作られた畦畔と考えられる。ただし、1号畦畔は、平面プランを検出しておらず、北壁セクション観察による図上復元線で

ある。２号畦畔は、東西約５ｍをはかり、３号畦畔へと接続する。その間には３号畦畔よりに水口が構築されている。畦畔頂部から底面までは緩やかに傾斜し、水口の深さは約５cmである。この付近の地形は、北東方向が高く、南西へと傾斜しており、北から南への水の流れが予想される。１・２・３号畦畔に区画される水田１は、本調査において唯一南北方向を向くものである。３号畦畔は、やや弧状を呈し、Ｃ－09グリット付近から西側が整地層ｂにおおわれている。その整地縁辺には、幅60cm～70cmの溝状の窪みが検出され、ブロック状の灰白色火山灰が密に集積している。土壌は基本的にⅤａ層と同一で、セクション観察ではⅥ層の窪みとしてとらえられる。耕作の各段階において、整地縁辺のみが深掘りされた結果、火山灰が集積したものと考えられる。この溝状の窪みは、居住地域と水田域を区画したと思われる。６号畦畔は、Ｃ－05グリット付近より北側をＳＤ03に切られている。



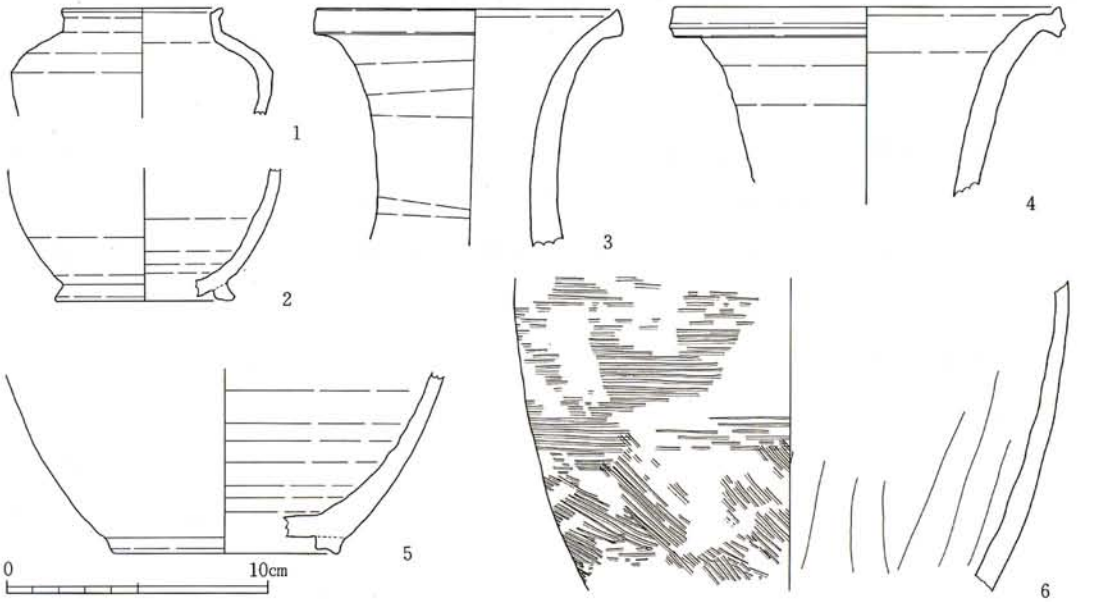
No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	第Ⅴa層	ロクロナデ、体部下端～底部手持ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	一部		(6.7)		Ⅱ類
2	〃	甕	第Ⅴ層	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	(25.3)			Ⅱ類
3	〃	—	第Ⅴa層	ナデ						把手部のみ
4	須恵器	杯	第Ⅴ層	ロクロナデ、体部下端～底部手持ヘラケズリ	ロクロナデ	1/4	(14.5)	(7.7)	3.4	
5	〃	〃	第Ⅴa層	〃　底部回転ヘラ切り	〃	〃	(12.9)	(7.0)	3.2	ヘラキズあり、Ⅴ類
6	〃	〃	第Ⅴ層	〃　底部ナデ	〃	1/8	(13.9)	(7.6)	3.5	
7	〃	〃	第Ⅴa層	〃　〃	〃	〃	(15.1)	(8.5)	3.0	
8	〃	〃	〃	〃	〃	一部		(8.2)		体部下端に墨書「文」
9	〃	〃	第Ⅴ層	〃　底部回転糸切り	〃	〃		(5.6)		体部に墨書「往」
10	〃	〃	〃	〃　底部回転ヘラ切り	〃	〃		6.7		
11	赤焼き土器	〃	第Ⅴa層	ロクロナデ	〃	1/3	(17.4)	(7.1)	5.7	
12	須恵器	蓋	第Ⅴ層	〃　回転ヘラケズリ	〃	一部				つまみ欠損

第12図　Ⅴ層水田跡出土遺物(1)

〈畦畔の規模〉　上端幅で50cm～80cm、下端幅90cm～150cm、作土底面からの高さは5cm～8cmをはかるが、6号畦畔はやや高く10cm前後である。断面形は扁平な台形で、頂部が押しつぶされたように窪んでいる。

〈作土〉　作土(Va層)上面は、上層のⅣ層が窪み状に入り込み、また灰白色火山灰がブロック状に混入していることから、かなり凸凹があったことがわかる。Vb層は床土と考えられ、Va層との層界は起伏が激しい。さらにマンガンの集積も認められる。その分布範囲は、水田1、3に限定される。

〈出土遺物〉　土師器、須恵器、赤焼き土器、円盤状土製品、瓦がある。遺物取り上げはⅣ層と同じである。



No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	短頸壺	第Va層	ロクロナデ	ロクロナデ	一部	(6.2)			
2	〃	壺	第V層	〃	〃	〃		(6.8)		
3	〃	長頸壺	第Va層	〃	〃	〃	10.6			
4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(14.8)			
5	〃	壺	〃	〃	〃	〃		(8.5)		
6	〃	甕	〃	ハケメ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	〃				

第13図　V層水田跡出土遺物(2)

(5)　Ⅵa層検出の水田跡

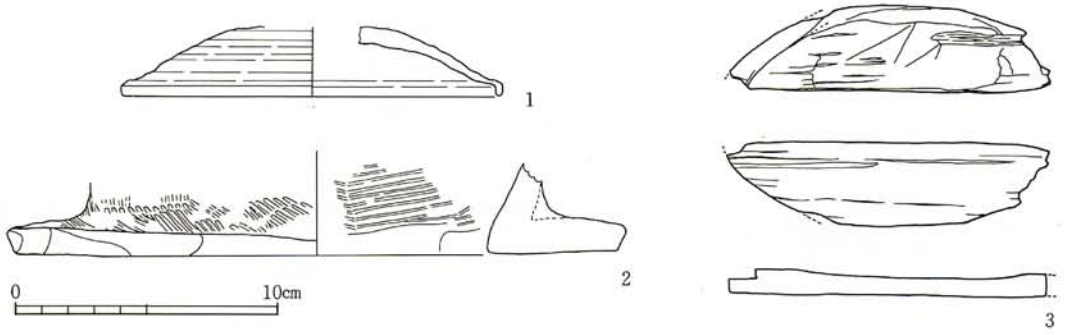
本層検出の水田跡は、水分を多く含む土壌に営まれたのが特徴である。畦畔は、東西の4・4′号畦畔、南北の3・6号畦畔で構成される。これらの畦畔は上層の畦畔の基礎となっており、方向もほぼ同方向をとっている。4′号畦畔は整地層b除去後に表れたもので、保存状況が良好である。11・13ラインには、南北トレンチを入れ、部分的な検出を行なった。この区域では、

上層に畦畔が各期に渡って構築されたことにより、圧縮されほとんど畦畔の盛り上がりは確認できなかった。4′号畦畔の西への延びは、SD07によって切られているが、おそらくは6号畦畔と接続していたのであろう。

次に規模について見る。北壁セクションの検討によると、3号畦畔は下層のⅥb層期の畦畔の盛り上がりとして観察された。南壁セクションではⅥa層期のみ確認され、下端幅で120cm、上端幅で70cmをはかる。立ち上がりは緩やかで、上面はやや凸凹がある。4号畦畔は、下端幅で、120～140cm、上端幅で50～60cmをはかり、作土上面と畦畔の高低差はほとんどない。作土と畦畔は、基本的に同じ土壌であるが、畦畔の土には砂質土が混入しており区別された。4′号畦畔は、下端幅で110～120cm、上端幅で25～50cmをはかる。畦畔の盛り上がりは明瞭で、畦畔の上面と作土上面の比高差は7～10cmである。6号畦畔は、南壁セクション観察によると、下端幅105cm、上端幅55cm、作土上面と畦畔上面の比高差は10cm程である。断面形は、台形を呈する。

Ⅵb層は、水田3（A～B－12～15）に限られた分布範囲を示している。この期の畦畔は検出しておらず、北壁の断面観察により確認したにすぎない。また、プラントオパール結果からも水田層として疑問が持たれている。しかし、オ遺構の検出面となっており、一時期の遺構面としてとらえてよさそうである。

〈出土遺物〉　Ⅵa層からは、土師器、須恵器、瓦、転用硯、赤焼き土器、土製カマド片などがある。



No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	蓋	第Ⅵa層	ロクロナデ　回転ヘラケズリ	ロクロナデ	一部				
2	土師器	不明	〃	ハケメ、ヘラ削り	ハケメ、ヘラ削り、ナデ	〃		(22.8)		
3	木製品	曲物蓋板	〃	板目材、厚さ0.9cm、内面にキズがみられる						

第14図　Ⅵa層水田跡出土遺物

(6) 酸化鉄帯状集積帯

本調査区内全域で酸化鉄帯状集積帯が認められた。この集積帯は、ほぼ一定の標高（約2.3m前後）で平行に集積し、北壁断面東側では第Ⅴa層上面に、西側ではⅧ層グライ土上面にみられる。基本層位の項で述べた橙色の管状酸化鉄斑紋が、同集積帯直下から下垂し、第Ⅰ～Ⅳ層に

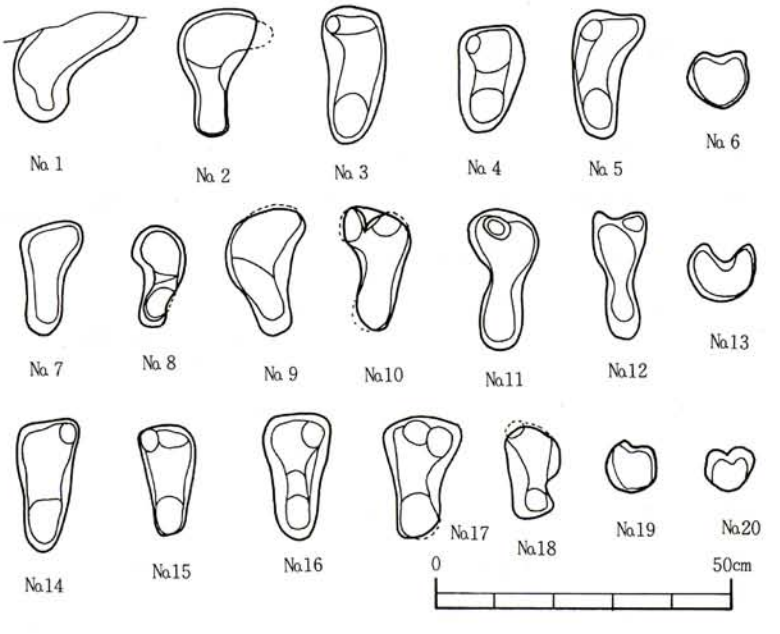
認められる酸化鉄集積帯とは異なる。このような特徴をもつ斑紋は暈管状斑紋(註8)と呼ばれているものに酷似し、地下水位変動層の指標とされている。同集積帯より下層は水分を多く含み、部分的に酸化層→グライ層の層序が認められることから、地下水の変動がくりかえされたと考えられる。プラントオパール分析の結果から、第Ⅵa層が短期間ではあるが水田が営まれたとのことである(註9)。また、部分的に畦畔も検出しており、同層が水田として使用されたことはほぼ間違いないと思われる。これらのことから、本調査における最も古い段階での稲作は、地下水に依存した水田形態が予想されよう。

(7) 足　跡

足跡は水田1～4のⅤa層上面において検出された。埋土は、灰白色火山灰の小ブロックと作土を近似した褐灰色土が混じった土である。

足跡と思われるものは掘り込み調査をしたものだけで、総数58を数え、その内足跡と判断されたものは10個、さらにその可能性があるもの5個がある。足跡と判断されたものの特徴は、親指の痕跡、爪先部が深く中央部(土踏まず)が高い、かかとの部分がやや深いなどがあげられる。長さは20～22cmが多く、17～18cmも若干見られる。深さは最大深(爪先部)で4～6cm、最小深(かかと部)で2～3cmをはかる。走行の方向、歩幅はばらつきが多く追うことはできないが、水田2(B15グリット)、3に密集している。また、ハート形、もしくは不整円形を呈する窪みが5個検出された。先が二段に分かれるのが特徴で、これらの形態を示すものは、牛の足跡と考えられている。直径は10cm前後で、方向、歩幅は不明である。

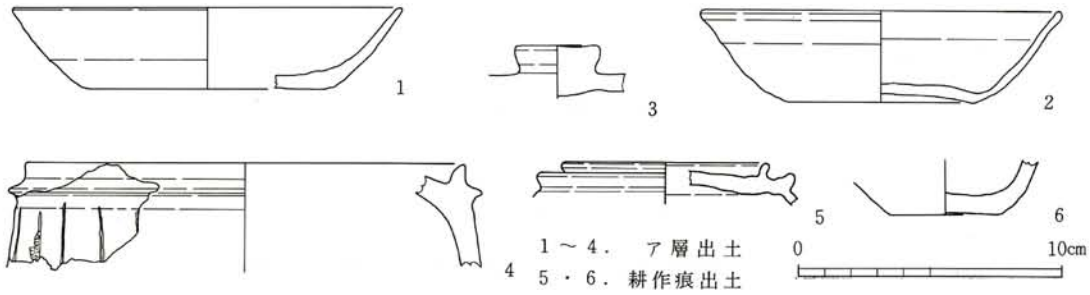
なお、Ⅳ層を埋土としたくぼみも多数観察された。灰白色火山灰を含むピット群よりは一時期新しいと見られるが、その性格については不明である。



第15図　足跡平面図

(8) 耕 作 痕

耕作痕は、調査区東側の微高地頂部からゆるやかに下る斜面に検出された。不整長楕円形を呈し、大きさは様々であるが北東方向を向く点で一致している。確認面は、Ⅷ層上面で埋土内には灰白色火山灰が粒状に入っている。埋土は上部に堆積していたア層に近似している。深さは2～4cmで、底面は凸凹が激しい。時期は灰白色火山灰が粒状に混入することから、10世紀前半以降と考えられる。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯・甕、土製カマド片、円面硯などがある。



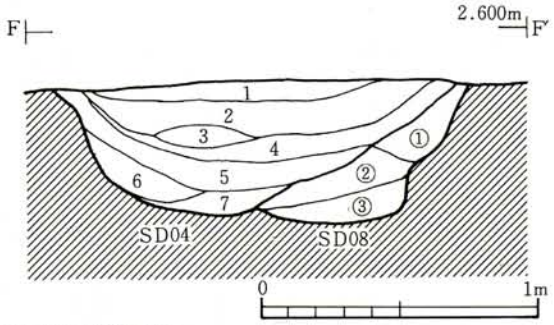
No	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	杯	ア層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ		(14.8)	(9.6)	3.1	V類
2	〃	〃	〃	〃 〃	〃	1/3	(13.6)	6.8	3.5	V類
3	〃	蓋	〃	〃	〃	一部				
4	〃	円面硯	〃	〃	〃	〃				脚部に縦方向の線刻あり
5	〃	〃	耕作痕 第1 08層	〃	〃	〃				
6	〃	小壺？	耕作痕 第1 03層	〃 底部回転糸切り？	〃	〃		4.3		

第16図 ア層・耕作痕出土遺物

(9) Ⅳ層上面検出遺構

Ⅳ層上面では、SD04・08・24がある。3条の溝は調査区南側において検出された東西に走る溝である。SD11・23を切り、SD04・08は6号畦畔のb期に対応する畦畔に覆われている。さらにSD04はSD06を切っている。

SD04は、全長が約17m、上幅0.6～1.55m、下幅0.35～0.8mをはかり、中央部が脹らんでいる。深さは約50cmである。断面形は底面がほぼ平坦な逆台形状を呈する。堆積土は全体的に灰色を基調とした粘質土である。出土遺物は、土師器杯・高台付杯・



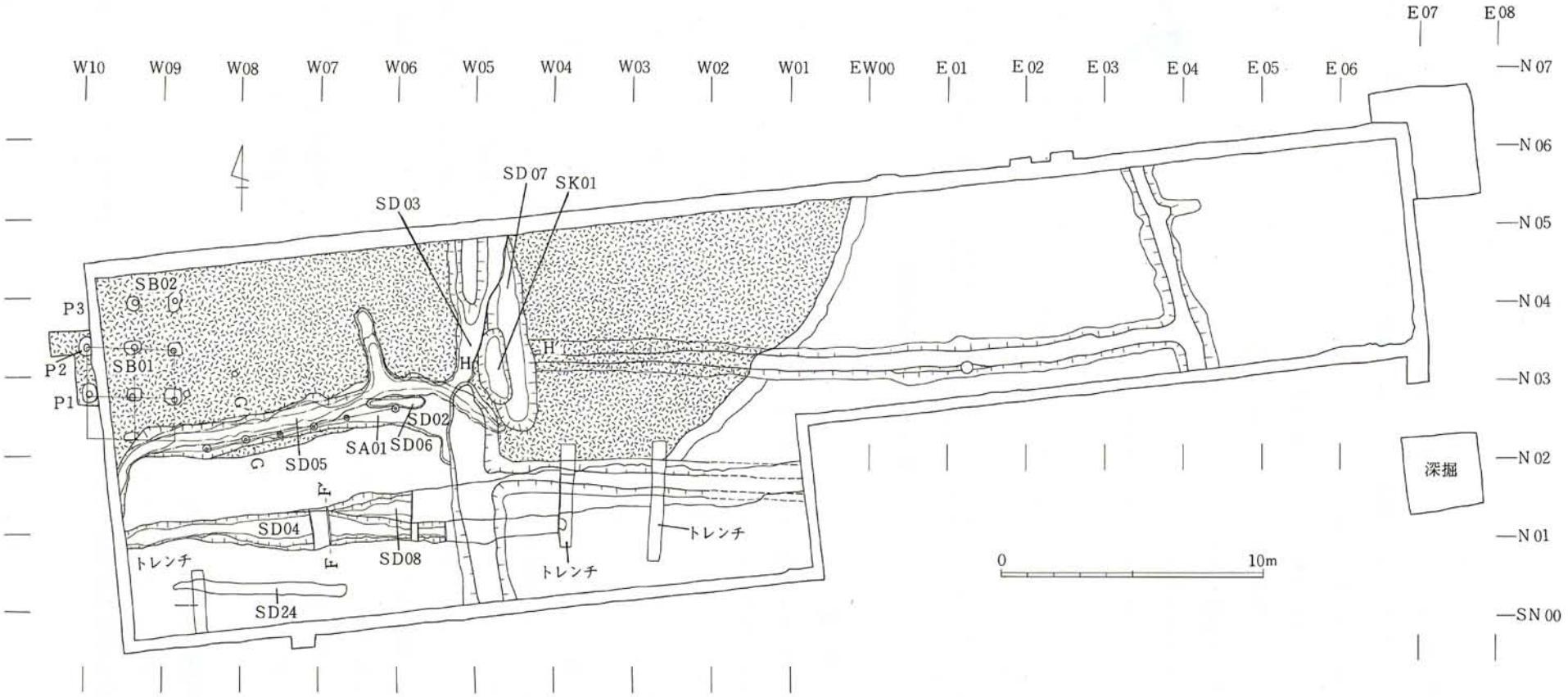
SD04土層観察表

層位	土色	備考
1	10YR4/1褐灰色	酸化鉄・マンガン粒を含む。
2	2.5Y 5/1黄灰色	淡黄色のシルト質砂をブロック状に含む。
3	2.5Y 3/1黒褐色	
4	2.5Y 4/1黄灰色	グライ化
5	2.5Y 4/1黄灰色	グライ化
6	10YR3/1黒褐色	砂質で少量の炭化物を含む。グライ化
7	2.5Y 4/1黄灰色	壁の崩壊土を含む。グライ化

SD08土層観察表

層位	土色	備考
①	2.5Y4/1黄灰色	砂層をしま状に含む。
②	2.5Y4/1黄灰色	砂粒を含む。グライ化
③	7.5Y4/1灰色	上層より粒子が荒い。グライ化

第17図 SD04・08セクション図

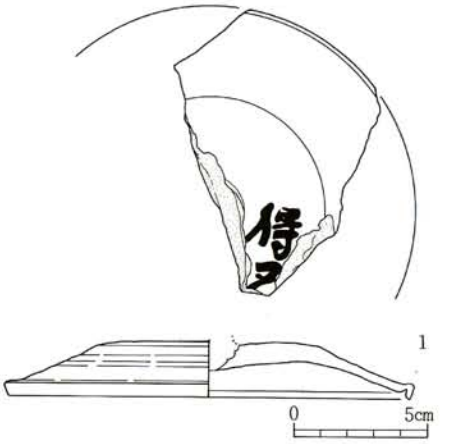

W10
W09
W08
W07
W06
W05
W04
W03
W02
W01
EW00
E 01
E 02
E 03
E 04
E 05
E 06
E 07
E 08
N 07
N 06
N 05
N 04
N 03
N 02
N 01
SN 00
SD 03
SD 07
SK01
SB02
P3
P2
SB01
P1
H
H'
SD02
SA01
SD06
SD05
G
G'
F
F'
SD04
SD08
トレンチ
SD24
D
D'
トレンチ
トレンチ
深掘
0
10m

第18図　遺構配置図(1)

甕、須恵器杯・甕、壺があり、他に瓦や土製カマドの小破片と砥石が出土している。

ＳＤ08は、全長が20m以上、上幅1.05～1.6m、下幅0.7～0.85mをはかり、西側でやや脹らんでいる。深さは約55cmである。断面形は「Ｕ」字形を呈する。堆積土は上層が褐灰色で、下層は黄灰色を基調としている。全体的に粘性がある。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・蓋があり、他に瓦と土製カマドの小破片がある。

ＳＤ24は、全長が約6.7m、上幅約0.4mである。堆積土は上層が暗褐色を呈する砂質土で、下層は黒色を呈する粘質土である。この溝は平面プランの確認を行なっただけである。



No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	蓋	第２層	ロクロナデ、天井部回転ヘラ削り	ロクロナデ	1/4	(15.4)			外面天井部に墨書 内面工具痕に墨書

第19図　ＳＤ08出土遺物

(10)　整　地　層

整地層は調査区の北西部において検出され、ａ.ｂ.ｃの各層に分けられる。

整地層ａは褐灰色のシルト層で、２cm～３cmの厚さをはかり、下層には灰白色火山灰層（5cm～８cm）が堆積している。Ａ・Ｂ～４・５グリット付近の窪み状のところに灰白色火山灰が堆積したのち整地盛土したものである。層中にはカーボン、粒状の灰白色火山灰が含まれる。灰白色火山灰層には褐灰色シルト質土が粒状に少量混入する。

整地層ｂは褐灰色の砂質シルト層で、層厚は10cm～20cmをはかる。01～10ライン、南はＣラインまでにみられる。整地層ａに比べて土の粒子が粗くしまりがない。07ラインより東では上面に灰白色火山灰がブロック状に分布している。層中には大形の土器片や土製カマド片が多量に含まれており、さらに全体に均質な堆積をしていることから、居住地およびその縁辺から採土したものを一期に盛土したと考えられる。黄灰色土の小ブロック、カーボンが含まれる。

整地層ｃは褐灰色のシルト質粘土層で、層厚は５cm～10cmをはかる。01～02ライン、南はＡラインまでに堆積する。堆積状況および遺構が介在することから整地層ｂに先行して行なわれた整地事業と考えられる。セクション観察によるものでその全容は不明である。

(11)　整地層ａ上面検出遺構

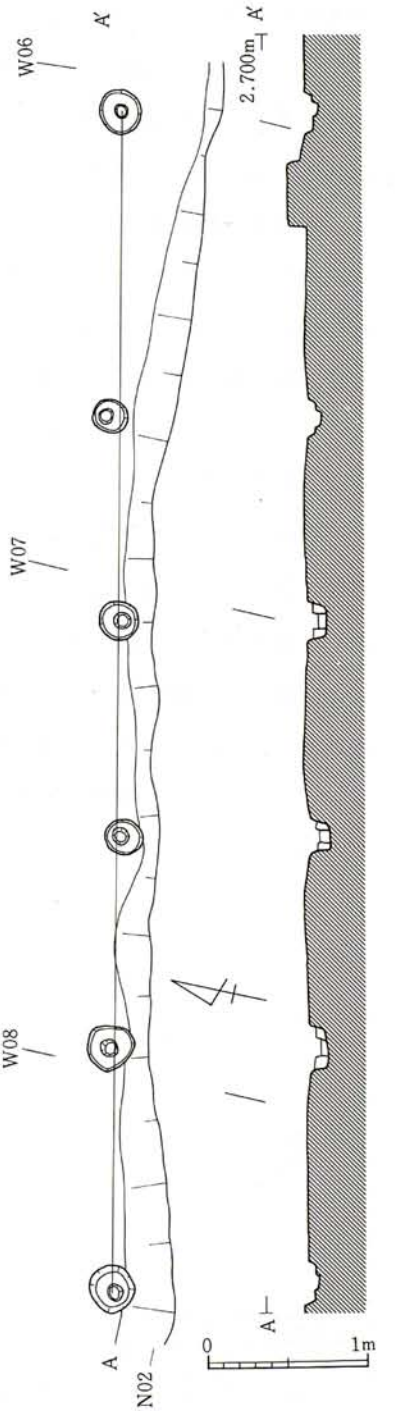
整地層ａ上面では、ＳＡ01、ＳＤ02・03・05・06がある。

ＳＡ01：整地層南端のＳＤ02の底面において検出された。ＳＤ05を切っている。東西に５間

の柱列跡で、方向はＮ－78°－Ｅである。柱間は西側から1.50m＋1.35m＋1.30m＋1.90mをはかる。各掘り方は円形で、径20～30cmである。各柱穴には径約10cmの柱痕跡がある。柱穴の埋土は黒色の粘質土で、Ⅷ層の土がブロック状に含まれ、さらに灰白色火山灰が粒状に含まれている。出土遺物は、柱穴・柱痕跡から土師器杯・甕・須恵器杯・甕の小片の他に土製カマドの小片がある。

ＳＤ02：整地層南端において検出した東西に走る溝跡である。南側へやや湾曲し、西側では南西方向へ延びる。Ｂ04グリット付近では北側へ張り出している。この溝は東側で６号畦畔のｂ期に対応する畦畔に覆われ、ＳＢ01、ＳＡ01、ＳＤ05・06を切っている。溝の上幅1.15～1.4m、下幅が0.7～1.05mで、東側の幅が広くなっている。深さは東側で約15cm、西側で約25cmと西側に傾斜している。断面形は緩やかな船底状を呈する。張り出し部は、長さ約2.9m、上幅約0.6m、下幅約0.5mをはかり、深さは約10cmである。断面形は「Ｕ」字形を呈している。堆積土は、上層が整地層と類似する褐灰色土で、下層は黒褐色土である。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕・壺、赤焼き土器杯・高台付杯があり、他に瓦と土製カマドの小片が出土している。

ＳＤ03：６号畦畔の北側で検出した。６号畦畔北側では畦畔の両側を走り、Ｂ06グリット付近で１条になる。ＳＤ07・10・22、ＳＫ01を切っている。規模は、西側で上幅約0.4m、下層0.15mである。深さは北側で約10cm、南側で約７cmと北側へ傾斜している。断面形は船底状を呈する。堆積土は、上層が黒色の粘質土で、下層が黒褐色のシルト質土である。南側ではＳＤ02の２層と非常に類似し、またＳＤ02との切り合いが確認されなかったことより、ＳＤ02と同一の溝であると考えられる。出土遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・壺、



柱穴柱痕　土層観察表

土　　色	備　　考
10YR7/1 灰白色	粘土質シルト

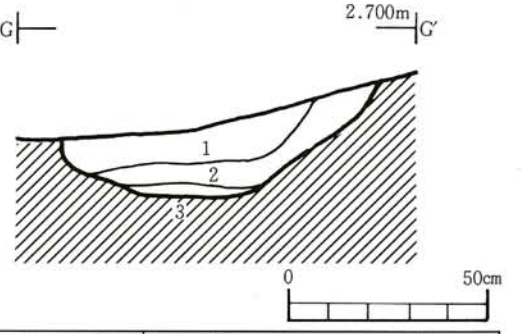
柱穴堀り方　土層観察表

土　　色	備　　考
10YR5/2 灰黄褐色	砂質、灰白色火山灰を粒状に含む

第20図　ＳＡ01実測図

赤焼き土器杯・高台付杯・甕があり、他に瓦と土製カマドの小片が出土している。

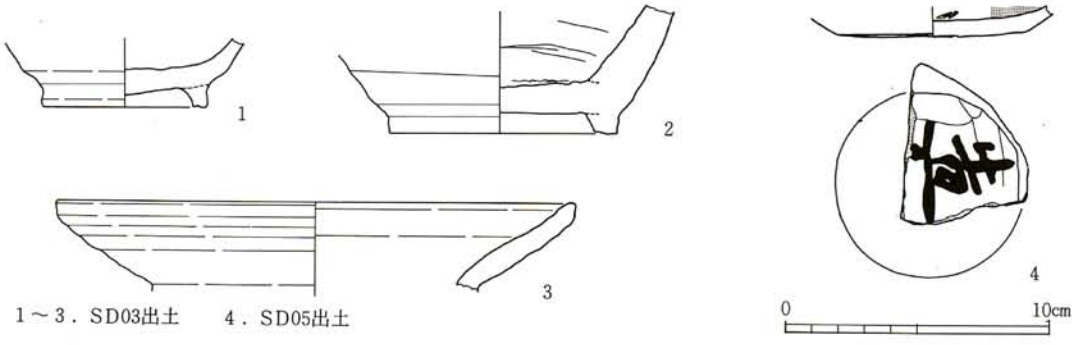
ＳＤ05：ＳＤ02底面において検出した。 形態はＳＤ02と同じである。 ＳＡ01、ＳＤ06に切られ、また６号畦畔のｂ期に対応する畦畔に覆われている。 規模は上幅 0.45～0.8m、下幅 0.25～0.4mである。深さは約20cm をはかる。断面形は船底形を呈する。張り出し部は規模が長さ約1.8m 、上幅約0.6m、下幅約0.35mとＳＤ02より小規模になる。 深さは整地層上面より約25cmである。断面形は「Ｕ」字形を呈している。堆積土は褐灰色を基調とした砂質シルトである。出土遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・壺、赤焼き土器杯があり、他に瓦や土製カマドの小片がある。



層位	土　　色	備　　考
1	10YR5/1 褐 灰 色	砂質シルト、地山粒・カーボン、マンガン粒を含む
2	10YR4/1 〃	１層に比べ粘性が強い、地山粒含む
3	10YR5/1 〃	砂性が強く、地山粒を含む

第21図　ＳＤ05セクション図

ＳＤ06：ＳＤ02底面において検出した。ＳＡ01に切られ、ＳＤ05を切っている。規模は全長約2.3m、 上幅約0.4m、 下幅約0.3mで、 深さは約10cmをはかる。 断面形は「Ｕ」字形を呈している。堆積土は　褐灰色を基調とした砂質シルトである。出土遺物は、土師器甕や瓦の小片がある。



1～3．SD03出土　　4．SD05出土

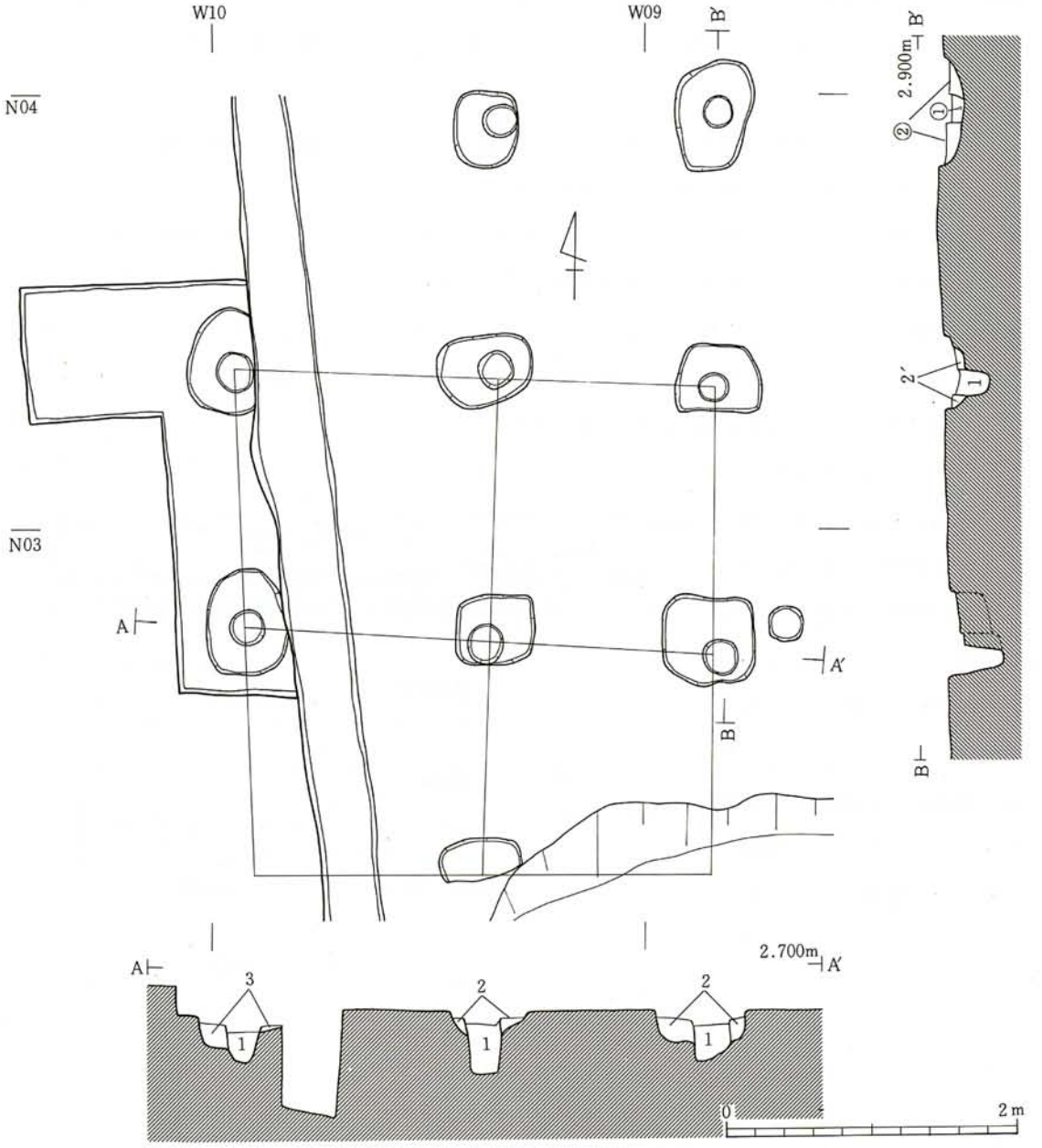
No.	種　別	器　形	層　位	外　面　調　整	内　面　調　整	残存	口径	底径	器高	備　　考
1	須　恵　器	高台付杯	第　1　層	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り？	ロクロナデ	一部		(6.2)		
2	〃	壺	〃	ロクロナデ、体部下端回転ヘラ削り・底部ナデ	ロクロナデ、カキ目	〃		(8.3)		
3	赤焼き土器	甕	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	(19.6)			
4	土　師　器	杯	〃	底部回転糸切りのち周縁手持ヘラ削り	ヘラミガキ、黒色処理		(7.0)			墨書「造」

第22図　ＳＤ03・05出土遺物

(12)　整地層ｂ上面検出遺構

整地層ｂ上面では、ＳＢ01・02、ＳＤ07、ＳＫ01がある。

ＳＢ01：調査区西北部で検出された。ＳＤ05によって南東部が切られている。桁行２間、梁行２間の総柱建物跡である。建物方向は東側柱列では南側の柱穴が削平されているが、発掘基準線にほぼ一致する。北側柱列はＥ－2°－Ｓとやや傾きがある。桁行柱間は北列西側から1.8



ＳＢ01　土層観察表

層位	土　色	備　考
1	10YR4/2灰黄褐色	灰白色火山灰ブロックを多量に含む
2	〃	砂質、黄色土粒やカーボンを含む
2′	〃	黒褐色粘質土を多く含む
3	〃	

ＳＢ02　土層観察表

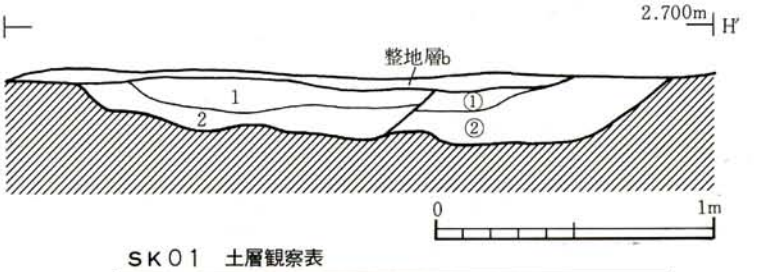
層位	土　色	備　考
①	10YR4/2 灰黄褐色土	粘性つよい
②	〃	ＳＢ０１２層と同じ

第23図　ＳＢ01・02実測図

m＋1.5mをはかる。各掘り方は段掘り状に掘り込み、柱を建てている。平面形はほぼ方形を呈するものと楕円形を呈するものがあり、規模は48×55cm～60×72cmである。各柱穴には柱痕跡が検出されており、径が約25cmの円形である。柱穴・柱痕跡の埋土は、ともに整地層と非常に類似している灰黄褐色土である。柱痕跡の埋土中には灰白色火山灰が小ブロック状に含まれている。出土遺物は、掘り方・柱痕跡から土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺の小片の他に土製カマドの小片が出土している。

ＳＢ 02：ＳＢ01の北側で検出した東西に並ぶ２個の柱穴と、西壁断面で１個の柱穴を確認している。これらと組み合う他の柱穴が、南側と東側で検出されなかったことより、調査区外へ延びると思われる。平面で確認した２個の柱穴は楕円形を呈し、約45×55cmの規模である。両柱穴には柱痕跡を検出しており、径が約20cmの円形である。柱間は1.5mであり、 建物方向は発掘基準線にほぼ一致する。柱穴・柱痕跡の深さは約15cmと非常に浅く、おそらく上方部が削平されたものと思われる。柱穴・柱痕跡の埋土は整地層と類似する灰黄褐色土である。出土遺物は、掘り方より土師器甕、須恵器杯・甕の小片がある。

ＳＤ07：６号畦畔東側において検出した南北に走る溝である。ＳＤ03、ＳＫ01に切られ、４号畦畔、ＳＤ14、ＳＫ02を切っている。規模は上幅1.4～1.6m、下幅0.6～0.9mをはかり、深さは約20cmである。断面形は底面がやや平坦な「Ｕ」字形を呈する。堆積土は褐灰色を基調としたシルト



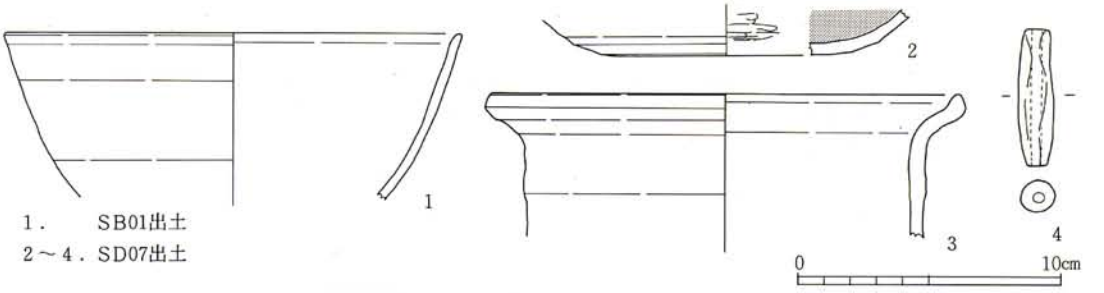
ＳＫ０１　土層観察表

層位	土　色	備　考
1	10YR5/1 褐 灰 色	シルト、灰白色火山灰、カーボン含む
2	〃	シルト、粘性が若干強く、灰白色火山灰が少ない

ＳＤ０７　土層観察表

層位	土　色	備　考
①	10YR 5/1 褐 灰 色	シルト、灰白色火山灰・マンガン粒を含む
②	〃	粘土質シルト、灰白色火山灰・カーボン混じる

第24図　ＳＫ01・ＳＤ07セクション図



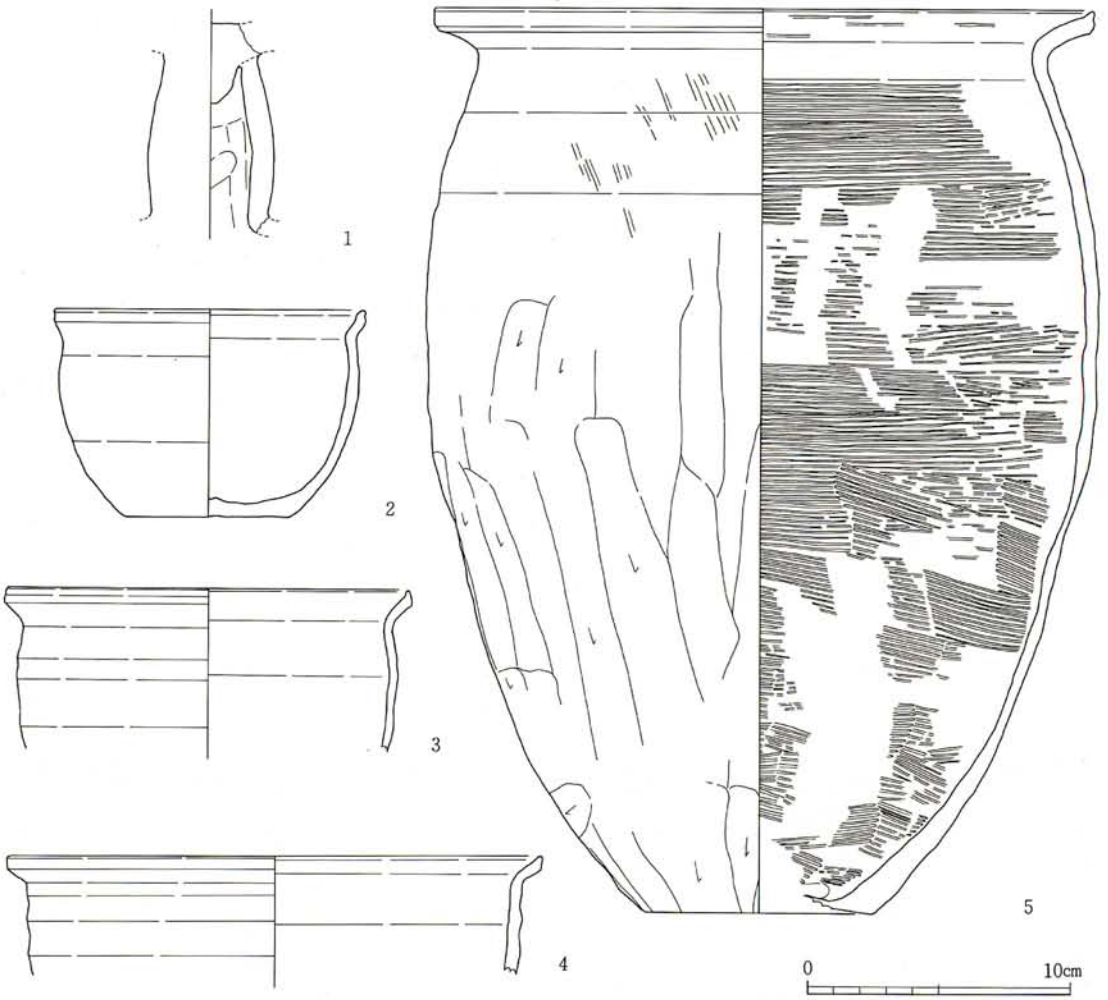
1．　ＳＢ01出土
2～4．ＳＤ07出土

No.	種　別	器　形	層　位	外　面　調　整	内　面　調　整	残存	口径	底径	器高	備　考
1	須恵器	杯	柱痕跡	ロクロナデ	ロクロナデ	一部	(17.4)			
2	土師器	〃	第３層	ロクロナデ、体部下端～底部回転ヘラ削り	ヘラミガキ、黒色処理	〃		(9.5)		Ⅰ類
3	〃	甕	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	(18.2)			Ⅱ類
4	土製品	土　錘	第２層	長さ5.1cm、幅1.3cm、孔径0.4cm、完形、指オサエによる調整						

第25図　ＳＢ01・ＳＤ07出土遺物

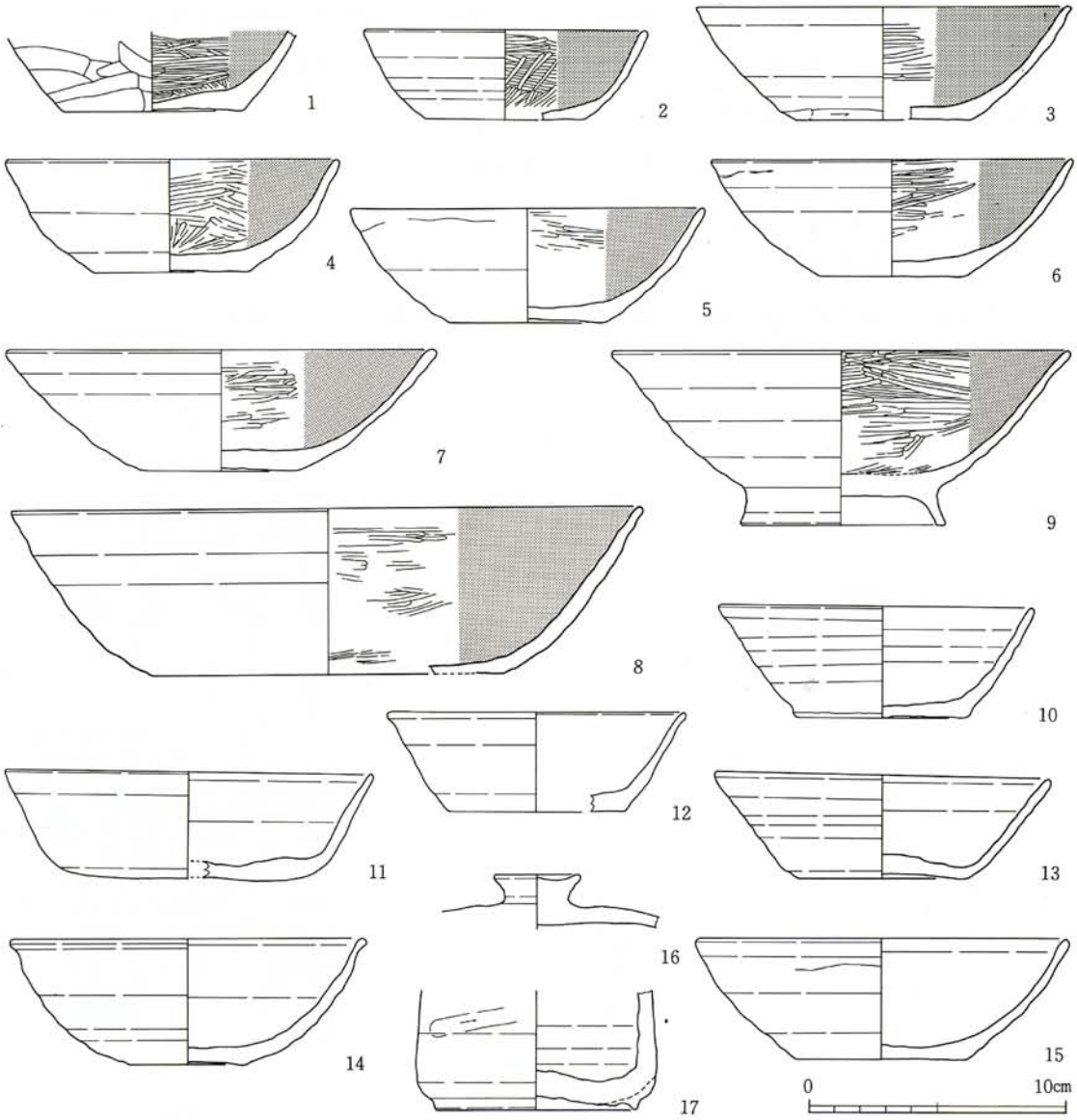
で、２層には多量の灰白色火山灰を含んでいる。１層上部には整地層と類似する土が認められた。出土遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕・壺、赤焼き土器杯、瓦や土製カマドの小片があり、他に土錘が１点出土している。

ＳＫ01：６号畦畔東側において検出した。ＳＤ03に切られ、ＳＤ07を切っている。平面形は長楕円形を呈し、長軸約2.9m、短軸約1.1mである。深さは約20cmをはかる。断面形は船底形を呈している。堆積土は、褐灰色を呈するシルトで、灰白色火山灰がブロック状に含まれる。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器甕・壺があり、他に土製カマドの小片が出土している。



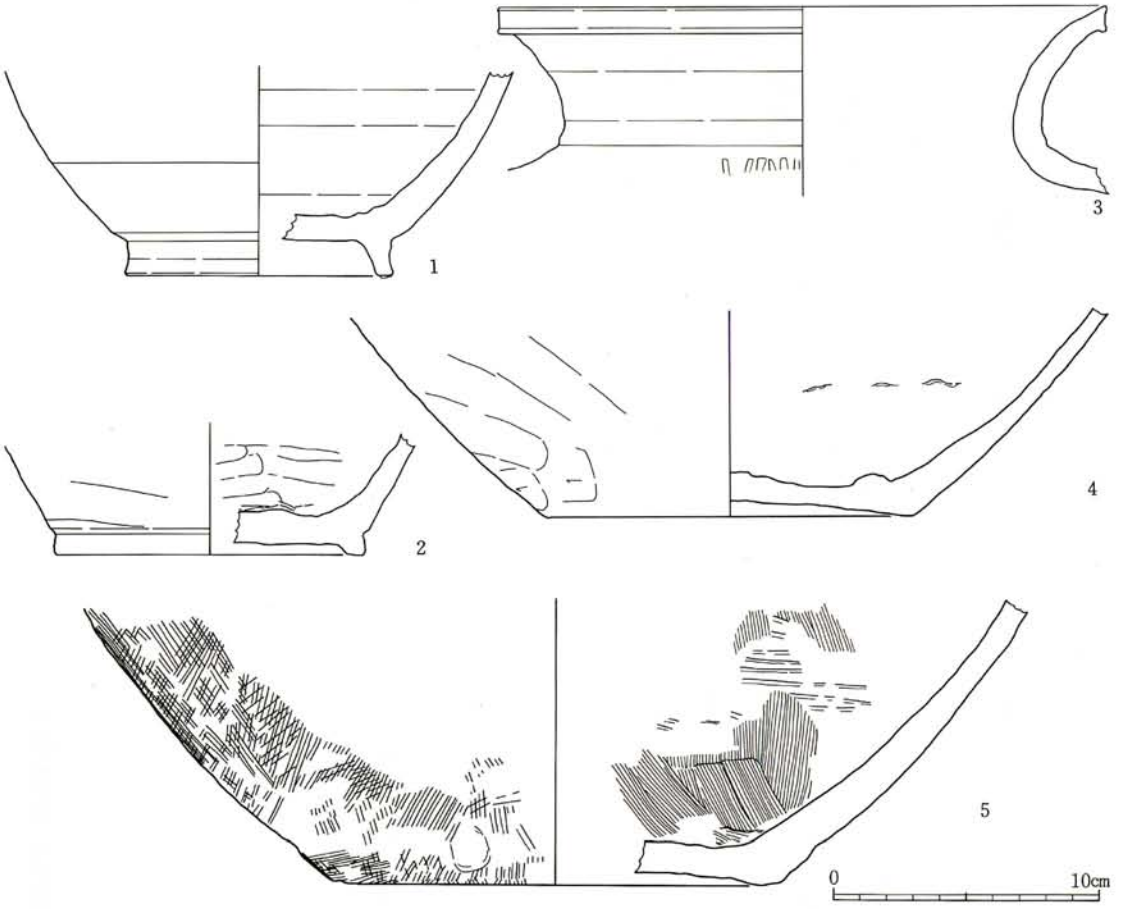
No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	高杯	整地層b	ヘラミガキ	指ナデ	一部				脚部のみ
2	〃	甕	整地層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ロクロナデ	1/2	(13.8)	6.2	7.9	Ⅱ類
3	〃	〃	整地層b	〃	〃	一部	(15.6)			Ⅱ類
4	〃	〃	整地層	ロクロナデ	〃	〃	(20.4)			Ⅱ類同一個体と思われる底部あり
5	〃	〃	整地層b	平行叩きのち ロクロナデ 体部～底部 手持ヘラケズリ	刷毛目					Ⅱ類

第26図　整地層出土遺物(1)



No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	整地層	ロクロナデ 体部下端～底部手持ヘラ削り	ヘラミガキ、黒色処理	一部		(7.0)		
2	〃	〃	整地層b	〃 底部手持ヘラ削り	〃 〃	1/4	(11.1)	(6.2)	3.5	
3	〃	〃	〃	〃 底部手持ヘラ削り	〃 〃	一部	(14.5)	(6.8)	4.4	
4	〃	〃	〃	〃 底部回転糸切り	〃 〃	1/3	(13.0)	6.0	4.4	ヘラ書きあり
5	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	1/2	(14.0)	(6.0)	4.5	
6	〃	〃	〃	〃 〃	〃 〃	1/3	(14.0)	(5.6)	4.6	
7	〃	〃	〃	〃 底部回転糸切り？	〃 〃	1/4	(16.8)	5.8	4.7	
8	〃	〃	〃	ロクロナデ	〃 〃	〃	(24.6)	(13.6)	6.5	
9	〃	高台付杯	〃	ロクロナデ 底部回転糸切り	〃 〃	〃	(18.0)	8.0	6.9	
10	須恵器	杯	整地層	〃 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	完形	12.3	6.9	4.4	Ⅴ類
11	〃	〃	〃	〃 底部回転ヘラ切り、ナデ	〃	1/4	(14.3)	(7.2)	4.2	Ⅳ類
12	〃	〃	整地層b	〃 底部回転ヘラ切り？	〃	〃	(11.6)	(7.0)	3.9	
13	〃	〃	整地層	〃 底部回転糸切り	〃	1/2	13.1	6.5	4.0	Ⅶ類
14	〃	〃	整地層b	〃 〃	〃	1/4	(13.9)	(4.5)	4.9	Ⅶ類
15	〃	〃	〃	〃 〃	〃	2/3	(14.6)	6.6	4.7	Ⅶ類
16	〃	蓋	整地層	ロクロナデ	〃	一部				擬宝珠のつまみ
17	〃	—	〃	〃	〃	〃		8.0		

第27図　整地層出土遺物(2)



No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	壺	整地層b	ロクロナデ、回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	ロクロナデ	一部		(10.2)		
2	〃	〃	整地層	ロクロナデ、回転ヘラ削り、布目痕あり	ロクロナデ、指ナデ	〃		(11.6)		
3	〃	甕	〃	〃 平行叩き	ロクロナデ	〃	(22.9)			
4	〃	〃	整地層b	手持ちヘラケズリ、底部ナデ	ヘラナデ	〃		(13.8)		
5	〃	〃	〃	平行叩き、ナデ	青海波文、ヘラナデ			(16.6)		

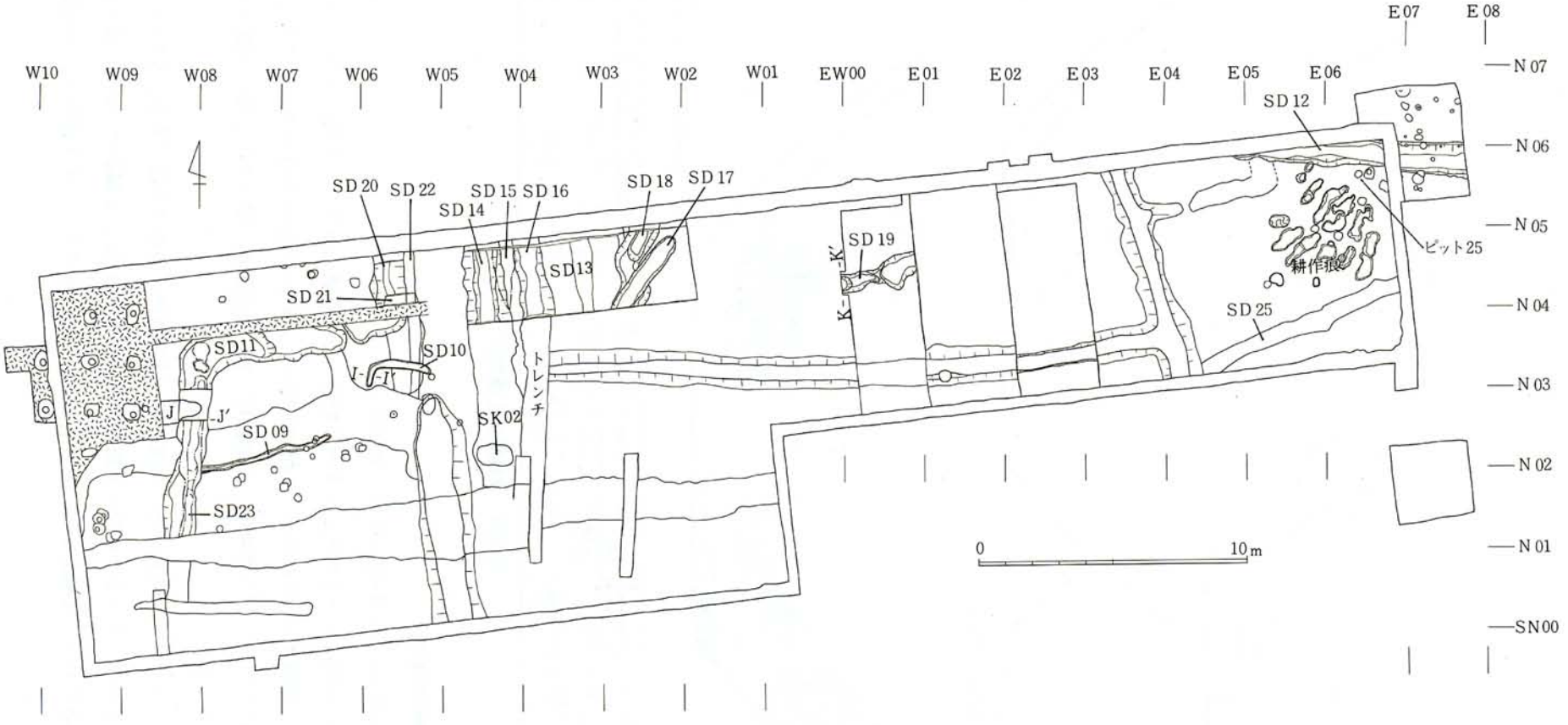
第28図　整地層出土遺物(3)

(13)　Ⅶ層上面検出遺構

Ⅶ層上面では、ＳＤ09・10・11・20・21・22・23がある。

ＳＤ09：ＳＤ05の南側において検出した東西に蛇行して走る溝である。ＳＡ01、ＳＤ02・11・11・23に切られる。規模は上幅約0.25m、下幅約0.15mで、深さは約10cmをはかる小溝である。断面形は「Ｕ」字形を呈する。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕があり、他に土製カマドの小片が出土している。

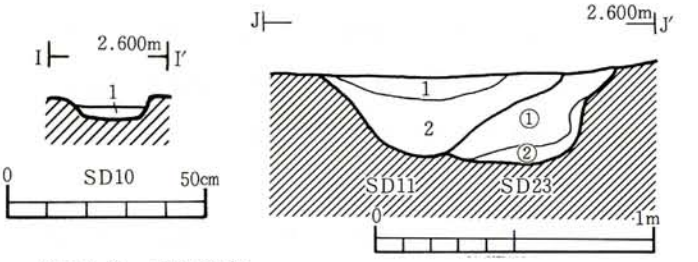
ＳＤ10：Ｂ05グリット付近で検出した。西側で南へほぼ直角に屈曲する溝である。ＳＤ03に切られ、ＳＤ20・22を切っている。規模は全長約2.8m、上幅約0.3m、下幅約0.25mで、深さは約８cmをはかる小溝である。堆積土は褐灰色を呈し、砂質シルトである。出土遺物は、土師器


W10
W09
W08
W07
W06
W05
W04
W03
W02
W01
EW00
E01
E02
E03
E04
E05
E06
E07
E08
N 07
N 06
N 05
N 04
N 03
N 02
N 01
SN00
SD 12
SD 20
SD 22
SD 15
SD 16
SD 14
SD 18
SD 17
SD 19
SD13
SD 21
SD11
SD10
SD 09
SK02
SD23
SD 25
ピット25
耕作痕
トレンチ
J
J'
I
I'
K
K'
0
10m

第29図　遺構配置図(2)

甕、須恵器杯・高台付杯がある。

ＳＤ20・21・22：６号畦畔西側において検出した南北に走る溝である。新旧関係はＳＤ20→ＳＤ21→ＳＤ22となり、ＳＤ10・11に切られる。ＳＤ20は、上幅が約1.1m、下幅が約0.3mで、深さは約20cmをはかる。断面形は船底形を呈する。堆積土は黒色を呈し粘質である。ＳＤ21は上幅が約0.7mで、 断面



ＳＤ１０　土層観察表

層位	土　　色	備　　考
1	10YR6/1褐 灰 色	砂質シルト、酸化鉄・マンガン粒を含む

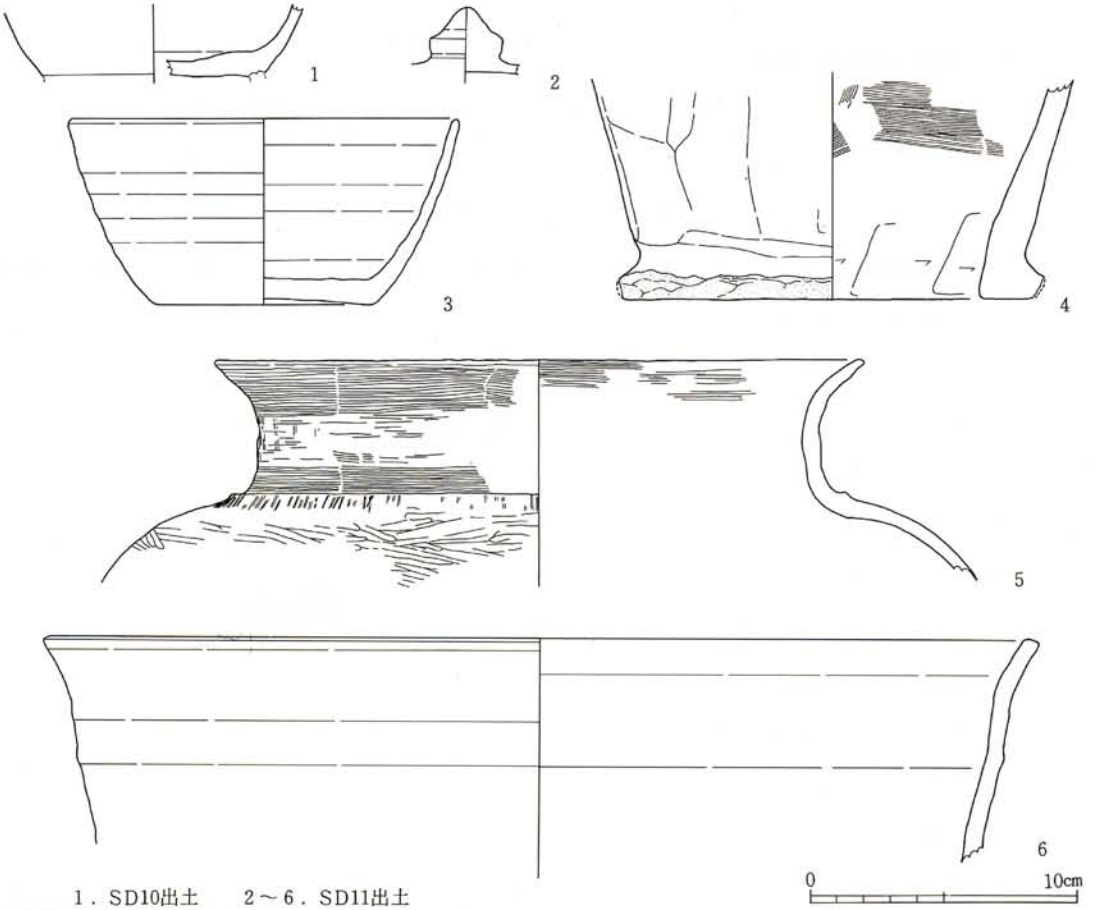
ＳＤ１１　土層観察表

層位	土　　色	備　　考
1	10YR4/2灰黄褐色	ブロック状褐鉄鉱含む
2	10YR3/1黒 褐 色	粘質土

ＳＤ２３　土層観察表

層位	土　　色	備　　考
①	10YR3/1黒 褐 色	粘性砂質土
②	7.5YR2/1黒 色 土	Ⅶ層に近似する

第30図　ＳＤ10・11・23セクション図



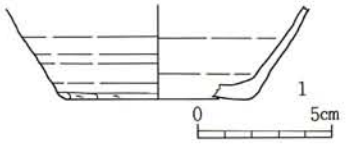
１．SD10出土　　２～６．SD11出土

No.	種　別	器　形	層　位	外　面　調　整	内　面　調　整	残存	口径	底径	器高	備　考
1	須恵器	高台杯	第１層	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	一部				高台欠損
2	〃	蓋	第３層	〃	〃	〃				
3	〃	杯	第４層	〃　底部 手持ヘラ削り	〃	1/3	(14.8)	8.2	7.0	Ⅱ類
4	土師器	不　明	第１層	手持ヘラ削り、ナデ	ヘラナデ、手持ヘラ削り	一部		(15.3)		
5	〃	甕	第４層	横ナデ、刷毛目、ヘラミガキ	横ナデ	〃	(24.4)			Ⅰ類
6	〃	甕	第１層	ロクロナデ	ヘラナデ	〃	(37.4)			Ⅱ類

第31図　ＳＤ10・11出土遺物

形は「U」字形である。堆積土は黒褐色を基調としたシルトである。SD22は西側をSD20・21に切られているため規模は不明である。断面形は緩やかな「U」字形である。堆積土は黒色を基調としたシルトである。各溝からの出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・蓋があり、他に土製カマドの小片が出土している。

SD23：調査区西側において検出した南北に走る溝である。SD01・02・04・05・08・11に切られ、SD09を切っている。規模は南側をSD04・08に切られ、さらに西壁をSD11に切られているため不明である。堆積土は上層が黒褐色で、下層が灰黄色を呈し、全体的に砂質である。



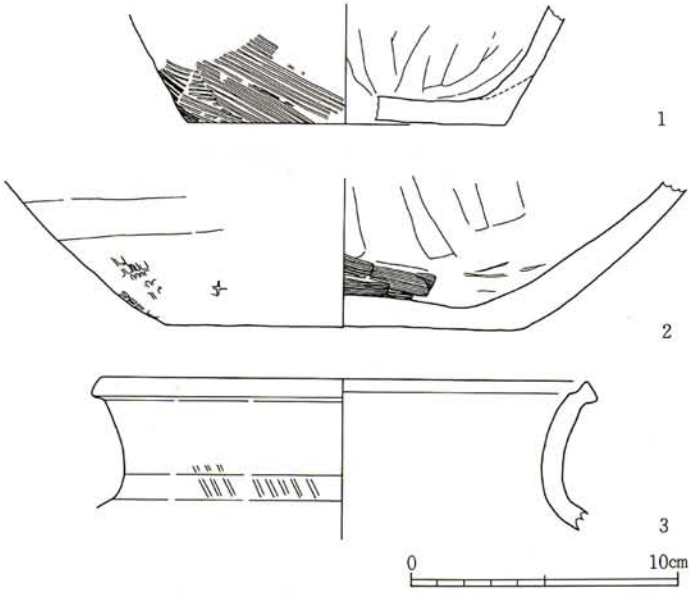
No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	低径	器高	備考
1	須恵器	杯	第2層	ロクロナデ、体部下端手持ヘラ削り 底部ナデ	ロクロナデ	1/5		(6.8)		

第32図　SD21出土遺物

(14)　Ⅷ層上面検出遺構

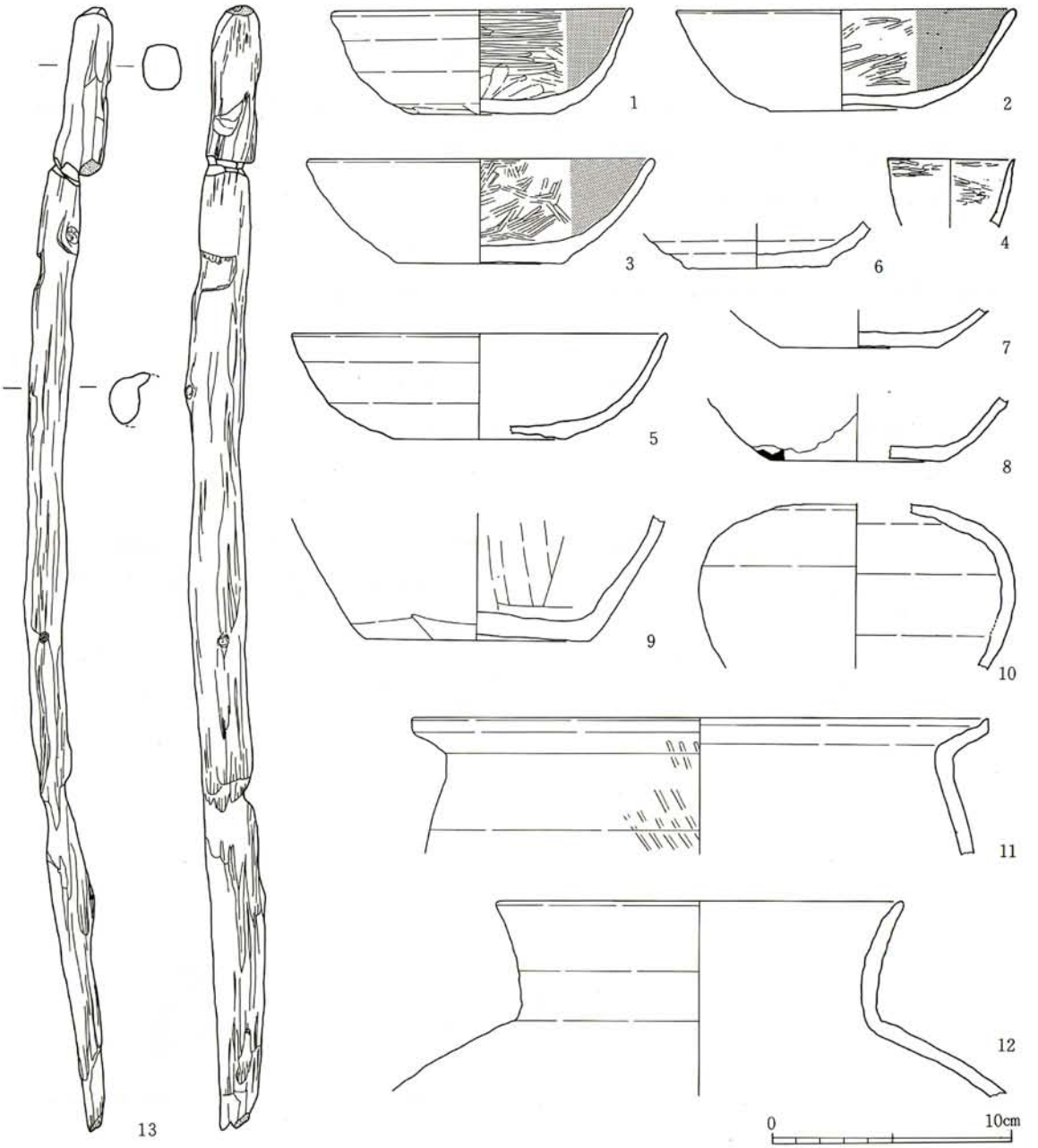
Ⅷ層上面では、SD12・13・14・15・16・17・18・19・25、SK02がある。SD12は調査区北東部において検出した東西に走る溝である。SD13～18は6号畦畔の東側で検出し、SD13・14・15・16は南北に走り、SD17は傾斜し、SD18は南北に蛇行する溝である。SD19はB11グリット付近で検出した東西に走る溝である。SD25は調査区東側において検出した調査区基準線に対して傾斜する溝である。

SD12：1号畦畔に覆われ、ピットや耕作痕によって切られている。規模は上幅が0.95～1.2m、下幅が0.35～0.5mで、深さは約15cmである。断面形は緩やかな「U」字形を呈し、両壁には打ち込み杭の痕跡がみられる。堆積土は黒色を呈し、粘質である。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕があり、他に土製



No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	低径	器高	備考
1	須恵器	甕	第1層	刷毛目	ヘラナデ	一部		(11.8)		
2	〃	〃	〃	ナデ、格子叩き	〃	〃		(13.4)		
3	〃	〃	〃	ロクロナデ、平行叩き	ロクロナデ	〃	(18.9)			

第33図　SD12出土遺物



No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	第1層	ロクロナデ、体部下端～底部手持ちヘラ削り	ヘラミガキ、黒色処理	完形	(12.7)	5.8	4.4	「メ」のヘラ書き
2	土師器	杯	第1層	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	2/3	14.2	6.3	4.2	
3	土師器	杯	第1層	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	1/4	(14.6)	(7.0)	4.4	外面摩滅
4	土師器	杯	第1層	ヘラミガキ、ヘラ削り	ヘラミガキ、黒色処理	一部	(5.2)			
5	土師器	杯	第1層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	1/4	(15.8)	(7.2)	4.4	内面摩滅
6	須恵器	杯	第2層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ロクロナデ	一部		(6.2)		
7	須恵器	杯	第1層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ロクロナデ	一部		(6.6)		
8	須恵器	杯	第1層	ロクロナデ、底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	一部		(7.2)		体部下端～底部に墨痕あり
9	須恵器	甕	第1層	ロクロナデ、手持ちヘラ削り、底部 ナデ	指ナデ	一部		(9.4)		
10	須恵器	壺	第2層	ロクロナデ	ロクロナデ	一部				
11	土師器	甕	第1層	平行叩き→ロクロナデ	ロクロナデ	一部	(24.1)			Ⅱ類
12	須恵器	甕	第2層	平行叩き→ロクロナデ	ロクロナデ	一部	(17.2)			
13	木製品	丸木弓	第2層	現存長 47.2cm、直径約 2.3cm、全体に面取りされているが、腐蝕が著しい。端部にケズリを施し、抉り部をつくる。						

第34図　SD13出土遺物

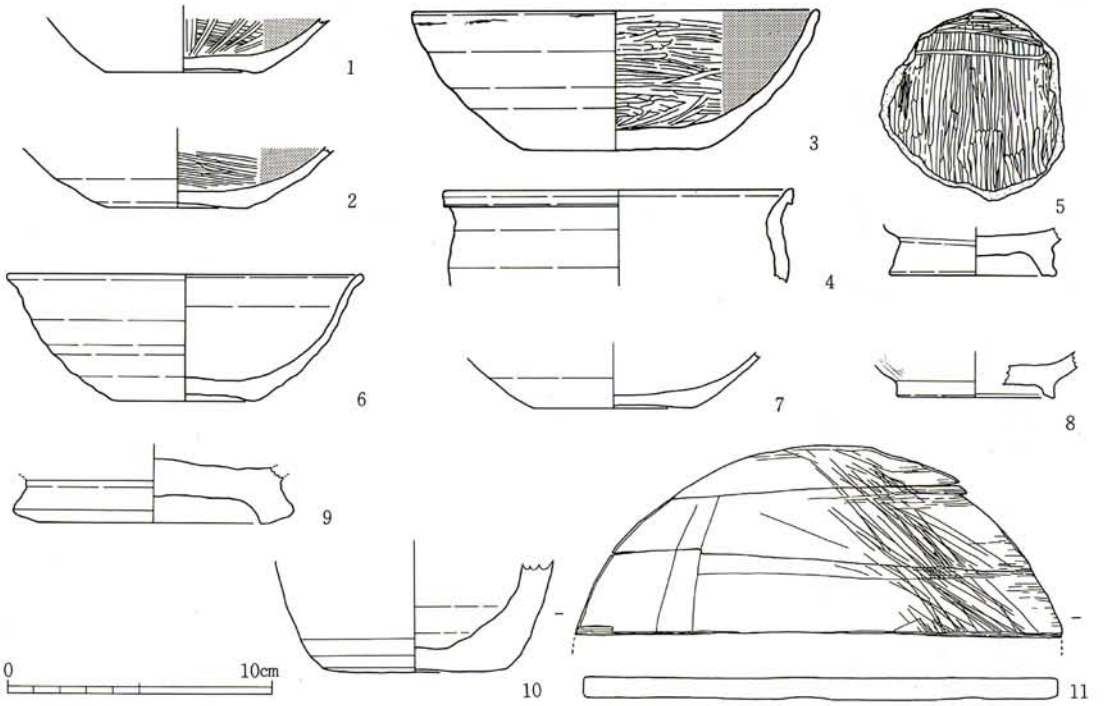
カマドの小片が出土している。

ＳＤ13：ＳＤ16・17・18に切られている。規模は西側がＳＤ16に切られているため不明である。深さは約40cmである。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は上層が黄灰色で、下層は黒褐色を基調とし、粘性がある。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・壺がある。

ＳＤ14：ＳＤ07・04・08・16、ＳＫ01・02によって切られ、ＳＤ15を切っている。上幅が約1.2m、下幅約0.5mで、深さは約50cmである。断面形は緩やかな「U」字形を呈する。堆積土は上層が黄灰色で、下層は黒褐色を基調としたシルト質である。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺があり、他に土製カマドの小片や曲物底板が出土している。

ＳＤ15：ＳＤ14・16に切られ、規模は不明である。堆積土は上層が黒褐色を基調とし、下層はにぶい黄褐色を呈する。出土遺物は、土師器杯、須恵器杯・甕がある。

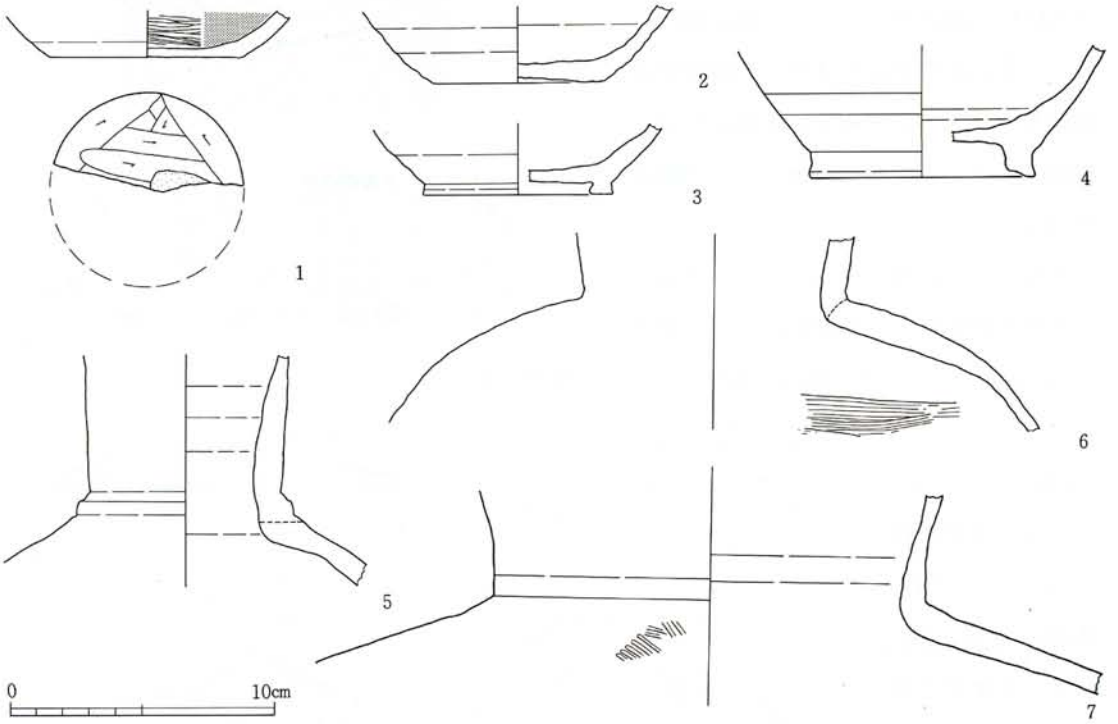
ＳＤ16：ＳＤ13・14・15を切っている。上幅が約1.1m、下幅が約0.6mで、深さは約50cmで



No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	第3層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	一部		(6.0)		
2	土師器	杯	第3層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	一部		(5.4)		底部にヘラキズ
3	土師器	杯	第1層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	1/3	(15.4)	(7.2)	5.3	
4	土師器	甕	第2層	ロクロナデ、	ロクロナデ	一部	(13.2)			Ⅱ類
5	土師器	耳皿	第2層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	一部		6.2		
6	須恵器	杯	第2層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ロクロナデ	1/3	(13.4)	5.4	4.8	Ⅶ類
7	須恵器	杯	第2層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ロクロナデ	一部		6.0		
8	須恵器	高台付杯	第2層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ロクロナデ	一部		(6.0)		
9	須恵器	壺	第1層	ロクロナデ、	指ナデ	一部		(10.5)		
10	須恵器	擂鉢	第1層	ロクロナデ、回転ヘラ削り、底部 ナデ	ロクロナデ	一部		(7.0)		
11	木製品	曲物底板	第1層	柾目材、直径18.8cm、厚さ0.8cm 側面は面取りがされ、片面にキズが多数あり。						

第35図　ＳＤ14出土遺物

ある。断面形は「U」字形を呈している。堆積土は上層が黄灰色で、下層は黒褐色を呈し、全体的に粘性がある。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺があり、他に土製カマドの小片が出土している。



No.	種別	器形	層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	第3層	ロクロナデ、底部 手持ちヘラ削り	ヘラミガキ、黒色処理	一部		(7.3)		
2	須恵器	杯	第2層	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ロクロナデ	一部		(6.2)		
3	須恵器	壺	第2層	ロクロナデ、	ロクロナデ	一部		(7.1)		
4	須恵器	壺	第2層	ロクロナデ、体部下端 回転ヘラ削り	ロクロナデ	一部		(8.4)		
5	須恵器	長頸壺	第3層	ロクロナデ、	ロクロナデ	一部				
6	須恵器	壺	第1層	ロクロナデ、	ロクロナデ、ヘラナデ	一部				
7	須恵器	甕	第2層	ロクロナデ、平行叩き	ロクロナデ	一部				

第36図　ＳＤ16出土遺物

ＳＤ17：ＳＤ13・18を切っている。上幅が約0.7m、下幅が約0.4mで、深さは約10cmである。断面形は緩やかな「U」字形を呈する。堆積土は黒褐色を呈し、シルト質である。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕があり、他に土製カマドの小片が出土している。

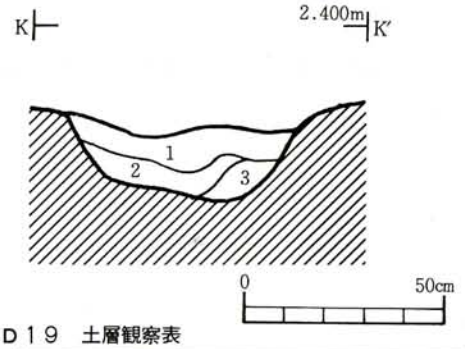
ＳＤ18：ＳＤ17に切られ、ＳＤ13を切っている。上幅が約1.05m、下幅が約0.5mで、深さは約25cmである。断面形は「U」字形を呈している。堆積土は黒褐色を基調とし、粘質がある。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕がある。

ＳＤ19：上幅が0.7～0.85m、下幅が0.35～0.5mをはかり、中央部が脹らんでいる。深さは10～20cmをはかり、西側へ傾斜している。断面形は「U」字形を呈している。堆積土は黒褐色を基調とした粘土質シルトである。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺があり、他

に木製の盤や土製カマド片が出土している。

ＳＤ25：３号畦畔のＶ層（ｄ）に対応する畦畔に覆われている。上幅は約0.6ｍで、深さは約30cmをはかる。断面形は船底形を呈する。堆積土は黒褐色を呈し、粘質である。この溝は平面プランの確認だけである。

ＳＫ02：ＳＤ14を切っている。平面形は長楕円形を呈し、長軸約1.3m、短軸約0.8mをはかる。この土壙は平面プランのみの確認である。



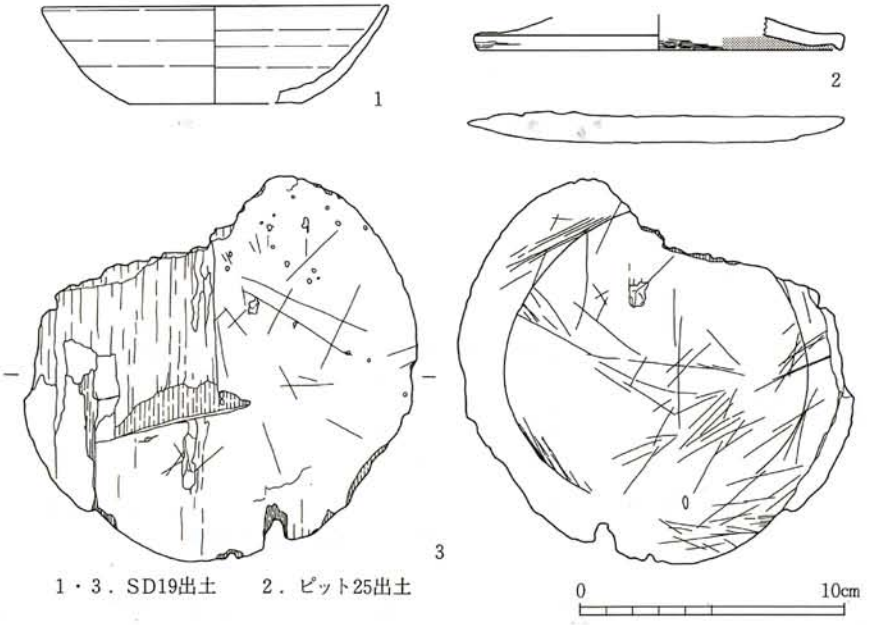
ＳＤ１９　土層観察表

層位	土　色	備　考
1	10YR3/1 黒 褐 色	粘土質シルト、青灰色粘土質土をブロック状に含む
2	10YR3/2 黒 褐 色	〃　植物類を含む
3	10YR3/1 黒 褐 色	〃　青灰色土がブロック状に多量に混入

第37図　ＳＤ19セクション図

(15) ピット

ピットは多数検出されたが、特に西側のⅦ層上面と調査区北東部の微高地である第Ⅷ層上面に集中している。これらのピットの中で柱痕跡のあるものが、建物跡として組み合うかは不明である。



1・3．SD19出土　　2．ピット25出土

No.	種　別	器　形	層　位	外　面　調　整	内　面　調　整	残存	口径	底径	器高	備　考
1	須恵器	杯	—	ロクロナデ、底部 回転ヘラ切り?	ロクロナデ	1/5	(13.0)	(6.4)	3.7	
2	土師器	蓋	第１層		ヘラミガキ、黒色処理	一部	(14.0)			
3	木製品	盤	第２層	征目材。口径15.3cm、器高1.0cm。ロクロ挽きで、底部は丸底気味。底部に多数のキズあり。						

第38図　ＳＤ19・ピット出土遺物

３．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、中世の青磁、近世の陶磁器などの土器類の他に、瓦、土製カマド、土製品、木製品、金属製品、石製品がある。この中で須恵器の出土量が最も多く、土師器がこれに次ぐ。また、土製カマドの出

土量も多い。

これらの出土遺物は、整地層からの出土が最も多いが、全体の器形を復原できるものはその量の割には多くない。

次に各出土遺物の特徴について述べていきたい。

(1) 土 師 器

土師器には、杯、高台付杯、高杯、耳、皿、蓋、甕の器種がある。この中で杯の出土量が最も多い。

〈杯〉

杯の製作技法から大きく2つに分類される。Ⅰ類はロクロ未使用のもの、Ⅱ類はロクロ使用のものである。さらにⅡ類については、底部の切り離し技法と調整技法により細分することができる。

Ⅰ類：ロクロを使用していないものである。底部は平底で、口縁、体部が内弯して立ち上がる(第11図1)。 内面はヘラミガキ・黒色処理をし、外面は上半部ヨコナデ、体部下端から底部にかけて手持ちヘラ削りを施している。

Ⅱ類：ロクロ使用のもので、内面にヘラミガキ・黒色処理を施している点で共通している。底部の切り離し技法により3種類に分類することができる。

Ⅱa 類 ― 体部下端および底部全面に調整され、切り離し痕跡が残らないものである。調整の技法は、回転ヘラ削りを施すものと手持ちヘラ削りを施すものがある。法量や器形にばらつきがある。体部は全体的に内弯気味に立ち上がるものと直線的に外傾し立ち上がるものがある。

Ⅱb 類 ― 回転ヘラ切りのものである。出土量は非常に少なく、また小破片のため図示できるものはない。調整は、無調整のものと手持ちヘラ削りを施すものがある。

Ⅱc 類 ― 回転糸切りのものである。無調整のものと底部周縁に手持ちヘラ削りを施すものがある。法量や器形にばらつきがある。体部は全体的に内弯気味に立ち上がる。

〈高台付杯〉

出土量が少なく、図示できたものは1点だけである。器形は、体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部で外反するものである(第27図9)。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。高台はあまり外にふんばらない。

〈蓋〉

出土量が少なく、破片のため全体の器形は不明である。第38図2は口縁部の小片で、口縁端部を下方に折り曲げている。外面はロクロナデ、内面から口縁端部の外面までヘラミガキを施し、内面はヘラミガキ・黒色処理をしている。

〈耳皿〉

2点のみの出土である(第11図6、第35図5)。杯部を両方から内側に折り曲げて耳にしている。内面にヘラミガキ・黒色処理を施している。底部には回転糸切り痕が残る。

〈甕〉

出土量は多いが、ほとんどが破片のため図示できるものは少ない。成形の際にロクロを使用しないもの(Ⅰ類)と使用しているもの(Ⅱ類)がある。

Ⅰ類:出土量は少なく、図示できるものは1点のみである。第31図5は口縁部が外反する甕である。体部の大半を欠損しているため全体の形態は不明であるが、肩部が張ることから、体部は球形になるものと推定される。外面口縁部は刷毛目後横ナデ、胴部は刷毛目後ヘラミガキを施している。内面は口縁部を横ナデしている。底部に木葉痕や莚状圧痕の残るものがある。

Ⅱ類:小形のものと大形のものがある。小形のものは、口縁部が外反し、端部が上方につまみ出される。最大径の位置が口縁部にあり体部がやや張るものである。体部下端にヘラ削りを施すものや、底部に回転糸切り痕が残るもの(第26図2)もある。大形のものは、口縁部が外反し、端部が上方につまみ出されている。最大径が体部にあるものと口縁部にあるものとがある。前者は、体部外面に縦方向のヘラ削りを施し、内面は横方向の刷毛目が施されている。

この他に、体部から口縁部にかけての破片で全体の器形は不明であるが、体部が直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁部でやや直線的に外反するものがある(第31図6)。

〈高杯〉

脚部の破片が1点出土している。円筒状を呈し、中央部が膨らむものである。外面はヘラミガキを施し、内面は指ナデを施している(第26図1)。

〈不明土器〉

体部下方部付近の破片で、2点(第7図9、第14図2)出土している。体部は直線的に外傾し、底部は「L」字状に外側へ開くものである。器面調整は、外面体部をヘラ削りし、外側に曲折する付近を工具状のものでナデている。内面は体部にヘラナデを施し、体部下端から底部にかけてヘラ削りしている。

この他に羽釜と思われる土器が出土しているが、小破片のため図示することはできなかった。

(2) 須 恵 器

須恵器には杯、高台付杯、蓋、壺、甕の器種がある。この中で杯の出土量が最も多い。

〈杯〉

各堆積土中から出土しているが、整地層、第Ⅲ層からの出土が最も多い。これらの杯をロクロからの切り離しや調整技法から、7種類に分類することができる。

Ⅰ類:回転ヘラ削り調整を底部全面に施しているため切り離し痕跡が残らないものである

(第10図２)。図示できたのは１点だけである。体部は直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。

Ⅱ類：手持ちヘラ削り調整を底部全面に施しているため、切り離し痕跡が残らないものである(第10図３、第31図３)。第31図３は全体の形態がわかる唯一のもので、体部が内弯気味に立ち上がる比較的大形のものである。底部の削りは一定方向に施されている。

Ⅲ類：回転ヘラ切り後、底部及び体部下端にかけて手持ちヘラ削りを施しているものである。図示できたのは１点のみで、体部はやや直線的に立ち上がり口縁部に至る(第11図２)。

Ⅳ類：回転ヘラ切り後、軽くナデ調整を施しているものである(第７図８、第27図11)。体部はほぼ直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至るものと口縁部でやや外反するものがある。この類の中には体部下端から底部周縁のみにだけナデ調整を施すものがある。

Ⅴ類：回転ヘラ切り後、無調整のものである(第12図５、第16図１・２、第27図10)。体部は直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至るものと、口縁部で外反するものがある。この類の中には底部が上げ底気味のものがみられる。

Ⅵ類：回転糸切り後、底部周縁に回転ヘラ削りや手持ちヘラ削りを施しているものである。小破片のため図示できるものはない。

Ⅶ類：回転糸切り後、無調整のものである(第10図４、第27図13・14・15、第35図６)。体部は内弯気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至るものと、口縁部でやや外反するものとがある。

以上のように７種類に分類することができるが、大きくは切り離し不明のもの(Ⅰ・Ⅱ類)、回転ヘラ切りのもの(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類)、回転糸切りのもの(Ⅵ・Ⅶ類)に分けることができる。

〈高台付杯〉

図示できたものは５点だけである。この中で形態のわかるものは１点(第11図３)だけで、体部は直線的に立ち上がり、口縁部でやや外傾するものである。高台は短く、外側にふんばらない。いずれも高台を底部に貼り付け、ロクロナデ調整を施している。

〈蓋〉

全体の形態がわかるものは出土していない。ツマミ部が残存しているものの形態は擬宝珠を呈するものとリング状を呈するものとがある。口縁端部はほぼ垂直に短く下方へ折り曲げている。天井部は扁平なものと丸味をもつものがあり、ほとんどのものには天井部に回転ヘラ削り調整が施されている。第19図１は、外面天井部に「得□」と墨書され、内面には擦痕や墨痕がみられ、転用硯として使用されたものである。

〈壺〉

壺には短頸壺と長頸壺がある。いずれも破片のため、全体の形態がわかるものは出土していない。短頸壺には小形のもの(第13図１)と比較的大きめのもの(第10図13)がある。前者は口縁

部が垂直に立ち上がり、口縁端部が外方に丸くつまみ出され、肩部がやや張り出す。後者は口縁部が垂直に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめ、肩部はさほど張り出さない。長頸壺は頸部が外反し口縁部でさらに外反する。口縁端部で上下につまみ出される。体部下半から底部にかけて残存するものは、体部下半は回転ヘラ削り、底部は高台の貼り付け後、ロクロナデ調整している。

〈甕〉

出土量は多いがほとんどが破片で全体の形態を知り得るものはない。図示したすべてのものは、最大径の位置が肩部あるいは体部中央部にあるものと考えられる。口縁部、頸部は大きく外反し、口縁端部で上下につまみ出されているものである。外面の頸部や体部には平行叩きの痕跡を残すものが多い。中には頸部に櫛描き波状文を施すものや、体部下半に手持ちヘラ削りを施しているものもある。内面には青海波文のあて具痕がみられるものや、ヘラナデ、刷毛目状の調整を施しているものもある。

〈擂鉢〉

破片が1点出土している(第35図10)。底部の器厚が体部よりも薄く、体部は急な立ち上がりを示している。内外面ともロクロナデを施し、内面はロクロ痕が顕著であり、外面の体部下端には回転ヘラ削りを施している。

〈甑〉

体部孔付近の小破片が1点出土している(第10図11)。外面に縦方向と斜め方向の沈線を施している。

(3) 赤焼き土器

杯、皿、高台付杯、高台付鉢の器種がある。ほとんどが破片のため、図示できたものは少ない。杯(第12図11)は、体部がやや内弯気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至るもので、底部は回転糸切り痕が残る。皿(第7図2)は小形で、体部は内弯気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。底部には回転糸切り痕が残る。高台付鉢(第10図18)は高台部のみの破片で、逆「ハ」の字形に開き、外側にふんばる。

(4) 陶磁器

灰釉陶器10点、緑釉陶器1点があり、全て破片である。他に中・近世の陶磁器が出土している。

灰釉陶器には、椀、瓶があり、第10図15～17は、三ケ月形高台を付けた椀である。体部内面に釉がかけられ、底部には重ね焼きの痕跡がみられる。15は外面にも釉がかけられている。他に、図示できないが角高台の付いた椀も1点出土している。第10図14は、瓶の体部破片で外面に薄く釉が塗られている。

中世の磁器には、中国産の青磁があり、青磁の器面には蓮花の文様が描かれている。

近世のものには陶器と磁器がある。陶器は素焼きのものと施釉陶器があり、素焼きの器種には小皿・ホウロクの把手がある。施釉陶器はすべて椀で、この中には古瀬戸が　点ある。磁器では染付の椀が１点出土している。

(5) 硯

硯には円面硯と転用硯があり、円面硯で図示できたものは２点である。第16図４は、硯部と脚部の一部が残存しているだけで、全体の形態は不明である。硯面の外側には２本の突帯が巡り、１本は上方へつまみ出され、もう１本は横方向につまみ出されている。脚部には縦方向に沈線が描かれている。第16図５は硯部の小片で、陸部が磨滅している。硯部の外側には２本の突帯が巡り、２本とも上方へつまみ出されている。

(6) 瓦

瓦は、各遺構及び堆積土より多数出土している。種類は軒丸瓦、軒平瓦、刻印文字瓦があり、さらに多数の平瓦と丸瓦が出土している。

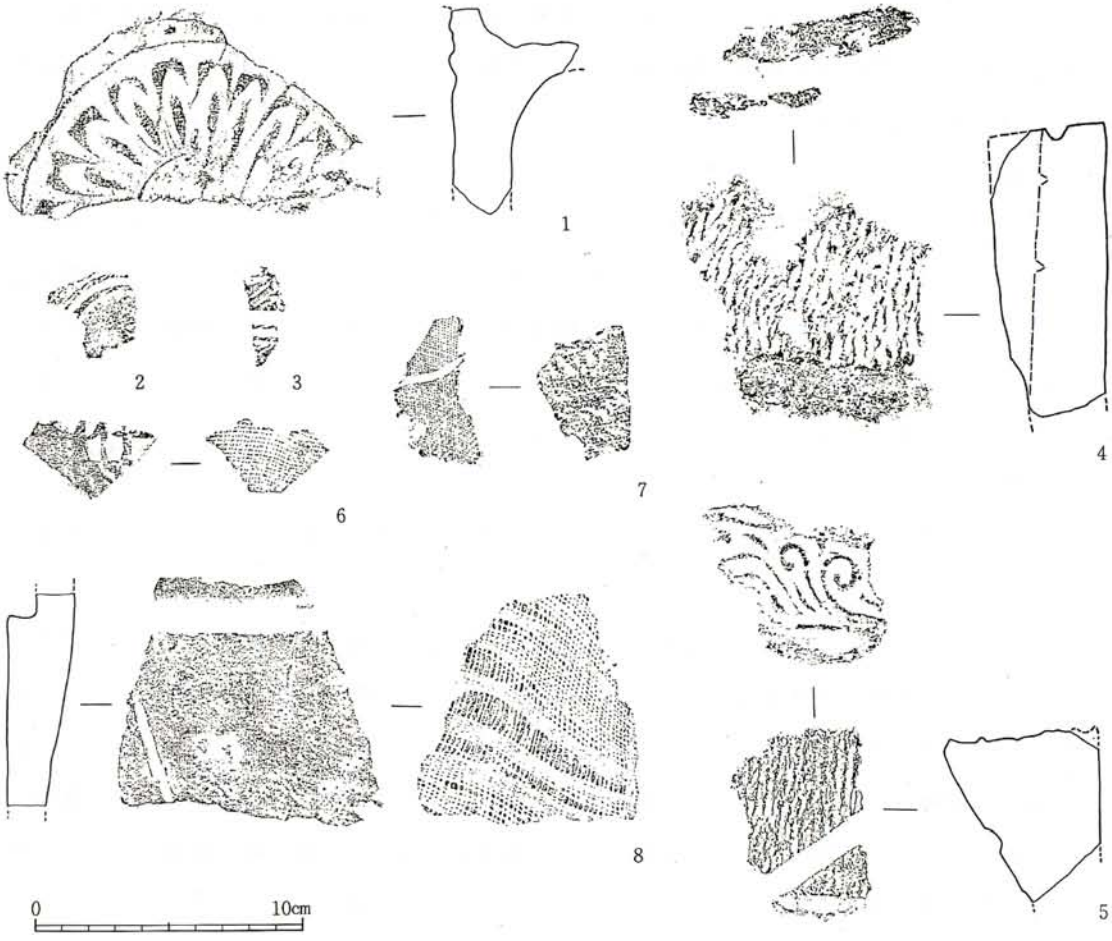
軒丸瓦は重圏文が２点、細弁蓮花文が１点出土している。重圏文(第39図２・３)は、いずれも小片のため瓦当面の大きさは不明である。瓦当の厚さは３㎝程である。圏線は細い。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰白色である。細弁蓮花文(第39図1)は、瓦当面が約半分欠損しており、さらに周縁も欠損している。この軒丸瓦は、笵を二度押し付けているため、内区の蓮弁がずれており、さらに中房が押しつぶされている。蓮弁の外側には一重の細い圏線が巡り、外区には楕円形の文殊を配している。中房はおそらく１＋５の円形蓮子が配されるものと思われる。瓦当裏面はヘラ削りを施しており、さらにヘラキズがみられる。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰色を呈している。

軒平瓦は上下の区画線が１本の均整唐草文(第39図５)と、ヘラ書き単弧文(第39図４)とがある。均整唐草文は顎面に鋸歯文とその下に一本の直線を施している。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰色を呈している。単弧文は顎面に縄叩き目が残り、胎土は砂粒を多く含み、色調は灰色を呈している。

刻印文字瓦(第39図６)は、丸瓦の凸面に「伊」と刻印されたものが１点である。

平瓦は、叩きの原体、製作、調整を観察すると、叩きでは縄目があり、またはナデと削りを施し、叩きの原体を消しているものがある。縄目の叩きの中には、部分的にナデを施しているものと縄目が潰れているものがある。凹面は布目痕が残るものと布目をナデ消しているものがある。または凹面に糸切り痕の残るものもみられる。

丸瓦は、すべて破片であるが、形態は玉縁付きの有段丸瓦である。凸面はほぼ全面にロクロナデによる調整痕がみられ、調整のおよばない部分ではそれ以前の工程の縄叩き目が観察できる。凹面には布目痕が残るものである。



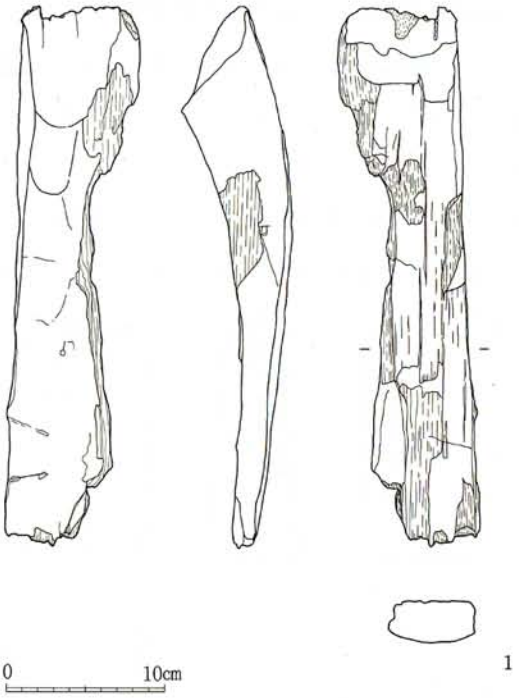
No.	種　別	層　位	備　考	No.	種　別	層　位	備　考
1	軒丸瓦	SD13第1層	細弁蓮花文	5	軒平瓦	SD14第1層	均整唐草文
2	軒丸瓦	A-16第Ⅲ層	重圏文	6	丸　瓦	C-17第Ⅲ層	凸面に刻印圏
3	軒丸瓦	B-16第Ⅲ層	重圏文	7	丸　瓦	B-17ア　層	凹面にヘラ書き
4	軒平瓦	C-11第Ⅲ層	ヘラ書き単弧文	8	丸　瓦	B-10第Ⅲ層	凸面にヘラ書き？

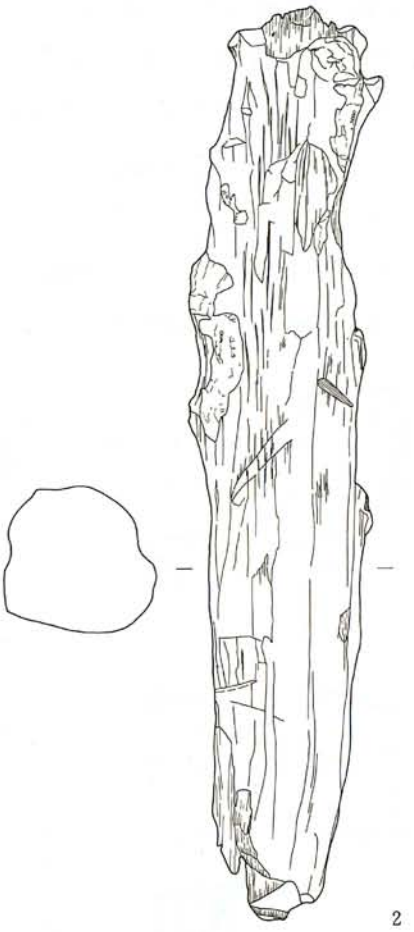
第39図　出土遺物(瓦)

(7) 木 製 品

木製品は第Ⅳ層、ＳＤ13・14・25から６点出土している。種類は、曲物の蓋板・底板、盤、弓、杭、加工材がある。第14図３は曲物の蓋板で、板目材を素材とし周縁には６㎜幅の打ち欠きが施される。第35図11は底板で、柾目板を素材としている。表面には一定方向の傷が見られ、周縁は削りで整形されている。第38図３は柾目板を素材とした盤で、ロクロ挽きによって整形される。底部は丸底気味で、周縁には台部を意識したえぐりが入れられる。内外面には不定方向の傷が見られる。第34図13は直径2.3㎝程の丸木を用いた弓である。全面に面取りが施されているようであるが、腐蝕が進み明瞭でない。端部付近には、削りを入れ抉り部を作っている。第40図２の杭は、丸太材を素材とし、先端部のみが加工されたものである。

第40図1は断面が台形を呈している分割材である。樹皮は残っておらず、荒割の面のままであるが、側面に部分的な加工痕がみられる。





No.	種　類	層　位	備　考
1	加工痕のある分割材	出土地不明	現存長34.1cm、幅7.5cm
2	杭	〃	現存長57cm、幅9.4cm。先端に削り痕

第40図　出土遺物(木製品)

(8) 石　製　品

石製品には砥石、使用痕・加工痕のある礫、磨痕のあるスレート片、使用痕のある軽石片、二次加工のある剝片が出土した。すべて破片で全体の形態がわかるものはない。その大部分は平安時代のものである。

砥　石

砥石は石質が軟質のもの〔Ⅰ類〕と、硬質のもの〔Ⅱ類〕に分類される。

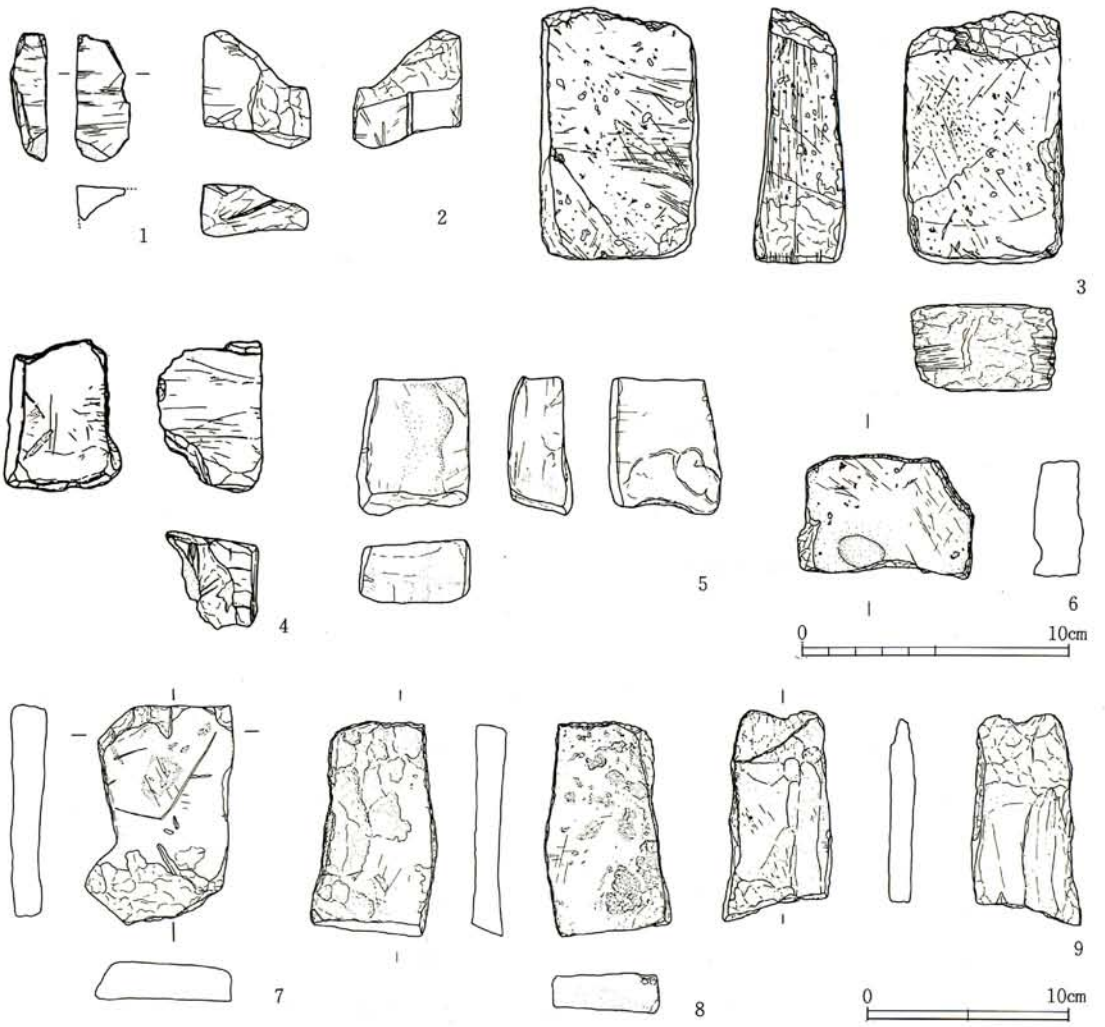
Ⅰ類（第41図1～4）：凝灰岩、シルト岩系の石材を選択した仕上砥～中砥の範囲に入るものである。各面には、磨痕、擦痕、溝状痕が観察される。擦痕は、不定方向のものが多く、方向に統一性は見られない。溝状痕は、主要砥面(凹面)にも見られる場合があるが、破損面(1・2)、あるいは側面・自然面を残す端面(3)にも観察される。溝状痕は刃部を砥面に対して垂直にして研いた際の傷と思われることから、研ぎ方の相違により同一砥面には共存しにくいこと

が考えられる。

Ⅱ類：安山岩、砂岩系の石材が選択された中砥～粗砥の範囲に入るものである。さらに中形（ａ類）、大形（ｂ類）に細分される。

Ⅱａ類（第41図５～９）：いずれも厚さが1.5cm前後をはかり、扁平な断面形態を呈する。７を除いて側端面を砥面として使用したものはなく、幅広の面に限られている。砥面の状態としては、上端面の使用頻度が高いもの(7)、表裏面に舌状のくぼみがあるもの(8)、凸面をもち中央に敲打状のくぼみがあるもの(9)が認められた。

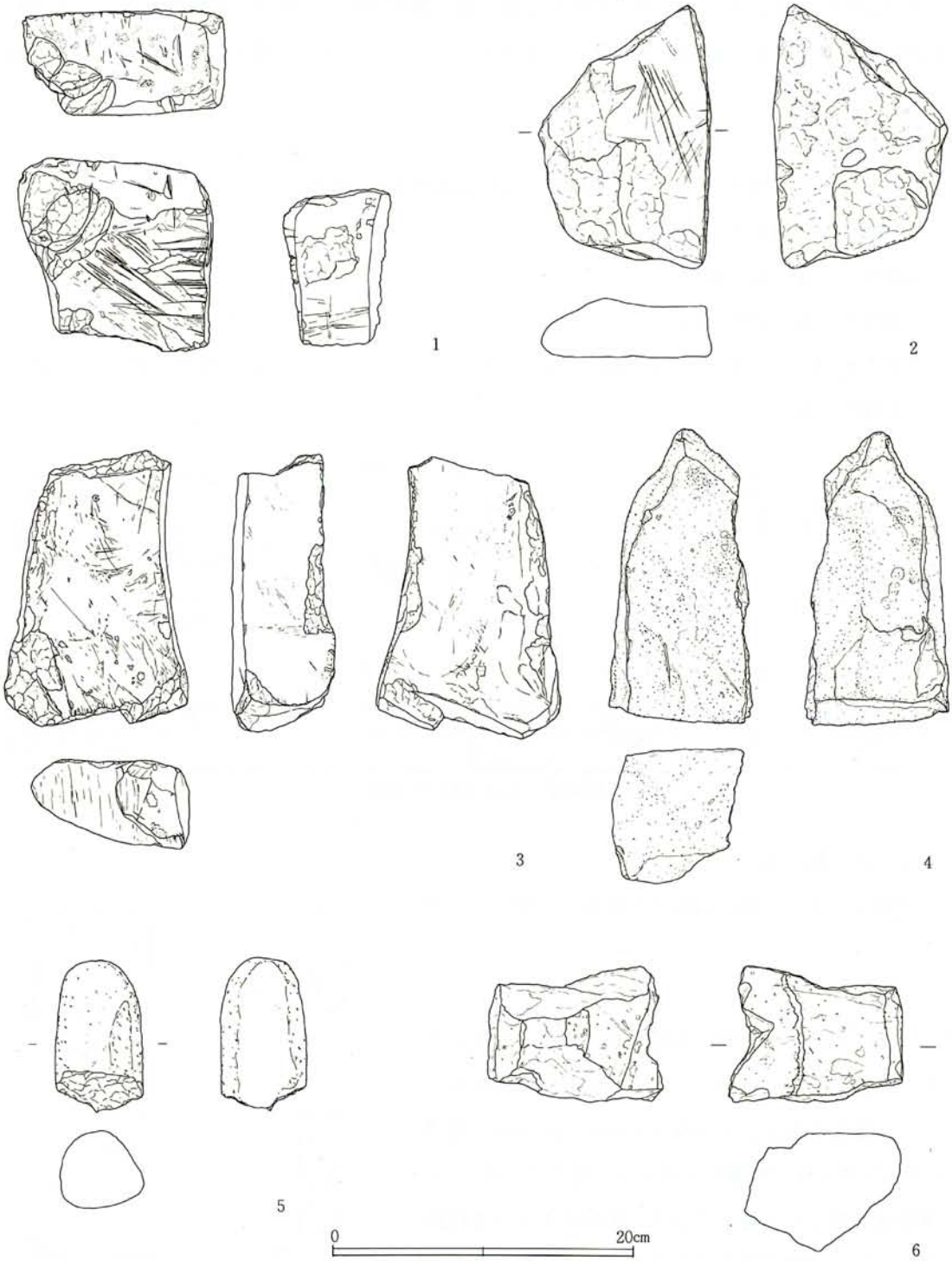
Ⅱｂ類（第42図１～３）：破損しているが形態はすべて略方形状を呈するものと思われる。２はやや扁平で、表面のみ砥面として使用され、溝状痕が認められるものである。１、３はや



No.	種　類	地区名	遺　構	層　位	No.	種　類	地区名	遺　構	層　位
1	砥石（Ⅰ類）	A－08	—	整地層b	6	砥石（Ⅱa類）	A－09	—	整地層b
2	〃	B－16	耕作痕	埋　土	7	〃	D－02	—	第Ⅲ層
3	〃	B－11	SD19	第６層	8	〃	C－17	—	第Ⅶa層
4	〃	E－17	—	第Ⅶa層	9	〃	—	SD04	第１層
5	砥石（Ⅱa類）	—	SD13	第Ⅰ層					

第41図　出土遺物（砥石）

や厚みがあり複数の砥面をもつもので、特に１には溝状痕が顕著に認められる。



No.	種　類	地区名	遺　構	層　位	No.	種　類	地区名	遺　構	層　位
1	砥石（Ⅱb類）	B－07	—	整地層b	4	使用痕・加工痕のある礫	C－01	—	第Ⅵ層
2	〃	—	SD05	第１層	5	〃	B－04	—	整地層b
3	〃	第2トレンチ	—	—	6	〃	B－12	—	第Ⅲ層

第42図　出土遺物（砥石・礫）

使用痕・加工痕のある礫(第42図4～6)

4は台状に加工されたもので、磨痕が器面凸部に観察される。砥石の可能性もある。6は石皿状の器と考えられ、縁辺の高位部が研磨されている。5は棒状の礫を素材としたもので表面(平坦面)が磨滅している。

磨痕のあるスレート片(第43図1)

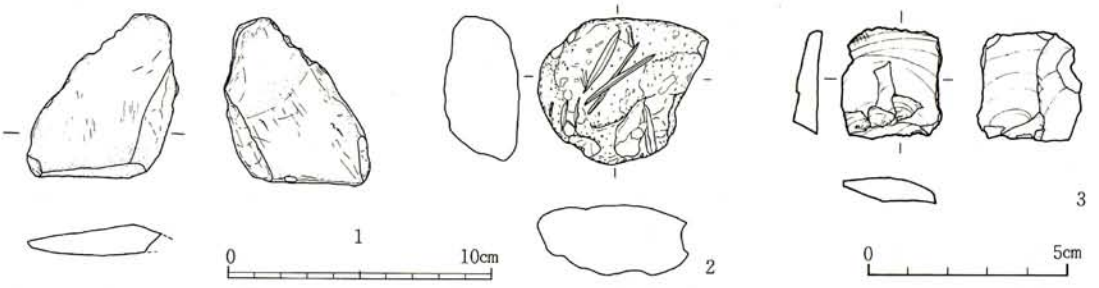
表裏面に磨痕、擦痕があり、右上縁辺には貝殻状剥離痕が観察される。

使用痕のある軽石片(第43図2)

溝状痕が一定方向に見られる。

二次加工のある剥片(第43図3)

頁岩を石材とし、長さ2.7cm、幅2.4cm、厚さ1.1cmをはかる。両側辺に折れがあり、一側辺のみ剥離痕が見られる。



No.	種類	地区名	遺構	層位	No.	種類	地区名	遺構	層位
1	磨痕のあるスレート片	B-04	SD24	第1層	3	二次加工のある剥片	B-15	—	第Ⅱ層
2	溝状痕のある軽石	C-06	SD07	第3層					

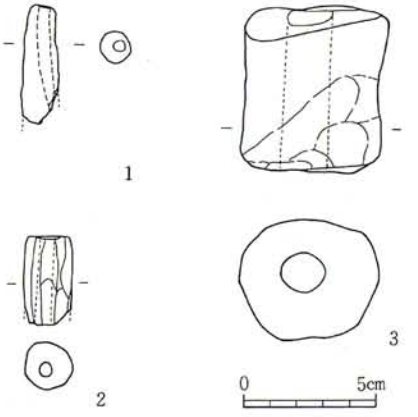
第43図　出土遺物(石製品)

(9) 土製品

土製品には、土錘、円盤状土製品、土製カマドがある。

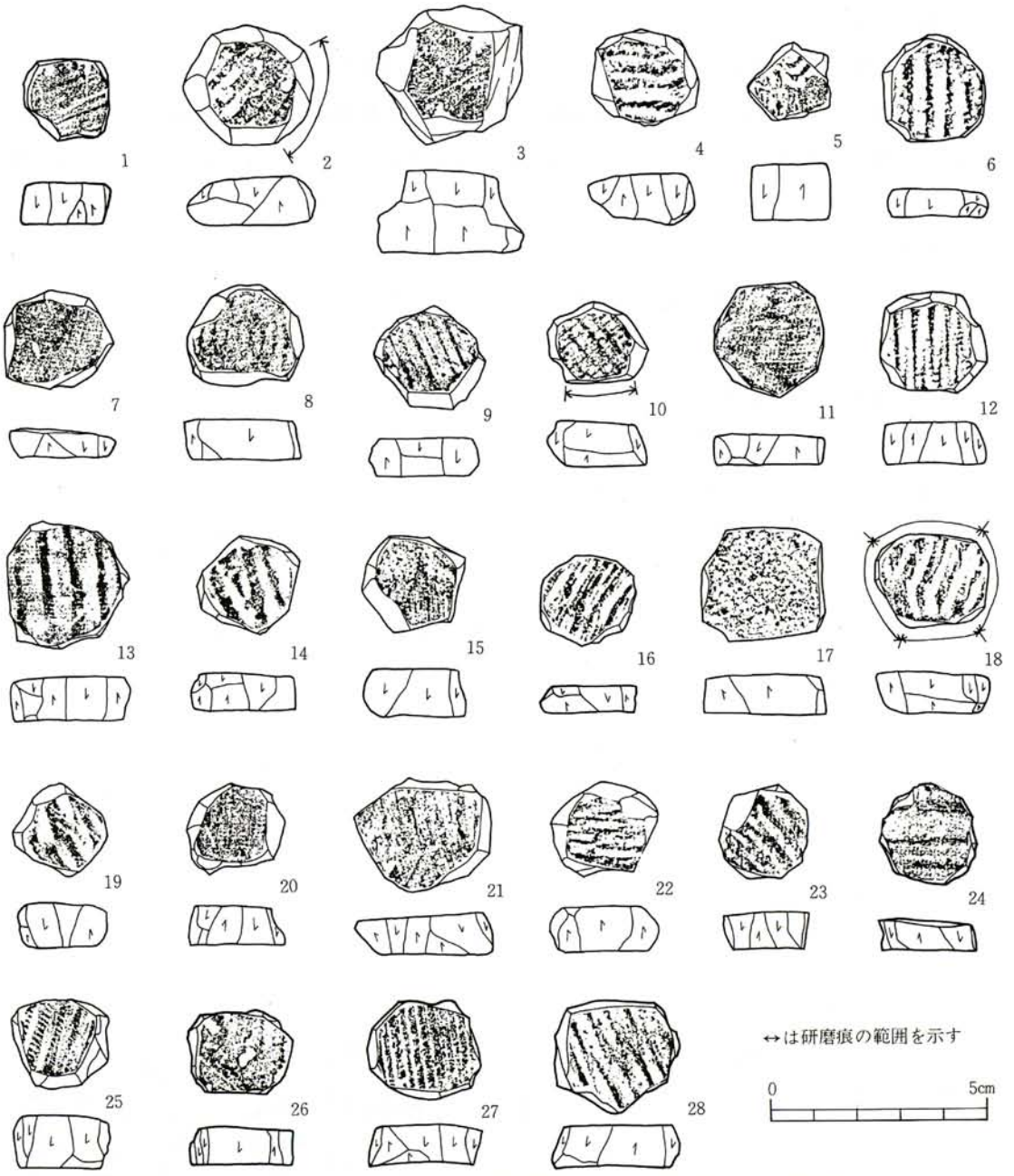
土錘

土錘は基本層位Ⅱ層～Ⅲ層、整地層b、SD07から4点出土した。第25図4、第44図1は紡錘状を呈し、土師質である。4は長さ5.1cm、幅1.3cm、孔径0.4cmをはかり、外面にはオサエを施している。1は磨滅が著しく欠損している。第44図2・3は円筒状を呈し、須恵質のものである。2は小型で外面にケズリを施している。3は大型で長さ6.3cm、幅5.5cm、孔径1.6cmをはかる。



No.	種類	地区名	遺構	層位
1	土錘(土師質)	C-16	—	第Ⅱ層
2	土錘(須恵質)	B-16	—	第Ⅲ層
3	〃	B-08	—	整地層b

第44図　出土遺物(土錘)



No.	地区名	遺構	層位	備考	No.	地区名	遺構	層位	備考
1	E-03	—	第Ⅱ層	須恵器 甕 ケズリ	15	A-04	—	整地層	須恵器 甕 ナデ
2	A-15	—	第Ⅲ層	須恵器 甕 平行叩き	16	B-04	—	整地層	須恵器 甕 平行叩き
3	A-17	—	第Ⅲ層	須恵器 甕 ケズリ	17	B-04	—	整地層	須恵器 甕 —
4	B-09	—	第Ⅲ層	須恵器 甕 平行叩き	18	B-04	—	整地層	須恵器 甕 平行叩き
5	B-12	—	第Ⅲ層	須恵器 甕 —	19	B-04	—	整地層	須恵器 甕 平行叩き
6	B-15	—	第Ⅲ層	須恵器 甕 平行叩き	20	A-08	—	整地層b	須恵器 甕 ナデ
7	C-05	—	第Ⅲ層	土師器 甕 ケズリ	21	A-08	—	整地層b	須恵器 甕 平行叩き
8	D-01	—	第Ⅲ層	須恵器 甕 平行叩き	22	A-08	—	整地層b	須恵器 甕 平行叩き
9	E-03	—	第Ⅲ層	須恵器 甕 平行叩き	23	A-09	—	整地層b	須恵器 甕 平行叩き
10	C-16	—	ア 層	須恵器 甕 平行叩き	24	B-08	—	整地層b	須恵器 甕 ロクロナデ
11	C-09	—	第Ⅳ層	須恵器 甕 ケズリ	25	—	SD01	第1層	須恵器 甕 平行叩き
12	A-04	—	整地層	須恵器 甕 平行叩き	26	B-06	SD02	—	須恵器 甕 ケズリ
13	A-04	—	整地層	須恵器 甕 平行叩き	27	C-02	SD05	第2層	須恵器 甕 平行叩き
14	A-04	—	整地層	須恵器 甕 平行叩き	28	E-06	SD13	第1層	須恵器 甕 平行叩き

第45図　出土遺物(円盤状土製品)

円盤状土製品（第45図）

円盤状土製品は須恵器や土師器の甕の破片を打ち欠き円盤形に整形したものである。まれに周縁を研磨したものもある。基本層位Ⅱ層～Ⅳ層、ア層、整地層、溝から45点出土している。これらは甕の体部破片を用いているが、底部破片も１点ある。大きさは、直径が２～３cmの間に集中し、一定の規格性がうかがわれる。

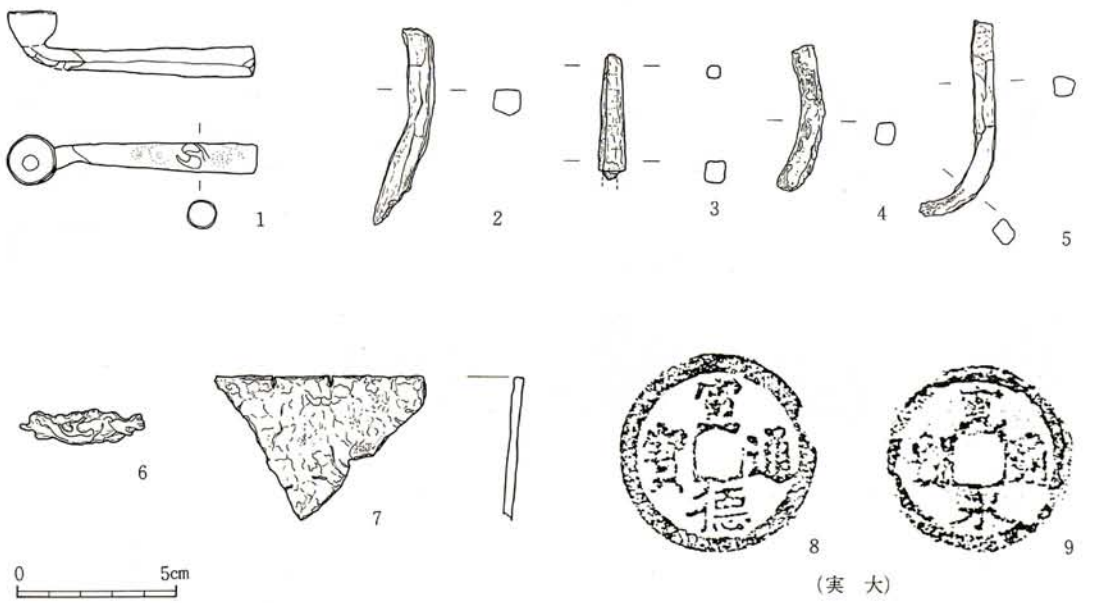
土製カマド

土製カマドは、おもに整地層より平箱に２箱分出土した。すべて小破片であり図示できるものはない。

(10)　金属製品（第46図）

金属製品には、古銭、煙管、鉛玉、釘、飾り金具、鉄椀がある。

古銭は、宣徳通宝(1443年)、寛永通宝(1626年)がⅡ層より各１点出土した。煙管(第46図1)はⅡ層から出土し、点列状に彫り込み唐草文様が施されるものである。不明鉄製品は、整地層から２点、Ⅱ・Ⅲ層から１点ずつ出土した。いずれも断面形が方形を呈するものである。鉛玉はⅡ層から２点出土した。いずれも直径1.2cm前後をはかる。鉄椀は整地層ｂから出土し、厚さ３mmをはかる。



No.	種　類	器　種	地区名	層　位	備　　考	No.	種　類	器　種	地区名	層　位	備　　考
1	銅製品	煙　管	B-17	第Ⅱ層	列点状の唐草文様	6	銅整品	飾り金具	C-10	第Ⅱ層	
2	鉄製品	不　明	B-07	第Ⅱ層	釘　？	7	鉄製品	鉄　椀	B-02	整地層b	
3	鉄製品	不　明	A-16	第Ⅲ層	鉄鏃？	8	銭　貨	銅　銭	D-04	第Ⅱ層	宣徳通宝
4	鉄製品	不　明	B-03	整地層	釘　？	9	銭　貨	銅　銭	C-17	第Ⅱ層	寛永通宝
5	鉄製品	不　明	C-03	整地層	釘　？						

第46図　出土遺物(金属製品)

Ⅴ 考　　察

今回の調査では、水田跡と居住地域を拡大するための整地層、掘立柱建物跡２棟、一本柱列跡１条、溝跡24条、土壙２基の他に多数のピットが検出された。

発見された遺構は、検出面の相違からⅧ層上面検出遺構（Ａ群）、Ⅶ層上面検出遺構（Ｂ群）、整地層ｂ上面検出遺構（Ｃ群）、整地層ａ上面検出遺構（Ｄ群）、Ⅳ層上面検出遺構（Ｅ群）に分類される。これらの各遺構群は、10世紀前半に降下したとされている灰白色火山灰（註10）を基準にして、降下以前のもの（Ａ～Ｃ群）、降下以降のもの（Ｄ・Ｅ群）に大別される。

まず、Ａ～Ｅ群の各遺構の変遷について述べることにする。

Ａ群には、ＳＤ12～20・25、ＳＫ02があり、遺構の切り合い関係からＳＤ13・15→ＳＤ14・18→ＳＤ16・17、ＳＫ02の変遷が認められる。

Ｂ群には、ＳＤ09～11・21～23があり、遺構の切り合い関係からＳＤ22→ＳＤ21・(09)→ＳＤ20・(23)→ＳＤ10・11と変遷する。

Ｃ群には、ＳＢ01・02、ＳＤ07がある。このうち、灰白色火山灰がＳＢ01の柱痕跡に小ブロック状に入り、ＳＤ07には層状に入る。ＳＢ01とＳＢ02は、直接重複していないが両建物跡が近接することや、ＳＢ02の柱穴に灰白色火山灰が含まれていないことから両建物跡には時間的な隔りが考えられる。

Ｄ群には、ＳＡ01とＳＤ02～06がある。このうち、灰白色火山灰がＳＡ01の掘り方に粒状に入り、ＳＤ05には小ブロック状に入る。これらの遺構は重複関係からＳＤ05→ＳＤ06→ＳＡ01→ＳＤ02・03という４時期の変遷が認められる。しかし、ＳＤ05とＳＤ02は同じ場所での切り合いを有しているうえ、ＳＤ02がＳＤ05の形態を踏襲しており、さらにＳＤ05からＳＤ02に推移する間にＳＤ06・ＳＡ01が構築されていることから、これらの遺構の変遷は比較的短期間に行なわれたものと推察される。

Ｅ群には、ＳＤ04・08・24があり、遺構の切り合い関係からＳＤ08→ＳＤ04となる。ＳＤ24は重複がなく不明である。

このような各遺構群と水田跡の関係について、遺構の重複状況から変遷を図式化すると表１のようになる。

ここで、Ⅰ～Ⅴ期を設定した各時期の年代について考察する。

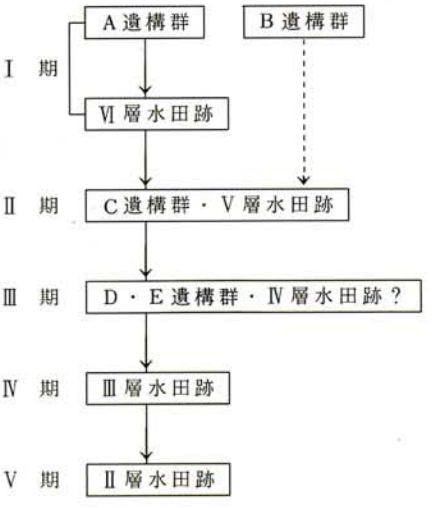


表　1

まず、灰白色火山灰降下時期にあたるⅡ期の遺構より出土した遺物から検討してみたい。整地層ｂ出土の遺物としては、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器がある。土師器杯は表杉ノ入式に属するもので、底部切り離し技法が回転糸切り無調整のものが約８割を占めている。須恵器杯においても約６割が回転糸切り無調整であり、両者の主体を占めている。この他に、角高台をもつ灰釉陶器の椀が出土している。この灰釉陶器は、東海地方の猿投窯編年による黒笹14号窯式に相当するもので、猿投窯跡群において９世紀後半に比定される。また、Ⅴ層水田跡出土の遺物としては、土師器、須恵器、赤焼き土器があり、ほとんどが小破片である。第12図11の赤焼き土器は回転糸切り無調整で、白鳥良一氏の「多賀城跡出土土器の変遷」によればＥ群土器の須恵系土器に類例が求められ、10世紀前半に出現したとされている。

次に、遺構の堆積土と灰白色火山灰の関係について述べると、ＳＢ01の柱痕跡に灰白色火山灰が含まれ、ＳＤ07の底面近くにも灰白色火山灰が多量に含まれていることが確認されている。Ⅴ層水田跡の耕作土の状況は、層中に灰白色火山灰がブロック状もしくは粒状に混入しており、降灰後も水田として耕作されたものと考えられる。以上のことからⅡ期の年代は、おおむね10世紀前半頃と推察される。

Ⅰ期（Ａ・Ｂ群）の遺構から出土した遺物としては、土師器、須恵器、瓦がある。土師器杯は、ほとんどが表杉ノ入式に属するもので、ロクロを使用していないものは僅かに数片である。Ⅳ層水田跡から出土した遺物には、土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦がある。このうち瓦は、細弁蓮花文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦があり、多賀城政庁跡の第Ⅲ期に位置づけられるものである。Ⅰ期は、多賀城政庁跡第Ⅲ期の瓦が出土していること、整地層ｂに覆われていることから10世紀前半以前の時期が与えられ、おそらくは９世紀代に機能していたものと推察される。

Ⅲ期の遺構（Ｄ・Ｅ群）は、整地層ａとⅣ層の重複がなく新旧関係が不明であるが、灰白色火山灰降下後という点で共通している。したがってⅢ期は10世紀前半以降の年代が与えられる。

Ⅳ期は、中世以降の遺物が出土していないことから平安時代におさめることができよう。

Ⅴ期の遺構出土遺物には、中世～近世にかけてのものがある。中世の遺物には青磁の破片、宣徳通宝が各１点出土したにすぎず、これらをもって中世の年代を与えるには決め手に欠けよう。近世の遺物としては、内面に圏線のある志濃の皿や、江戸時代末期頃の陶磁器が多く出土している。また、寛永通宝や煙管が出土していることにより、Ⅴ期は江戸時代を中心として営まれたものと考えられる。さらに、近代の陶磁器が若干出土していることや、明治19年の地籍図に描かれている畦畔と同方位であることが確認されたため、近代まで使用されたものと思われる。

Ⅵ まとめ

今回の調査では、５時期の遺構の変遷が確認された。以下簡略に変遷と問題点を述べ、まとめとしたい。

Ⅰ期は、溝（Ａ群）が廃絶した後にⅥａ層水田跡が営まれる時期である。微高地縁辺の低湿地に水田が選地され湿地的様相が強い。

Ⅱ期は10世紀前半頃で、微高地縁辺を整地盛土し水田域が縮小する時期にあたる。整地面にはＳＢ01があり、水田域に近接することから水田に関係する建物と考えられる。水田跡土壌から乾田的様相が強い。

Ⅲ・Ⅳ期は10世紀前半以降の時期である。Ⅲ期にはＳＤ02・05、ＳＡ01とＳＤ04・08がある。前者と後者は検出面が異なることから当然時期差があると考えられたが、Ⅳ層の堆積範囲が限られていたこともあり、十分に把握することはできなかった。ＳＤ02・05、ＳＡ01は整地層（居住地）端に位置することから区画の意味を持った施設であると推定される。Ⅳ期は畦畔のみの検出であった。４号畦畔は整地層ｂ付近から確認できなくなった。このことは整地層を居住地としたため意識的に作らなかったものか、あるいはⅡ層水田耕作時に削平されてしまったのか、どちらとも判断が下されなかった。この時期は、酸化鉄やマンガンの沈澱から乾田であったと考えられる。

Ⅴ期は近世の水田跡で、調査区全域を水田域としている。

本調査区内で検出した整地層は、居住地域を意図してつくられたものであることが判明したが、調査区は微高地から低湿地に移行する部分にあたり、集落の中心部は調査区外にあるものと考えられる。また、検出された畦畔の内、南北方向の３・６号畦畔は、古代から近代にわたりほぼ同一方向と同位置に重複していることから古代の畦畔を近代まで踏襲していたと推定される。なお、Ⅵａ層下の遺構は平面プランの確認のみにとどめたものもあり、遺構の性格等については不明な点を多く残した。

南側に隣接する水入地区の調査では、９世紀中葉を中心とした遺構が発見されている。本地区のⅠ期遺構群と水入地区のものとが同時期に機能していたのであろうが、直接的な遺構のつながりや層位の関係がつかめなかったため具体的な関連を指摘することはできない。

本遺跡の北西に位置する伏石地区においても平安時代の水田跡が発見されており、これまでの調査例から微高地に居住地、湿地帯に水田跡が存在する可能性が高くなったといえる。国府多賀城の南西一帯に位置する本遺跡において水田跡が発見されたことは、多賀城周辺の周落構成を解明する上で重要な課題を提示したものと思われる。

（註）

註１．多賀城市・多賀城市教育委員会「志引遺跡」多賀城市文化財調査報告書第６集（1984）

註２．多賀城市教育委員会「市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第５集（1984）

註３．宮城県教育委員会「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ」宮城県文化財調査報告書第52集（1978）

註４．多賀城市教育委員会「市川・高崎遺跡」多賀城市文化財調査報告書第３集（1982）〔ａ〕

宮城県多賀城跡調査研究所「第22次発掘調査」多賀城調査研究所年報1973（1974）〔ｂ〕

註５．宮城県教育委員会「水入遺跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第84集（1982）

註６．多賀城町「多賀城町誌」（1967）

註７．佐藤甲二氏の御教示によれば、このような状況は仙台市欠ノ上遺跡においても確認されたという。

註８．松井健「岡山県津島遺跡における弥生時代の灌漑水利用の水田の存在について」考古学研究16―4（1970）

註９．プラントオパール分析結果の頃を参照。

註10．白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所（1980）

〈参考・引用文献〉

１．工藤哲司他　「富沢水田遺跡　第１冊」『仙台市文化財調査報告書第67集』(1984)

２．佐藤甲二　「後河原遺跡」『仙台市文化財調査報告書第71集』(1984)

３．田中則和他　「山口遺跡Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書第61集』(1984)

４．篠原信彦他　「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書第56集』1983.

５．「月刊　文化財」10　第一法規（1978）

６．横倉興一他　「日高遺跡（Ⅳ）」『高崎市文化財調査報告第34集』(1982)

７．群馬県立歴史博物館「発掘された古代の水田」(1980)

８．八賀　晋　「古代における水田開発―その土壌的環境―」『日本史研究　96』(1968)

９．古泉　弘　「江戸を掘る」柏書房（1983）

10．高倉敏明他　「市川橋遺跡―昭和57年度発掘調査報告書―」『多賀城市文化財調査報告書第４集』(1983)

11．宮城県多賀城跡調査研究所　「第37次発掘調査」『多賀城跡調査研究所年報1980』(1981)

12．宮城県多賀城跡調査研究所　「多賀城跡・政庁跡本文編」(1984)

13．斎藤孝正　「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』No.211　ニューサイエンス社（1982）

14．小井川和夫　「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書第83集』(1982)

Ⅶ　プラントオパール分析結果

宮崎大学農学部　藤　原　宏　志

市川橋遺跡採取試料についての分析結果を下記の通り御報告致します。

（Ｅ－03地点）

○１層～８ａ 層は水田跡と判断される。

○８ｂ層～10層ではイネが検出されず、水田跡ではないと考えられる。

○１層～10層までタケ亜科（ササ類）が多く比較的乾燥した状態だったようである。ただし、ｂ～７層堆積時はやや湿潤な環境だったと思われる。

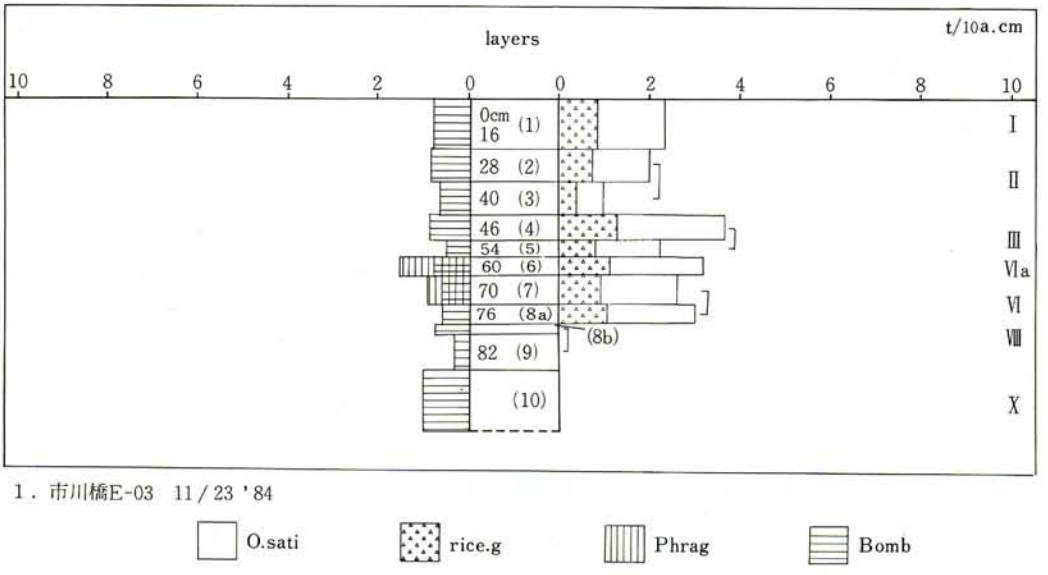
（Ａ－13地点）

○１層～ｂ層は水田跡と判断される。

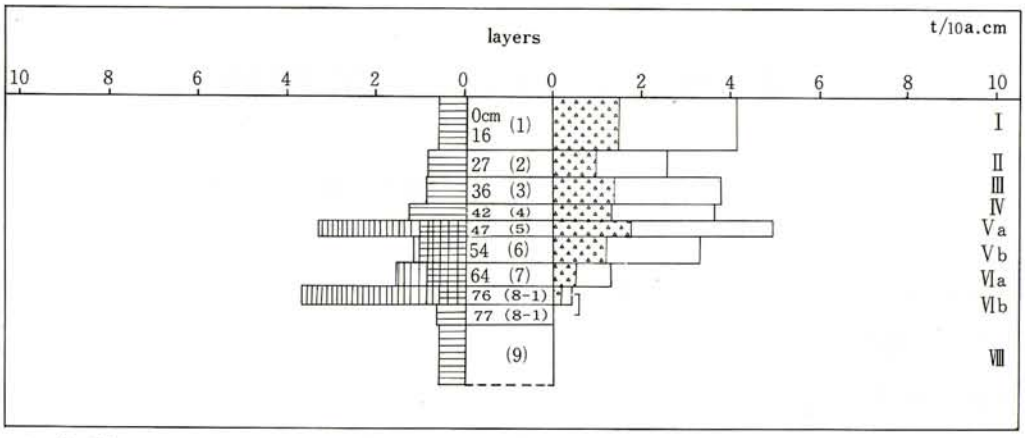
○７層～８－１層ではイネの量が少なく、短期間に利用された水田跡であるとも考えられるが、周辺部からの流入の可能性もある。

○８－２層と９層は水田跡ではないと考えられる。

○５層～８－１層は比較的湿潤な堆積環境だったと思われる。



第47図　プラントオパール分析データ



2．市川橋A-13　11/23 '84

第48図　プラントオパール分析データ

〈グラフの見方について〉

1．Iayers　：採取地点の土層模式図、(　)内の数字は土層番号、左すみの小数字は表層からの深さをcmで表わしたもの。

2．O. sati.　：Oryza sativa 栽培稲の地上部乾物重。

rice.g　：Oryza sativa の穎果(籾)乾物重。

Phrag．　：Phramites communis. ヨシの地上部乾物重。

Bamb.　：Bambsaceae. タケ亜科の地上部乾物重。

各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壌中から検出された各植物に由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。

3．土柱模式図の右側に栽培植物、同左側に野・雑草を示している。単位t/10a.cmは その土層の厚さ1cm、面積10a (1000m) に包含されるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量をt (トン、1×10^3 kg) で表わしたものである。例えば、その土層が10cmの厚みであると、グラフで示された値に10を乗じた量の植物体がその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意されたい。

4．水田跡が埋蔵されている土層では O. sati.の値がピークを形成する場合が多い。土層の堆積状況により一概にいえないが、水田跡の層位はこのピークと一致するのが通例である。

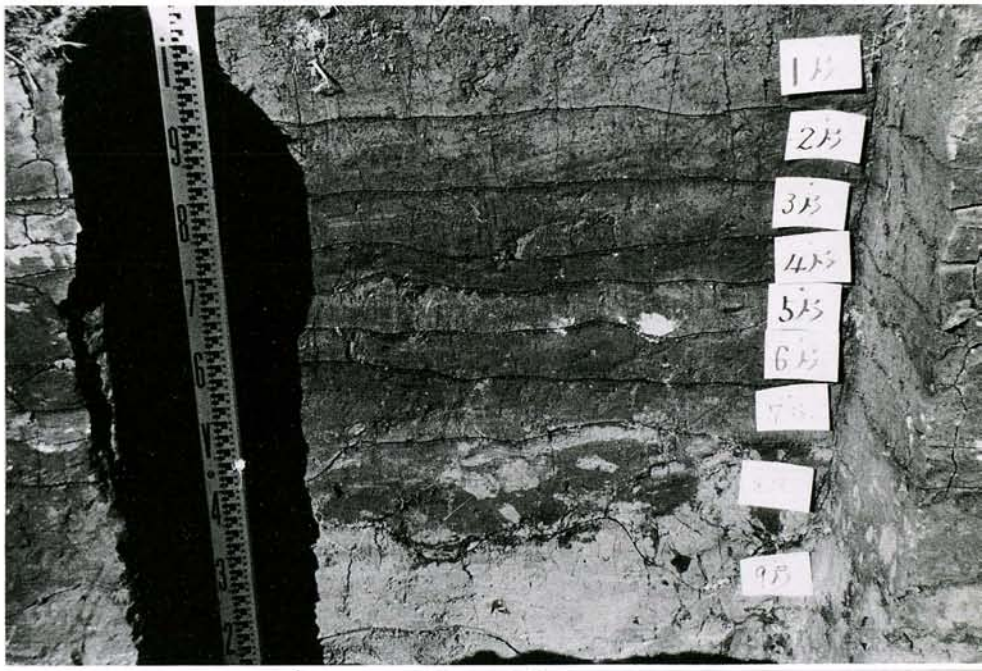
5．Phrag.(ヨシ)、 Bamb.(タケ)の乾物量変遷はその地点における土壌水分状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し、タケ(ササ)は比較的乾燥した環境下に繁茂する。両者の消長をみると、その地点の乾湿変化を推定できる。

6．最下段は遺跡名、採取地点、採取年月日を示す。

図　　版

図版1
調査区遠景
(北東より)

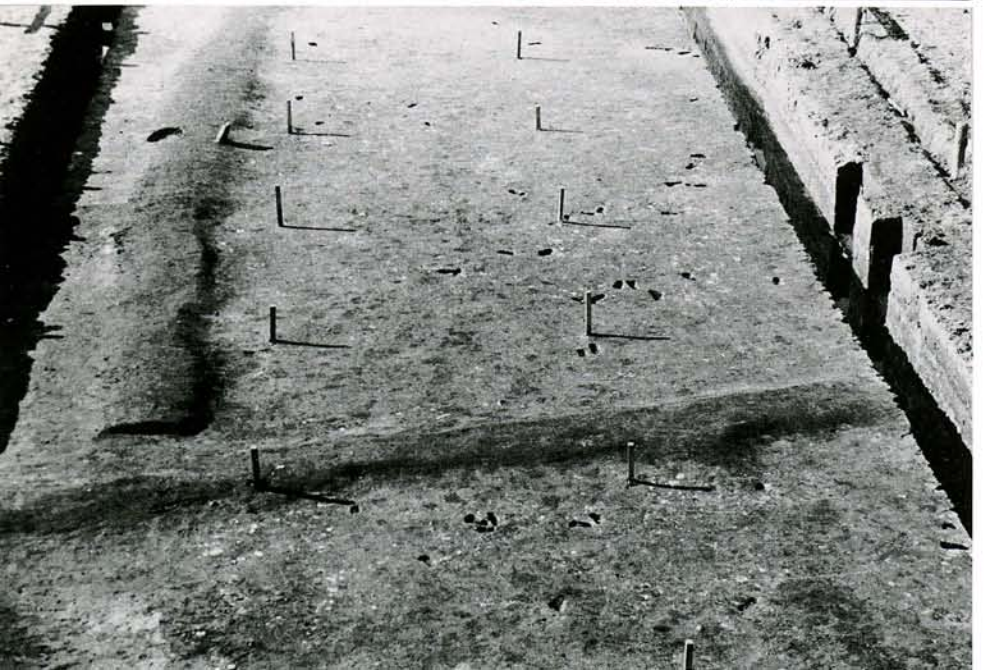
図版2
北壁土層断面
(A -13グリット付近)



図版3
南壁土層断面
(E -03グリット付近)

図版4
Ⅴ層水田跡検出状況
（東より）

図版5
Ⅵa層水田跡
畦畔検出状況
（南より）

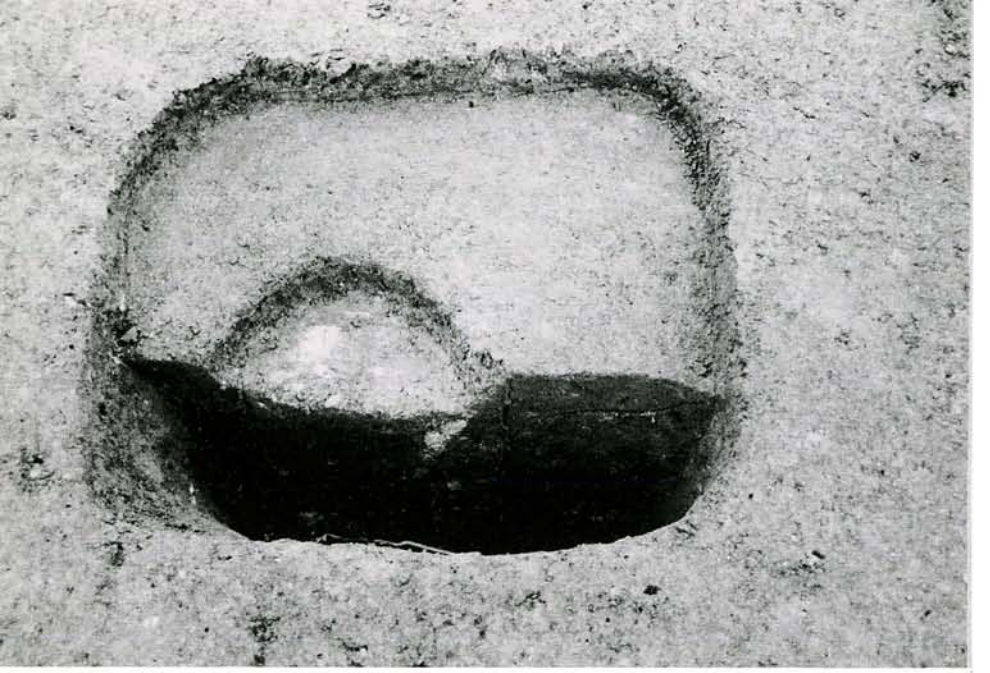


図版6
足跡検出状況
（東より）

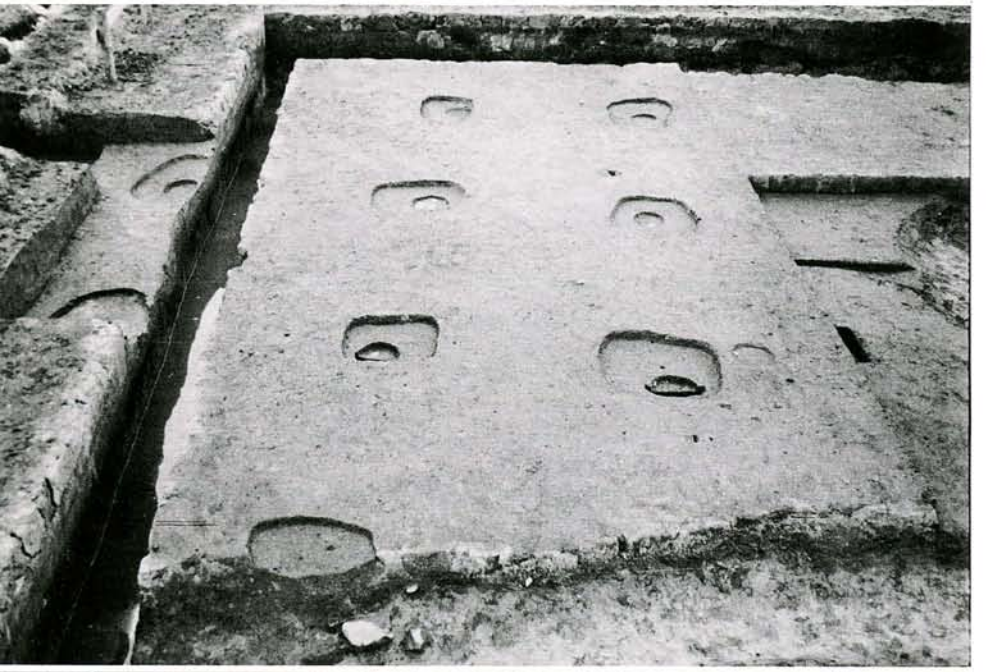
図版7
足跡検出状況
(No.16.17.18)

図版8
足跡掘り上げ状況

図版9
耕作痕掘り上げ状況
(南より)

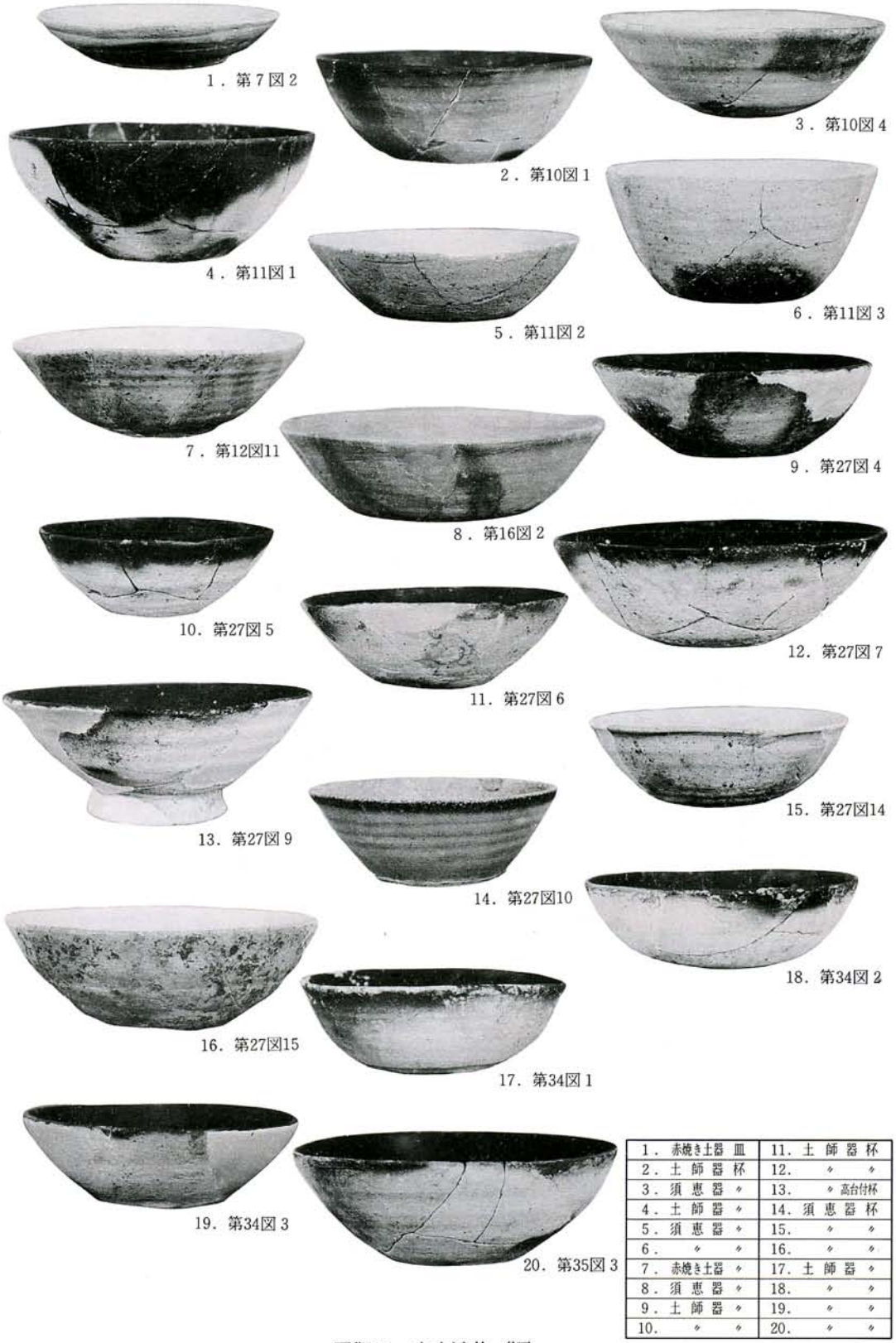


図版10
ＳＢ０１柱穴断面



図版11
ＳＢ０１
（南から）

図版12
ＳＡ０１・ＳＤ０５
（東から）



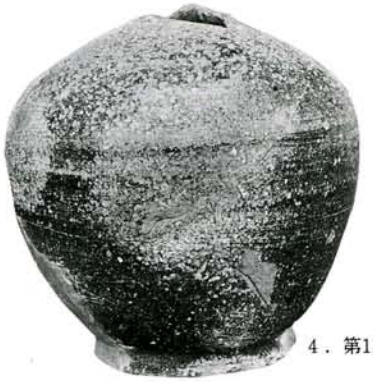
1．赤焼き土器 皿	11．土 師 器 杯
2．土 師 器 杯	12．〃 〃
3．須 恵 器 〃	13．〃 高台付杯
4．土 師 器 〃	14．須 恵 器 杯
5．須 恵 器 〃	15．〃 〃
6．〃 〃	16．〃 〃
7．赤焼き土器 〃	17．土 師 器 〃
8．須 恵 器 〃	18．〃 〃
9．土 師 器 〃	19．〃 〃
10．〃 〃	20．〃 〃

図版13　出土遺物（杯）

1．第7図9

2．第10図7

3．第11図6

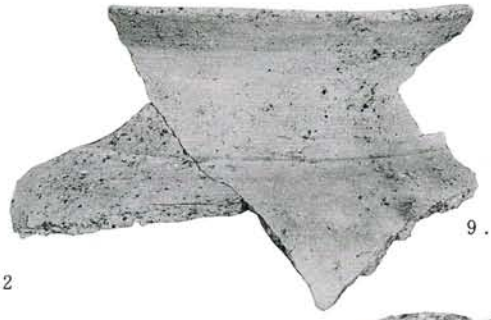


4．第11図7

5．第13図3

6．第26図1

7．第26図2



9．第31図5

8．第26図5

10．第39図1

12．第39図5

11．第39図4

1．不明土器	
2．須恵器	蓋
3．土師器	耳皿
4．須恵器	壺
5． 〃	〃
6．土師器	高杯
7．土師器	甕
8． 〃	〃
9． 〃	〃
10．軒丸瓦	
11．軒丸瓦	
12．	〃

図版14　出土遺物

1．第7図1

2．第7図4

4．第7図6

5．第10図15

6．第10図16

3．第7図5

7．第10図17

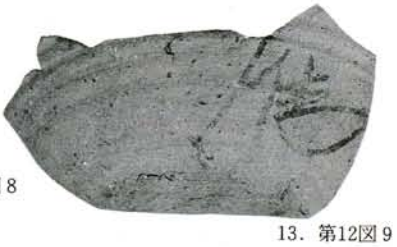
8

9．第27図17

10

11．第10図5

12．第12図8


13．第12図9

14．第19図1

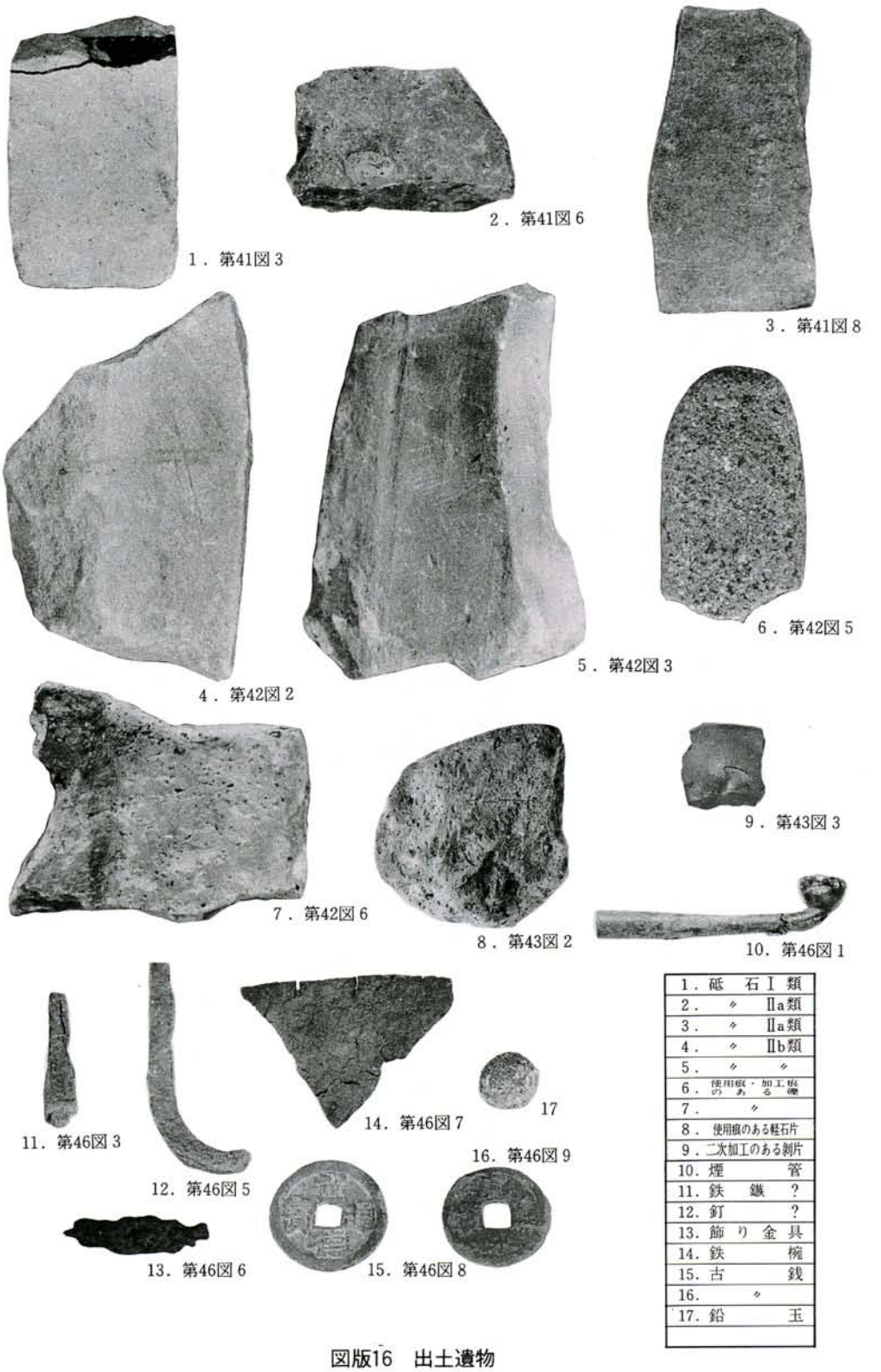
15．第22図4

16．第16図4

17．第16図5

1．灯	明 皿
2．古	瀬 戸
3．志	濃 皿
4．陶	器
5．灰釉陶器	椀
6．	〃 皿
7．	〃 皿
8．	〃 椀
9．須恵	器 壺
10．墨書土器	「前」
11．	〃 「□」
12．	〃 「文」
13．	〃 「往」
14．	〃 「得□」
15．	〃 「造」
16．円	面 硯
17．	〃

図版15　出土遺物



1．砥石	Ⅰ類
2．〃	Ⅱa類
3．〃	Ⅱa類
4．〃	Ⅱb類
5．〃	〃
6．使用痕・加工痕のある礫	
7．〃	
8．使用痕のある軽石片	
9．二次加工のある剥片	
10．煙管	
11．鉄鏃	?
12．釘	?
13．飾り金具	
14．鉄椀	
15．古銭	
16．〃	
17．鉛玉	

図版16　出土遺物

1．第34図13

2．第40図1

3．第40図2

4．第44図3

5．第44図1

6．第44図2

8．第45図1

9．第45図2

10．第45図7

7．第25図4

11．第45図12

12．第45図13

13．第45図14

14．第45図26

15．第45図27

16．第45図28

1．木製品	弓
2． 〃	分割材
3． 〃	杭
4．土	錘
5．	〃
6．	〃
7．	〃
8．円盤状土製品	
9．円盤状土製品	
10．	〃
11．	〃
12．	〃
13．	〃
14．	〃
15．	〃
16．	〃

図版17　出土遺物

多賀城市文化財調査報告書第８集

市　川　橋　遺　跡

— 昭和59年度発掘調査報告書 —

昭和60年３月31日発行

編集　多賀城市教育委員会
発行　多賀城市中央二丁目１番１号
　　ＴＥＬ（02236）８－１１４１
印刷　㈱東北プリント
　　仙台市立町２４番２４号
　　ＴＥＬ（0222）63-１１６６㈹